
魔法少女リリカルなのはS t r i k e r S 帝王の灯火

ぱむ～ん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 帝王の灯火

【Nコード】

N7866L

【作者名】

ぱむん

【あらすじ】

帝王は平和を祈って永久の眠りに就くはずだった…。
だが手に入れた奇跡の身体。「さあ、改革を始めよう…」
”魔法少女リリカルなのはStrikers 帝王の灯火” 始まります。

Episode - 0 (前書き)

初めての作品で駄文です。 いやゝ、素晴らしい作品を見ていたら「自分でも出来るのでは!」と書き始めてしまった。 更新は遅いです。それはもう遅いです。 しかも始めたばかりなのに他の作品を書こうとしてる愚か者でっす!

そんなばむゝんですがこれからがんばるのでよろしくお願いします

Episode - 0

燃え広がる王城

『くつくく、くははは！！！』

死者の転がる玉座で紅蓮に巻かれる男は狂ったように笑う
それと対峙する複数の王、男は片手を額に当てため息をついた

『同じ王として残念だ、数多の王が揃ってこんなものなのだからな
！？ああ、楽しかったのに、心地よい殺気、魔力の美しき軌道。
其れも此処までか、コレだけ減っては殺気も軌道も幾分色褪せる。』

心底残念そうに、其れでいてどこか楽しげに、芝居がかった動作で
天に両腕を掲げた

『だが誇れ！！この一戦はまさしく我が生涯で最高の戦場であつた
！！クハハハハ！！』

男は眼に涙を溜めながらまた狂ったように笑い出す

『貴様は、この期に及んでまだそんな事を言ってるのか！？貴様が
あんな事をやらなければこの地は緑豊かで戦乱期など来なかったも
のを！！』

足を引き摺りながら怒りを顕わにする若き王。

『あんな事とは言ってくれる。我に逆らったのだからあれは当然で
あろう？』

『貴様は狂っている!!』

気絶している女性を担ぐ壮年の王の怒号が響く

『百も承知よ!!……だがそれも此処まで、これ以上の戦場は我が一生にもう一度としてなからう。ならば、この戦場を最後に我が人生の幕を閉じよう……』

『な、バカな!?!ここまでしておいて自害を択ぶと言うのか!!』

『何を不思議がる?私が生粋の武人だったと言っただけだ。この先、生きて質の低い戦いでこの戦いを汚したくないだけだ……。お前達にも好都合だろう?討つべき相手が自ら死を択ぶのだから……。そら、火がそこまで迫ってきたぞ?我と共に心中するか?』

『く!?!お前に言われずとも、引かせてもらおう。さらばだ、帝王。もう見える事はないだろう』

女性を担いだまま壮年の王は抜け出していく。

『如何した?まさか本当に心中するつもりか?』

『そんな分けないだろ。すぐ行くさ……。さらばだ……。我が友よ……』

その一言を最後に若い王もいなくなる

『……友、か……。勿体無いよ……。クラウド……。オリヴィエ、さらばだ。このベルカの美しい青空と大地が永久に続くことを祈っている』

る…』

その言葉を最後に、帝王は炎の飲まれた…

Episode - 1 (前書き)

二話目投稿！このままいい感じでいけるといいな

Episode - 1

ここは、、、、、

『おお！！出来たぞ』

どこだ、、、、生体ポッド？、、、、

『我らの代弁者にして守護の象徴！かつて我らと同じように平和の為に奮起した者のクローン』

ああ、そうか……

『情報転写によってあらゆる常識、我らがやって来た数々の偉業、遺伝子もとの情報等の摩り込み、人の身のまま薬などによって無理やり引き上げた魔力、奴の話では最高傑作のようだ』

作られたのか、、、、

『そうでなければ困る、そのために奴が生まれたと言っても過言ではないのだからな』

それにしても、なんと言つ奇跡か……

『左様、我等が求めるものは最も優れた究極の指導者によって統べられる管理された世界、それこそすなわち平和』

どのような形であれ、また生を享けた、……、

『我等がその指導者を選び、その影で我等が世界を導かねばならん』

それならばまた、平和を願ひ行動するのみだ……

『旧暦の時代より世界を見守るために我が身を捨てて永らえた我々の悲願』

ああ、頭が割れそうだ……

『しかし、コレ一体に時間をかけ過ぎではないのか？』

平和と称してやってきた数多の非道……

『仕方ないだろう。情報量に脳が追い付かなかったのだから』

我はまた、あのような事をせねば成らんのだろうか……

『だがやはり、量産は出来ないな』

『良いのだ。指導者は二人も要らぬ。奴には、また戦闘機人の作成をさせればいい』

いや、過ちは繰返すべきではない。このような刷り込みごときで我が願いを踏みにじれはしないのだから……

『ならば、コレにデバイスを渡さなければ。文献通りならあれで良いはずだ』

こやつ等を如何にかせねば。我が願う平和とこやつ等の作ろうとしている平和は決して相容れないのだから。

しかし、ただ■すだけでは頭が挿げ変わるだけ変革が必要だ

『古代ベルカの法の王、我らの傀儡に相応しい』

証拠を押さえ世間に公表した上で裁きを…

某研究所

「さあ！我らが指導者！私が作り上げた貴方のデバイスです！お受け取りください！」

研究者の男が、十代の少年に頭を垂れ、何かを献上する様に円錐形のネックレス型デバイスを掲げる

始めましてマスター、突然ですがマスターのお名前と私の名前をください

「本当に突然だな。……。貴様の前任、”ピース・メイク”と言うのだが、そこからとって”ピース・ネイキッド”と言うのはどうだ？」

了解。”ピース・ネイキッド”で登録。マスターの名前をどうぞ

「シャルル、シャルル・グリーンフェルトだ」

マスター登録完了。よろしく願いします

一通り、デバイスとの情報交換が終わってからシャルルは男に視線を戻す

「お前は俺に何を望む」

「え？」

デバイスを手に取りながら少年が研究者に問い掛ける。

「そ、そんなの勿論、完全な平和！罪深きものはその家族共々処断し、逆らう者がでない恒久的な平和！それこそが私の望みです！」

興奮しながら語る男を冷ややかな目で眺める少年

「…違うな。お前はそんなことを望んでいるんじゃないだろ？付け加えるなら俺もそんな独裁を望んでいない」

「な、何を！？私は、評議会の方々の思想に共感し——」

「野心を抱くのは良いが、眼が濁りすぎだ。一体どれだけの人間を殺してきた？それにあの脳漿どもの、平和のために何をしても良いという考え方も、やってきた事も気に入らない」

「き、貴様はそのためにも生み出されたのだろうが！いいから貴様は言われたとおり殺せばいいんだよ！そうさ！殺して殺して！昔、貴様の複製元がやったみたいに死体の山を俺の前に築け！」

少年は溜息を着き肩を落した

「もう、支離滅裂だな。俺は今回を最後にもう殺しはしないよ……」

少年の呟きと同時に鈍い何かを引き裂いた音が鳴る

「え？あれ？…これなんだ？お…俺…の…腹から…う…で……」

全てを言い終わる前に男は事切れた

「…ネイキッドセットアップ、そしてこの施設にあるデータを全て取って自爆させてくれ」

白い甲冑に白いマント白い籠手。全身が白い姿の騎士がそこに現れる

はい、マスター

「外は吹雪か……」

少年は研究所の外を眺める。その瞳は決意の光が宿っていた

Episode - 1 (後書き)

えゝ、ばむゝんです。私は一応ヴィヴィッドまで書きたいなゝ、と思います、前話を作ったので主人公は王様でした。ヴィヴィッドに関して言えば単行本一冊だけなので戦乱期の理由を知りません。理由が分かったら一話の書き直しをします。理由が
では、ばむゝんでした！

Episode - 2 (前書き)

3話目投稿！調子が良い。このまま突き進めれば良いけどね。

この話は漫画版Strikersを参考に書いてます。

キャラが壊れてたらごめんなさい。

今後の展開は「最初のシリアスどこいた！？」的になるかもしれない
せん

Episode - 2

私は、夢を見ていました。数年前の、私を助けてくれた人の夢。

その当時の私は無茶な訓練と度重なる任務に耐え切れず、任務の途中に遭遇した未確認に負傷させられてしまった。

止めを刺される瞬間、銀の光が降り立った…。

白い白い雪の中、壊れる機械の破片の前に、白い白い服を着て、銀色の髪を靡かせた、赤い瞳の悲しい眼をした人。

その人が私に問います《まだ、飛びたいか？》と…。

私は薄れる視界の中で答えます《飛ぶのが好きなんだ…》と…。

その人は回復魔法を使うと止血をして何かを口ずさんだ後レイジングハートに何かを入れると行ってしまった。

行ってしまう！まだお礼を言っていない！

だけど私の身体は動かなくて、意識もそこで切れてしまった…。

「またあの人の夢か…」

大事な仕事の時にはいつも見る夢。まるで無理をしないように諭す様に…

あの時、人は私たち管理局以外いた形跡は無い。

でもあそこに確かに存在していた。
その証拠に今私の腕には彼（？）が着けていたと思われる腕輪をしている。

壊れていた腕輪は私の私物として回収され修繕、今私の大事なものになっている。

その当時は大変だった。

そのときの怪我は致命傷ではなかったが大きな障害を残し、お医者さんからもう飛ぶことができないと言われた。

絶望し、それでも諦め切れなかった私はあの時助けてくれた人のことを思い出した。

意識が朦朧としていたし、変声機を使っていたので性別の判断がつかないが、何かをレイジングハートに入れていたはず。

レイジングハートにそのときの物を出してもらって出てきた物は、

《また飛べることを祈っている…》

と言うメッセージと共に、ミッドチルダのある場所を示した地図だった。

私はその人の事を信じた。いや、信じるしかなかった。

そこは、ミッドチルダの町の裏を少し行った所の寂れた薬品店だった。

店に入ってでてきたのはお婆ちゃんといって良いほどの歳を重ねた人。

そこには外の寂れ具合とは対照的に医療設備が完備されていた。

あの人の事は、守秘義務として教えてもらえなかったが、その人によってリハビリが驚くほどスムーズにできた。

「学校の後は、久しぶりに皆揃ったの任務だ。皆で集まるのってどれくらいぶりだったけ？」

そしてリハビリが功を奏し、今こうして、好きな空を飛びながら笑顔を浮かべて任務に就ける。

『じゃ、改めて今日の任務の説明ねー。その世界にある遺跡発掘先を2つ回って、発見されたロストロギアを確保。最寄の基地で詳しい場所を聞いてモノを受け取ってアースラまで戻って本局まで護送！』

「平和な任務ですねえ」

『まっ、モノがロストロギアだから油断は禁物だけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの三人が揃って、もう一箇所にはシグナムとザフィーラが居るわけだから、まあ、多少の天変地異くらいなら何とかしちゃうよね』

『よろしく頼む』

「了解…っと。天変地異って少し言い過ぎだよな」

「いや、でも実際私ら結構大きい事やってるしな」

「良いんじゃないかな。私は皆が居ればどんなことでもどうにか出来ちゃいそうだし」

苦笑いのなのは、昔を思い出すはやて、フェイトはそんな二人に笑いかける

「それにしても今日は一日機嫌がいいね。如何したの、なのは？」

「うん、今日はこの夢みだからね」

そう言うてなのは、手首の腕輪を撫でる

「そうなんだ。私もあつてみたいな、なのはの大事な人」

「なんやって！？いつの間になのはちゃんに恋人が！？」

「そ、そんなんじゃないよ！ただまだ助けてもらったお礼がちゃん

と出来てないから。でもどんな人が全然覚えてないんだけどね…」

「逢えるといいね」

「ほほう、吊り橋効果ってやつやね」

「だから違っつてば！そ、それよりフェイトちゃんこそ、足長おじさんはどうなってるの？」

はやてがニヤニヤしながらなのはを見る、その視線に耐えられず、頬を赤らめ、急ぎ標的を差し出した

「フェイトちゃんにも好い人が！？」

「そう言うのじゃないよ、はやて。強い魔力や先天技能を持つてる子達に贈り物をしている人が居るみたいなんだよ。事実、私が保護した子達もそう言うのを貰ってるって子がいたんだ」

「へえ」。ほんとにリアル足長おじさんやん」

「うん。いい人みたいなんだけど、子供達からお礼の手紙を預かってるから、住所を調べただけど、幾ら調べても足取りが追えない

んだ。名前は包みに書いてあったから分かるんだけどね…」

フェイトが思案顔で考え始める

「ばれない様にしてるのに名前は書いてんの？怪しいなあ。まあ、いい人みたいだからええかもしれんけど。それより、見えてきたで」

「本当だ、でもあれって…？」

濛々と立ち昇る土煙、そこには見たことの無い機械兵器がいた…

Episode - 2 (後書き)

おかしい所だらけだけどおかしい所は報告ください。
ばむぐんでした！

Episode・3（前書き）

四話目です！

思いつきで書いてるので性格がころころ変わっていかないか心配です

Episode - 3

「此処か…。」

拘束服を着た男が降り立つ

「第162観測指定世界。レリックの遺跡がある場所。間違いないな、ネイキッド」

はい、マスター

「広域スキャン開始、マッドの玩具より先に確保する」

スキャン開始

「情報は随時報告」

はい……。マスター、魔力反応を複数検知

「いくつだ？」

強い反応が六つ、南にSオーバー3つA1つ、西にS1つ、AA1つです。おそらくその先にレリックがあると思われます。どちらに向われますか？

「よし、南だ！」

……。マスター、私の話を聞いていましたか？

「なにがだ？」

首で点滅して呆れるデバイスに素で分からないと返す主人

南にはSオーバーが三人も居るのですよ？西のほうが簡単です

「いや、無駄な戦いそのものが嫌だから、先に強いほう倒せば無条件であっちのレリックくれるかなと思ったんだが……」

確かにマスターが戦闘を行えばランクは大して問題に成らないでしょうが、増援の可能性とマスターの身体の問題として――

それから五分ミツチリ説教が始まった

「ああ、はいはい。悪かったって、だけでもう決めてしまったし、向ってるから遅いんだけど…」

なんと…！？

サイド：なのは

あの後、発掘員の救助、機械兵器の破壊を行ない、今はレリックと呼ばれるロストログアの護送を行っている

『皆さん気をつけて下さい！そちらに魔道師が接近してます。数1、推定ランクB！』

レリックの護送中、突然シャーリーからの連絡。

「……。未確認を作った犯罪者なら一人と言うのはおかしいね…」

「そやね、もしそうなら、何機か連れてきいひんとダメなんわかってるやろっし」

「と、言うことは第三者の介入…」

『は、早い！？後三十秒で接触します！嘘ホントにB！？もう――』

「ええよ、シャーリー。もう目の前に居るから」

私達の前にはバイザーを着けた拘束服の男がいた

「なるほど。俺のことを事前に捕捉していた訳か。優秀なオペレーターが居る様だ。……………はぁ」

捉えられないことに自信があつたのか、私達が大して驚きを示さなかった事に多少、驚いた後。

私達の顔を見て不意に溜息をこぼした。

Episode - 3 (後書き)

おかしな所言って下さい。ばむぐんでした！

Episode - 4 (前書き)

五話目！この後考えて無いや…

Episode - 4

俺の目の前には三人の少女と一騎の融合機が居た

「（ネイキッド。どうして言わなかったんだ？）」

（聞かれませんでしたので…）

……こいつ、最近素っ気無い気がする、俺何かやったっけ？
それはそれとして俺は彼女達を知っている

「ストレイト…！」

「…フェイトちゃん知ってるの？」

「うん、研究所を中心に狙う次元犯罪者、通称”ストレイト”事件
現場で何度かあったけどかなり強いよ」

「”ストレイト”。拘束か、見たままの名前をつけるんだな」

「なら、名前を覚えてくれるんですか？」

綺麗な金髪の少女、フェイト・T・ハラウンとは現場で何度かあしらった。

栗色のショート、バツテンヘアピンの八神はやてはある事で調べた行き当たり、白い服にツインテールの少女、高町なのはは、数年前、血塗れのところに遭遇している。

「それも良いかもしれないが、まず用事を済ませよう……。そちらが持つ【レリック】を戴けないか？」

「それは無理です、こちらも任務ですから……。それよりも貴方こそ捕まってくれませんか？」

三人は臨戦態勢のまま、いつでも対処できる距離を保っている。流石は管理局が誇るエース達ってところか

「ならしかたが無い。それなら……」

ゆっくりと足を動かす

「力尽く、ですか？」

3人は、動きに合わせる様にデバイスを向けてくる

「帰る！」

「「「え？」」」

サイド：なのは

その台詞が信じられない、とても軽いノリで「帰る！」なんだもん。口を空け変な顔になってしまっていた。

「って！なんでやねん！今、物凄くバトルのノリやったやんか！？なのに帰るで、空気ぶち壊しやん……」

いち早く正気に戻った、はやてちゃんが突っ込んだ

「いや、知り合い？と戦うのは気乗りがしないしあの玩具の持ち主の手に渡らないだけよしとしよう」

「本当に知ってる程度の関係ですけど、それも最悪な部類の……」

「玩具の持ち主？あの未確認の作り手を知ってるの!？」

「…知ってはいるが直接会話したことは無いな、向こうも俺を知ってるだろうが…。まあ、お互いに牽制しあう関係だ」

「そう言う事なら、ますます貴方を逃がすわけにはいきません!」

「いやまあ、逃げるけど…」

台詞の直後に突然私達の前に、砂の壁が押し寄せる

「な!？」

どうやら地上の土を何かで舞い上げたようだ。

「ははは!さようなら、御三方」

「むゝ!ラインもいますよ!」

「おっとすまない、小さなお嬢さん？」

砂が晴れると彼は目視出来ないほど遠くに居て私達では追いつけない

『対象、北東方面に逃走!』

「はやてちゃん!」

「わかってる!やるよ、リイン!」

「はいです!」

「『ユニゾン イン!』」

『そのままいくです!』

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ……フリースヴェルグ
!」

はやてちゃんの超長距離砲撃魔法、Bランクならこの砲撃は止められない!

降りたて、蒼き疾風よ、吹き荒ぶ風を此処に…

「え？」

聞こえる筈の無い声、二人も聞こえていたのか、困惑の顔をしていた。

そして、

『た、対象、ロスト…』

はやてちゃんの砲撃が相殺され、逃げられてしまった

「あちゃー、逃げられた。まさかあれ、防がれるやなんて。それにしてもあの人もあんなノリなん？」

「う、うん、だいたい……」

「変った人だったね…」

それから何事も無く私達は【レリック】を持ち帰り、聖王教会依頼で行われたロストログアの回収任務は終わりを告げ、襲撃などの真

相については教会と観測隊が静かに調査を進めることとなった

サイド：シャルル

マスター、御自愛ください。普通の戦闘ならいざ知らず、ジャケツトの換装もしないで無茶な詠唱は、マスターの身体が――

錠剤を呑み、落ち着いたシャルルはネイキッドを抑え、途中で話を止めた

「分かっているさ、ネイキッド。しかしあの情況に陥ったのはお前が報告しなかったからだぞ？」

……… 申し訳ありません

「別に責めてるわけじゃないんだ。お前と話していると昔の相棒を思い出すから楽しいんだ。落ち込まないでくれ」

… 相棒。それは女性人格でしたか？

「………は？」

突然訳の解らない事を言い出した。

いえ、少し気になっただけです。御気に為さらず……

そしてまた静かになった。

解らない。解らないが、

「いや、あいつは、男性人格だったな。それに考えても見ろ、メイクだぞ？マイクみたいで男っぽいだろ？」

とりあえず答えてみた。

それにこいつは今みたいに俺のことを聞くと言うことを、今までして来なかったから、AIは順調に成長中だな、と心の中で呟いた

なんですかそれは？シャレですか？シャレのつもりですか？

「え？いや、なに？」

論外ですね、最悪ですね、センスを疑います。じゃあ、私は何ですか、ネイキッドだから、キッドで、子供ですか？男ですか？シャレでも傷つきました。私はレディーです。撤回を要求します

一気にまくし立てて来た。ちょっとした冗談だったんだが…

しかもレディーって

「え、と、すみませんでした。以後気をつけます」

……まあ、いいでしょう

疲れた……

Episode - 4 (後書き)

一話ずつ短いかなと思いい少し長くしてみた。

これでも少ないだろうが、がんばった。

毎回これ以上書く作者の皆さんを尊敬してしまう。

と言う事でこの話で分かるように主人公は管理局でもスカリエツ
イ側でもない、第3勢力として孤独に頑張っていくつもりです。
てか、オリキャラの設定が思いつかない、有っても物語り崩れそ
うで怖いんで出さないと思います。この設定で続くんだろうか…。
ばむぐんでした！

Episode - 5 (前書き)

やはり日が空いてしまった。書くのは時間が掛かるなあ。

Episode - 5

二週間後 ミッドチルダ北部 臨海空港前林道

「いや、今日はよく晴れて絶好の写真日和だな」

白いシャツに黒いジーンパンというラフな格好に、カメラを首に、肩に荷物を背負い、腰まで届く銀髪を首の後ろ辺りで紅い紐で束ねている。

マスター、その台詞は天候に関係なく変わっていませんか？

ベンチで休んでいたら、首に掛かったカメラから声がする。どうやらデバイスのようだ

「何を言ってるんだ？晴れには晴れの、雨には雨の表情があるんだ。毎回違うさ。それに写真は一応、仕事だぞ」

どうだか…

「最近冷たいな……。さて、今日で間違いないな？ネイキッド」

周りに人が居ないのを確認し、問い掛ける

…！。間違いありません。今日の四時の便、その荷物として届きます。密輸品としてですが…

「そうか、やっぱり護送中は無理なのか？」

魔力結晶体と言っても使われて無ければただの石ですから探知は困難です。さらに封印処理も当然されている筈ですからほぼ不可能です

「空港に押し入るしかないが、人が多すぎると余計な怪我人が出る。護送中に奪えればベストなんだが、目的地が分からなければどうしようも無い。ままならないな……」

今日、この地に赴いたのは、管理局で発見した【レリック】を最高評議会がスカリエッティに秘密裏に送るという情報を入手したためである

…。マッ「おお！？あんな所にリス！？首都と違って自然が多いが、野生の動物まで居るとは！」死んでしまえ…

ベンチから立ち上がり、荷物も忘れて、カメラ片手にリスを追いかける森の中へ。

「ふう〜。いいのが何枚か撮れたな！」

数十分かけて森で撮影してから荷物を忘れていたことに気づき森から出てきた。

マスター、今度の個展に向けての作品は決まりましたか？

「ああ、それなら後、数枚なんだが！？…ぐ！？」

マスター！？

ベンチまで後数メートルというところで突然体中に痛みが走る。

（なんでだ！？…少し前に薬は飲んだはず！？また…間隔が…短く…）

胸をかきむしり、這い蹲りながら、ずりずりとベンチに近づく。

しかし、そのスピードは遅く、距離がなかなか縮まらない。何時しかその移動すら行わず、身体を曲げ苦しみだした

（も、もう…少し……なのに!？）

「だ、大丈夫ですか!？」

「凄い汗…。とにかく病院に!」

そのとき、こちらを心配する二人の声が聞こえた。

「く、薬を…!ベン、チ…の!」

それ言うだけで体力の全てを使ったような疲労感に包まれた。

サイド…なのは

「ふえゝ、ミッドの地上も首都と北側だと結構違うねえ」

「こっちのほうは自然が多いから観光スポット多いよ」

私達は、はやてちゃんの研修先に遊びに行くため休暇をとった。

「それで、はやてが取ったホテルってどこなの？」

「あ、それならここから十分くらい歩いたところだったと思うよ」

さっきリインに連絡して教えてもらったから場所は大丈夫！

「それと、はやてちゃんは少し遅くなるってリインが言ってたから、もう少し奥まで行ってみようよ」

「え？でもそっちの方は何もないはずだよ？」

指差す先は芝と木々が植えられた人工的な林道。一応、整備が成された道があり進むことが出来る

「でも向こうにベンチが見えたよ？」

「本当？おかしいね、そんな所聞いたこと無いけど」

「それじゃ行ってみよう?」

そして林道に、歩を進める。

そこは日の光が葉の間から差し込み、綺麗な木漏れ日を作っていた

「うわー、綺麗だねフェイトちゃん!」

私達は最近あった仕事の話をしながら進む。
だがそこで丁度拓けた広場のような場所に差し掛かったとき、その人は居た。

「なのは!人が倒れてる!」

ベンチから数メートル離れた場所、そこで苦しみもがいてる人がいた

「だ、大丈夫ですか!?」

「凄い汗…。とにかく病院に!」

フエイトちゃんが端末に手をかけたときに、倒れてる人がその手を掴んだ

「く、薬を…！ベン、チ…の！」

視線を送ると確かに、この人の荷物らしき物がベンチの上に置かれていた。

私はすぐに、ベンチに駆け寄り荷物を開ける。

カメラ、フィルム数個、メモリー数個、三脚にチケット。およそそれらしい物は見当たらない、焦りながらも選別しながら探していくと、小さな小瓶と飲み物が見付かった

「これですか！？」

駆け寄っててにもつ瓶と飲み物を渡す。

震える手で薬を飲むと暫くして直ぐに顔色が良くなっていく
数分すると、額に汗を滲ませているが、すっかり体調が元に戻ったのか、立ち上がり笑顔を見せた、その笑いと異彩色の瞳はとても綺麗で僅かに見惚れた自分に気付き少し頬が赤らんだ

「いやゝ、助かりました。本当にご迷惑をお掛けしまし…だあっ！？」

が、その笑みは私達を見て固まった。

サイド：シャルル

目の前に居るのは少し前に遭った、管理局の少女達
余りにも出来すぎた偶然に、僅かに顔が引きつった。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「まだどこか悪いのかな？」

固まってしまったことに心配したようだ

「あーいや、なんでもないですよ。大丈夫です。それよりもこのお
礼をさせて貰いたいので、この後空いていますか？もし宜しければ、
食事でも奢らせて欲しいんですが…」

「えー！いいですよ、そんな。このくらいの事で…」

「うん、それにもう一人、この後合流しないといけないしね」

「ならその方も一緒にどうですか？それにこのくらいと言いますが、あのまま放置されてたら、命の危険があっただんです。今は食事くらいしか何もお礼するものが無いので、気に入らなければ後日何か準備しますが…」

相手が誰であろうと、助けられたのだから何かしないと、気が済まない性分だ。

「ふえ〜！？そんな、気に入らないだなんて…」

「だったら、奢って貰っちゃおうか、なのは」

「本当ですか！？よかった…。丁度、近くに美味しいお店があるんですよ。わりと有名なんでもう一人もそこで待ち合わせればいいと思うんですがどうですか？」

その後待ち合わせも決まり、三人でお店に向うことになった…

Episode - 5 (後書き)

内容が少しグダグダですが、この後の話で空港火災を載せますので、日常と戦場の前後編だと思ってください。次と一緒に設定なんかを載せる予定です。

では、ばむ〜んでした！

Episode - 6 (前書き)

.....一万PV、これは夢か？

書き上がったのを投稿しようとしたら驚くべき数字、こんな作品を見ていただいてありがとうございます。

今後も更新速度はこんな感じでいけたら良いなと思ってます。なんせ書くのが遅いので…

と言う事で本編へどうぞ！

Episode - 6

「あ、おーい！なのはちゃん、フェイトちゃん！と……誰？」

「イケメンさんがいるですよ」

店の近くに行くと、既にはやてとラインが待っていた

「「「あ、自己紹介してなかった……」」」

「へ？」

微妙な間が出来てしまったのは言うまでも無い……

「へへ、そんな事があったんや」

「ああ、しかもあの場所は、所謂、穴場でほとんど人が来ないんだ」

「それは大変だったですね、身体は平気ですか」

「大丈夫だよ、ありがとう、お嬢ちゃん」

自己紹介をしてから、どういう経緯があったか説明をしていた。
ちなみに同い年と言うことで溜め口で話せと（はやてに）強要された

「…。シャルル、どつかで聞いたような？何処だっけ？」

フェイトは名前を明かしてからずっと考え込んでいる。どうしたんだ？

「立ち話もなんだから、そろそろ入ろうか」

「え、でも…」

目の前には目当てのレストラン。しかしそこには長蛇の列が数百メートルも並んでいた

「大丈夫だよ……。こんにちは！店長！」

躊躇うことなく列の脇を通り店に入ってしまった

「ええ！ちよつと！」

「いいのかな？」

「とりあえず着いて行く？」

中に入ると、満席でとても活気に満ちていた

「ああん？何だ手前等？食いたきゃ並べ！！」

厨房から、筋肉質のおじさんが出てきた

「こんにちは店長！」

シャルルが話しかけると

「おお！？シャル坊じゃねえか！」

とても気さくな返事を返した

「席空いてますか？どうしてもこの子達にこの店の料理を食べても

らいたくて…」

「おう！待ってる！すぐ空けてやる！無くても空ける！おい！！四名様、すぐ空ける！！」

それから本当にすぐ、席が空き、店長は店の奥に戻っていった

「…どう言う知り合いなん？」

「並ばなくて良いのは良かったけどなんか居た堪れないね」

「ああ、その辺は平気だよ。一応仕事って事になってるから」

「仕事？何やってる人なん？」

シャルルは首のカメラを見せる

「へー、シャルルってカメラマンなんだ」

「あ！そういえば荷物の中にそれっぽいのが結構あったね」

「そう、結構いろんな世界の風景とか色々撮ってるんだ。で、今日はこのお店の写真」

それから料理が運ばれてきた後も、どんな世界に行った、どんな景色が綺麗だったなど、聞かれるがままに答えていった。

ちなみに料理は注文もしてないのに店長が勝手に持ってきた、この店自慢の一品らしい

「そうだ！このチケットあげるよ」

「個展のチケット？こんなの貰えないよ、奢って貰ってさらに何か貰うなんて…」

「いや、これ元が、ただなんだ…。その個展、俺が開くものだからね、だから持つててもしょうがないし、あげるような人も居ないから、貰ってくれないと捨てることになっちゃうんだ…」

その言葉に目が点になる

「もしかして結構有名な人？」

三人の視線が集まり、苦笑いしながらも考え込む

「どうだろ？結構いろんな雑誌で使ってもらってるけど…。とりあえず、興味があつたら来てくれ。話した風景とか、展示してるから」

それから運ばれてきた料理に舌鼓を打った。

「いやゝ、美味しかったわゝ。噂どりのお店やったな、これならあんなに並ぶのも願けるわ」

「そうだね、こんなに食べたのも久しぶりだし」

「うん、今度は皆も誘っていいこうよ」

「気に入って頂けて幸いだ。今度行くときは予約をするといいよ。
…誘っておいて申し訳ないが、この後用事があるんでこれで失礼させてもらつよ。縁があればまた――」

食事を終わると時間は丁度四時に差し掛かっていた。
少し慌てながら、その場を後にしようとしたとき

《ドゴオオォーンッ！！！！》

その音の原因はすぐに解った。
今自分が向おうとしていた方向、つまり空港。

（マスター、空港から魔力爆発、おそらく【レリック】が暴走したことが原因だと思われます）

大方、荷物の仕分けをする人間が大雑把に扱ったのが封印処理を解いてしまったんだろう。

すぐに駆けつけたいが今は拙い、この場には管理局に所属する三人が居る、ネイキッドのセットアップが出来ない

（くそ！！なんてタイミングだ！）

軽く毒づきながら、煙が昇るほうを睨む

「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

「うん、とりあえず現場に行ってみよう！」

「『セーットアップ!』」

「それじゃあね、シャルル君。これありがとう、きっと行くからね」

三人はそのまま、空港まで飛び立っていった

「間に合うか?」

勿論です、マスターのスピードなら運び出される前に――

「違う。救助のほうだ、彼女達だけで足りるか?」

……。正直、難しいでしょう。近隣の陸士、航空、共に緊急召集が出されてるようですが、時間が圧倒的に足りません。組織と言うものは往々にして動かすのに時間が掛かるものですから……

野次馬たちを避けながら空港に向って走っている。

「それならば救助優先だ」

しかし、マスター。そうすると【レリック】が管理局に渡ってしまいませんか？

人が居ない道に進むとセツトアップをして飛び上がる

「それならそれでしょうがない。犠牲者を可能な限り出さない…。それがエゴだと解っていても、悲しむ人は少ないに越したことはないのだから…」

…。犯罪者である我々には似合わない話です

「ハハ、違うない…」

紅く燃える空港、炎と爆発によって今にも崩れ落ちそうな建物、大多数の人が既に避難を終えてるようだが、イレギュラーは起こるものだ、今こうして空港が燃えてるのもイレギュラーなのだから

「打ち抜くぞ、ネイキッド」

了解

スピードを緩めずそのまま建物に突貫。そのまま降り立つ

「火は最後の瞬間を思い出すから好きになれないな…」

マスター、感傷に浸るのは後にしてください。近くに生体反応です」

「すまないな。いくぞ！」

「何故こうも、彼女達とのエンカウント率が高いんだ？」

行動の積み重ねです。しかも今回はいるのが解っていて来たんじゃないですか

目の前には短髪で青い髪の少女を抱いている高町なのはがいた。鋭い視線が刺さる

「この火災は貴方が…？」

「犯罪者が現場に居ればその考えにいたるのは正しいが、今回のことはNOと答えておこう。こんな事しても俺には利益はないし愉快犯ではない、テロリストではあるが…」

「じゃあ、どうして…。」

「信じる信じないは任せるが、大規模火災だ、人手が足りないと思っ
つてな。救助を手伝う、そのことを連れて行くんだろ？」

「え？あ、はい！」

「なら俺が道を作ろう。…ネイキッド」

マスター、まさか…

「ああ、バリアジャケットに換装だ。時間がない、文句は後で全て
聞く、ここは言う通りにしてくれ」

…了解しました。——ジャケット換装——

身体が光に包まれた…

サイド：なのは

ジャケットの換装？それを聞いて首を傾げる。

通常そんなことはしない、術者の魔力で作られるバリアジャケットは幾ら形を変えても防御力が変わらず、意味がないからだ

光が収まり、そして、純白が舞った…

「…え？」

この光景になのはは、ある懐かしさを覚えた。

そしてその感覚が正しいことを示すかのように、デバイスで腕が覆われ見えなくなる前に彼の腕に、自分と同じ腕輪を見た。
すると彼は拳同士を打ちつけた

「飛んでくる瓦礫に気を付けろ…」

呆然と眺めていたらそんな声が届いた。

見ると彼は腰を落し何かの構えを取っていた。

「ネイキッド、カートリッジロード！」

了解

彼のデバイスは籠手、それは肘まで伸び、腕の数倍の太さを持っていた。

頂点が丸い正三角形のベルカ式の魔法陣、その両手のデバイスから、一発ずつ薬莢が落ちる

「聴かせてやる狂嵐の声を！！《疾風穿孔》！！」

魔力光はその姿とは対照的な黒、それも漆黒と呼んでも良いほどの黒さ。眩しいほど暗いと言うのを始めて体験した。ベルカ式は射撃が不得手とされている筈だが、彼が放ったのは紛れもなく砲撃、私の放つものと比べても遜色ない様に見える。

「行け、高町なのは！」

燃える空港と暗くなり始めた時間、さらにバイザーによって、彼がどのような顔か、解らない。だが厳しい声の中には、確かな優しさが汲み取れた。

「貴方は！？」

「俺はこれからエリアサーチと消火に移る」

「あの！私、貴方と話がしたい！この事、あのときの事、色々！これが終つたらゆつくり話を…」

腕輪を見せ、あのときの人か、気になった。あれは彼だったのか？彼なら何故助けたのか？何故犯罪などを犯しているのか？聞きたいことは山ほどあるが、今の状況がそれをさせないため、彼女なりの妥協案を出した

「ならば早く行くことだ、俺は待ったりはしないからな。話がしたければ早く彼女を安心できるところまで運び、その上で俺を捕まえる」

「はい！それじゃ、ストレイトさん、また後で」
「ちよつと待て！」

「はい？」

「そのストレイトというのは、止めてくれないか？俺はシャ　マスタ―…　ゴホン、本名は言えないが、俺は【帝王】と呼ばれている」

危険地帯のはずなのに、緩やかに自己紹介が行なわれた

「はい！それじゃ帝王さん、行つて来ます！」

私は飛ぶ、出来るだけ早く、スバルに負担がないように優しく、目的が変わっているが、今はそんなことは気にならない

私が飛び立つ前に『お帰りこの大空に…』という彼の言葉が聞こえ、あの時の人が彼であると確信し、胸が熱くなる。やっと遭えた、今私の胸の内にあるのはその想いだけだった

サイド：シャルル

「お帰りこの大空に…」

彼女の飛び立つ瞬間、そんな言葉を投げてしまった。

マスター、名前言いそうになりましたね…

「げ…！？」

ハア…。それはもう良いです。もう一箇所、生体反応があります

数は二、一人は魔導師のようです。如何されますか？

「おそらく、テストロツサ嬢だろう。それに、反応が解ると言う事は俺の『アレ』が着いたんだ。彼女の補佐には、十分だ。これより消火を始める」

了解

サイド：フエイト

私はギンガを抱えて飛ぶ、だが炎が爆発を誘発し眼前に瓦礫が立ちふさがった

「く！？また爆発。急がないと……」

腕の中のギンガに大丈夫だと告げて新しい道を探す。
そのとき、

「う、上！？」

また建物が崩れて落ちてくる瓦礫、今度はかなり大きく真上に迫っ

ていた

ギンガを抱えているため無理な魔法行使は行なえない

（ダメ！間に合わない！）

だがそれは次の瞬間碎け散った

「え…？あれは…鎖？」

目の前には黒い光を帯びた鎖が天井から垂れ下がっていた。

その鎖はまるで意識があるかのように、こちらに振り向き、頭（？）を下げてきたので、私はつられて頭を下げてしまった。

その鎖は私たちの無事を確認すると蛇のようにクネクネ動きながらこの場を後にした

「何だっただんどう…？」

サイド：シャルル

放たれた鎖は数十本、シャルルを中心に移動する。

火が強いところに。

邪魔なものは碎きながら鎖はただ進む、主が決めた地点まで…

「よし、所定の位置に着いたな。エリアサーチ用の鎖を消すぞ」

はい、この位置がもつとも効率的に鎮火が行えるでしょう

「……抱擁する、清らかな水よ、邪を払う水流よ、この手に集い流せ！」

魔法名を叫ぶと水の音が六つ、シャルルと放たれた鎖から水が出てくる。

その水量はあつと言う間に空港を満たし、溢れる水は海に流れていった

遠隔操作している鎖から魔法が放たれる、便利なものですね……。マスターの固有技能でしたね、あの鎖は。名称は『帝王の鎖』ベルカの王族であるマスターだけが持つレアスキル

「説明してるとこ悪いが、そろそろ転移の準備だ。早くしないとあのお嬢さんたちが駆けつけてくる」

話をするのではなかったのですか？

「言っただろ？」捕まえろ”って逃げれば話す必要は無い…。時が来れば解ることだ」

詐欺ですね、まあ、良いでしょう転移します

こうして臨海空港の大規模火災は利用者、局員とも多数の負傷者を出し、施設のほぼ全てが消失する記録的な事故ながら、死亡者は出なかった。

奇跡のようなその鎮火救出劇において、現場に居合わせた三人の魔導師と次元犯罪者の働きがあったことは、余り知る者のない真実である

数日後

《ピンポーン》

シャルルが住むマンションの部屋に来訪者が現れた

「どちら様でしょう……か」

扉を開けると何故か

「今度、隣に引っ越してきました。八神います、よろしくお願いします」

八神はやてと守護騎士たちが立っていた

「……………え？」

Episode - 6 (後書き)

いけない、スバルとギンガが空気になった…。
そしてこんなに長く書けるとは思わなかった。さらに技名が思いつかない

とりあえずこの後の展開なのですがそのまま何話かオリジナルを絡めて行きます。

なのは分が多すぎて、他二名のフラグが…

フフフ…。StrikerS本編が遠いなあ……

ではではむぐんでした！

オリキャラ作ったほうが良いか悩み中――

主人公設定（前書き）

ここまでの主人公の詳細です

主人公設定

シャルル・グリーンフェルト

主人公、古代ベルカの帝王のクローンだがクローニングの際数々の偶然が重なり、生前、帝王当時の記憶を持つ

世界を護るため自ら汚名を着都市一つを消滅させる。(Strike er S 編では語られる予定はありません)

戦闘スタイルは徒手空拳が基本だが、古代ベルカ王族の持つ固有スキルで【帝王の鎖】を使う

その鎖は遠隔操作と自律制御の二通りの選択が出来、自律制御時の鎖単体の能力は、Aランク相当である。また遠隔操作時は鎖を介して魔法を放つことも可能である

五ランクダウン相当のリミッターをつけている。

(尚、この小説ではリミッターは最大五ランクという設定で行きます)

病気を患っている模様。常備薬あり

ピース・ネイキッド

シャルルのデバイス、最高評議会の指示で作成されたワンオフ機待機時は三角錐のペンダント、そして何故かカメラにもなる

形状は肘まで伸び腕の数倍の太さを持っているほど大きな籠手、色は白

バリアジャケットを二種類持ちその一つは拘束服で着用者の魔力をリミッター以上に抑える役割を担っている。もう一つの形状は白を基調とした配色がされた騎士甲冑である

主人公設定（後書き）

いかがでしたでしょうか？自分としては割りと詰めたと思うんですが…

今後主人公の詳細が本編のほうで変化があれば、ここに書き足すのではなく、新しい話として上げていきます。べ、別に話数を稼ぎたいからじゃないからね！？

Episode - 7 (前書き)

随分掛かってしまった。

ネタが無いからずっとこれ位のペースかな…。

と言うことで、更新！

Episode - 7

「いやー、偶然であるもんやね。まさかシャルル君がお隣やなんて」

「ああ、俺も驚いたよ、あの火災以来だからね。見た限り大丈夫そうだね」

「当たり前や、これでも私はかなり強いんやで」

あの後、立ち話もなんだと言う事で、家にも上がってもらった

「なあ、はやて、こいつ何なんだ？」

「そうです、主。説明をして欲しいのですが」

見た目、。学生の赤毛の少女、ヴィータがはやてに聞き、それにつられる形で、ピンクのポニーテールの女性、シグナムが詰めより、後ろで金髪の女性、シャマルがその光景を興味津々の様子で見ている、さらにその横には我関せずの、犬……違った、狼であるザフィーラがいた。

はやてはその迫力に押されながらも、シャルルとの出会いを語った、と言っても一緒に食事をしただけだが…

その光景は自分にとっては懐かしく、大切なものであると同時に、悲しい記憶を引き出す

「いい光景だ、写真を――」

その光景を見て思わず

《パシヤッ》

「ちょ！？何とつてるん！？」

「とてもいい被写体だったからね。つい勝手に…。申し訳ない、どうしても言うのなら消すが…」

と、消そうとしたら、

「はやて！ずりいぞ！あそこのアイスはすげえ旨いって評判なんだぞ！？」

ヴィータが食事をした店の事を聞き、泣きそうな顔をしていた。
そんなに食べたいものなのか…？

その後はヴィータを宥めるだけで時間を使い、最終的には俺が予約を取ると言ったことで決着した。合って早々何やってるんだ、と思ったが最後に

「お前良い奴だな！」

と言われたので少しだけ報われた気分になった

さらに数日後

買い物の帰りに、最近静かだったネイキッドが話しかけてきた

（マスター、違法研究所を発見しました。これもやはり管理局との繋がりが濃いです）

（そうか、なら数日以内にはその研究所に行くぞ）

（了解）

違法研究所を探すために、ほぼ全てのリソースを使っているため普段静かなことが多いがこいつの調べることは信頼性がとても高く今まで外れたことがない。

と話しながら歩いていたら家の扉の前でシャルマルと遭遇した

「あら、シャルル君、ちょうどよかった。よかったら家に着てくれないかしら、今、料理してるんだけど味見してくれる人がいなくて」

最近、近所付き合いとして、よく話すようになった八神家、本当は余り仲良くなるのは不味いのだが、彼女達を見ているとどうも後ろ髪を引かれる思いをしてしまう。

「良いですよ、これでも味には結構詳しいですからね」

そして八神家に招待された

サイド：はやて

私は仕事が終わリザフィーラと共に帰宅する時間、マンションの前

でシグナムとヴィータにあった。だが二人は一向に入ろうとしない

「？如何したんや？二人とも」

「ああ、主、それなのですが…」

「はやて、アレ…」

二人が指差す先には私たちの部屋の窓、そこまでは良かったが

「あかん。シャマルが料理してる…」

窓から出てくる不思議な色の煙、それだけで私らが置かれた絶体絶命の状況が理解できてしまった。というか何故あんな色が料理で出せるのか解らないから凄い

「如何するアレ？」

「とりあえず入らな、どうしようも——」

「あ、皆、帰ってきたんですね」

マンションの玄関からシャルマルが顔を出した

「…シャルマル、何処行くん？」

「シャルル君に、味見をお願いしてたんですけど、食材を切らしてしまつて、今から食材の買出しに行くんです」

とても良い笑顔で、話すシャルマルにはやてを含めた全員が、顔を青くしていく

（あかんで、引っ越してから一月も経つてへんのに、問題を起こしてしまうとは…）

スキップしてしまうんじゃないかなろうかと言うほど、上機嫌で食材を買いに行くシャルマル、その背中を見送った彼女らは急ぎ部屋に戻つて、容態の確認に戻った

「あ、お邪魔してます、はやて。食事まで摂らせてもらつて、申し訳ないね」

リビングに辿り着くと、そこには試作品と思われる料理の数々に、それを物ともせず食べ続けるシャルルの姿があった

「平気なん…?」

「何が?」

本気で聞いたことが解らないようだ

「いや、シャル、料理はその…下手やから…。」

「ああ、そのことが、彼女は確かに色々、手を加えすぎるけど基本的に簡単なものなら出来るみたいだし、これから簡単なものだけ作ってみてもらう所なんだ」

「でも今食べてるんは、所謂、手を加えすぎたものちゃうん?」

「うん、確かに——とか——とかを入れるのは失敗だけど、食べられるし…」

あかん名前聞いただけで気持ち悪くなった。しかもその食材(?)

どうやって手に入れた！？

それからシャルマルによる、『手間を加えない簡単な料理』が振舞われた。その出来も型崩れが激しく完璧とは言えないが、シャルルの助言を真剣に聞くシャルマルの姿が印象的だった。

それより驚いたのがシャルル君だ、始めは味音痴かと思ったが、どうやら食べたものにどんな物が使われているか、正確にわかる様だ。その上で美味しい、美味しくない、如何したら良いかなどの助言も出来る。何処の職人やねん！

「いやー、こんなにご馳走になってしまって、本当にありがとうございますの手料理なんて久しぶりだ」

「いえいえ、此方こそ色々教えてもらって、ありがとうございます」

二人が、にこやかに暇の挨拶を交わしてる後ろで

「こっちとしても助かったから良いけどな……」

「あの数を我々が食べたら、一体何日仕事に差し障る事が…」

「私としては、シャルル君の胃袋が心配や。数日経って、急に寝込んでたりしてな…」

などと言われているのを知っているのは

「……………」

ザフィーラだけだった。

「そーいや、明後日また、はやてと同じ現場だったけか？」

ヴィータは風呂上りのアイスを食べ終えて暇をつぶしていたら、ふと、思い出しはやてに尋ねる

「そやね。ヴィータとシグナムが関わった事件が、どうやら同一人物みたいなんで、協力要請ってところや」

「何だ、シグナムもいるのか？」

「私だけではないぞ？ザフィーラは当然として、シャルも来ることになっている」

風呂から出て来たばかりのシグナムが代わりに答える

「なんだ、全員集合じゃんか。身軽だから良いけどさ」

「でも、そう言うのも一時的なもんやからな…。出来れば常時、そんな部隊が出来ればええんやけど…」

どこか思いつめた顔で、考え込むはやてに

「そんなに思いつめちゃダメよ？はやてちゃんはその為に今頑張ってるんでしょ？」

「シャル…」

「そうです、我々がついています」

「勿論あたしもな！」

「……（コクン）」

守護騎士たちが優しく語り掛ける

「みんな……。うん。そうやったね。よし！そうと決まったら、今度の事件をパパッと片付けて、目標目指してガンバロか！」

彼女達は此れより四年後、目標のスタート地点に立つことになるが、それはまだ先のことである…

サイド：シャルル

薄暗い半壊した研究所の廊下、何時も通りの拘束服の肘から鎖が伸びている。

さらにその鎖の端には、複数の研究者らしき人物が括られていた

「ネイキッド、データは？」

吸い上げは終了しています。やはり評議会が関わっているようですが、確固とした証拠にはなり得ません

「当たり前だ。彼らも数十年と工作を行なつて来たんだ、百や二百のデータぐらいでは尻尾が見え隠れする程度が限界だ」

人間という重りを着けていても、歩みを変えず出口に進んでいく

……。マスター、魔力反応接近中です

「ほう、この場所を探り当てたか。優秀だな、しかし、不機嫌そうだなネイキッド？」

当たり前です。取得できるデータの基準が違つたとしても、私はマスターの為にほぼ全ての能力を探索に使っているのです、その私のアレだけ時間をかけて見つけたのに、短時間で見つけられるというのは面白くありません。

「そうか…」

はい、あのタヌキは見かけに依らず、出来るようですね

人工知能な筈なのに、変なところでライバル心を抱き始めた。と、そこで気になる単語が出ていたことに気付いた

「タヌキって、何のことだ？」

？知らないんですか？八神はやては、管理局の一部からタヌキという愛称で呼ばれているんです

「それ愛称じゃないと思うが。って！？向って来るのは、はやてなのか！？」

はい、ヴォルケンリッター、でしたか？彼らも全て揃っているようです

その場で頭を抱えた。

何故こうも、しかもよりにもよって、夜天の全てがここにいる！？

「ネイキッド、急いで転送の準備！」

りょうか、あ…。手遅れです。結界が張られました

「鬱だ、死のう……」

膝から崩れ、大きな溜息が出た

「しょうがないか。感傷は捨てて、軽くあしらって帰るぞ」

目に物見せてやるあのタヌキ…フッフ

「見せんで良いから…」

サイド：はやて

「見えてきたですよ！はやてちゃん！」

肩に乗るリインが目的地を知らせてくれる

「しかし様子が変わですね、煙が上がりました。あの辺りは燃えるよ
うなものはないはず…」

「ええ、私たちが来てから、上がったところを見ると、敵の罠かもしれないわね」

「でも、行かない訳には行かないだろ!？」

「ただの時間稼ぎかも知れんから、結界張つとこか？」

結界を張って、研究所に近づいていく。
カモフラージュの為の機械が辺りに見えるが、どれも軒並み壊されていた

「こら、内部分裂でも起きたか、私ら以外の襲撃を受けたんやろうな」

「すると、さっきの煙はその争いによるもの……」

私たちはそう結論付けて、さらに速度を上げる。

研究所の入り口が見えたと同時に、中から人影が出てきた。
それは、以前遭遇し、さらに空港火災のときに消火を行なったらしい拘束服を着た、通称、【ストレイト】改め、【帝王】と名乗った男だった

「お迎え」苦勞様、
夜天の最後の後継者…」

Episode - 7 (後書き)

.....あれ？

おかしいな、一話で纏める筈だったのに上げてしまった。

はやての次はフェイトを書いてストライカーズの時間軸に突撃します！

みんなあー！！オラにネタを分けてくれえー！！！！

感想とかなんでも待ってます。ぱむーんでした

Episode - 8 (前書き)

前話の続き。初めての戦闘(?) 描写なので下手糞ですが、見てつて下さい

Episode - 8

「この場合、久しぶりって言ったほうが良いんやろうか」

「そうだな、火災のときは会っていないから、もうすぐ一月経つな」

世間話から始まったその会話は緊張を抱えて進む

「それよりこんなとこで何してたん？この辺は、お兄さんみたいな悪い奴が居るはず何やけど…」

「ああ、此れか？」

引つ張り、前に顔を向けさせる。気を失っているようだが、命に危険があるような人は居ないようだ。
まず一つ、安堵するはやて

「こいつ等がやっていた研究データと一緒に、こいつ等を運んでくれないかな？宛先は管理局で」

「そらできんな、管理局宛の荷物なら、直接足を運んでくれへんか

な？」

「そうだね、そうしたいのも山々なんだが、忙しくてね、変りに届けて欲しかったんだ」

「お兄さんも荷物になってくれたら喜んで運ぶんやけどな」

「それは残念だね。これからこの結界を抜けて家に帰るんだ、一緒に居る時間は無いよ。この人数だから少し荒っぽくなるけどね」

帝王が鎖につながれた人を下に下ろして、空気が変わった

「私ら家族が揃えば無敵や……逃がさへんで」

その言葉に反応するかのように、隊形が組まれていく。

前衛には烈火の将シグナム、鉄槌の騎士ヴィータが、中衛にはザフィーラが構え、後衛にシャルと、ラインとユニゾンしたはやてが立つ

「確かに、君達が揃えば、どんな状況でも対処が出来る最高のチームだ。だが……」

帝王が光に包まれ、魔力が溢れ出す

「無敵ではない…」

光が収まると、そこには白い騎士甲冑を着た青年が立っていた

「それが…」

「高町から聞いているか？そう、此れが俺の戦闘服だ」

（マスター、三十分ですからね。それ以上経てば強制的に、拘束服に変えます）

「（解っている。助かるよ、ネイキッド）」

自身の身体が蝕まれながらも、最善ならばそれを選択する。

「そしてこれが俺の力だ。一番開放 ファースト・リリース」

解放される力、ただそれだけで圧力が増す

「く…!？」

「さあ、これで君達と魔力ランクは並んだはずだ。犯罪者は犯罪者らしく、力ずくで押し通らせてもらっよ」

「く、あああああ!!」

場の空気に耐え切れず、ヴィータがアイゼンを振りかぶる

「この程度の圧力で我を失うな! 戦場では常に冷静でいる!」

アイゼンを片手で受け流すと、その慣性を利用し、ブン投げた

「うわあああ!？」

投げ飛ばされた先には人化したザフィーラが待機し受け止める

「はああああ!!」

ヴィータと入れ替わるように、シグナムが切り結ぶ。

袈裟切り、突き、逆袈裟、唐竹、その全てが受け流され、さらに後方からのはやてたちの射撃魔法すらも当たる気配がない

「く!レヴァンティン!!カートリッジロード!!」

埒が明かないと判断し距離を取り、カートリッジをロードするシグナム

「紫電、一閃!!」

「いい太刀筋だが、相手の体勢が崩れてもいないのに、そんな大技が当たるものか!!」

刀身に纏わせた魔力と自身の魔力変換資質によって、圧倒的な威力を誇るその斬撃はまさに必殺の域にあるが

「ハア！！」

持続時間が短く、剣技と魔力運用に集中していたため、避けられてしまつと一秒ほどだが無防備をさらしてしまう

「でりやああ！！」

「ぐあ！？」

向ってきた剣の腹を殴りつけ、無理やり軌道を変え、無防備になった腹へと蹴りを叩き込む。その一撃も魔力を込められていて、しばらく戦闘不可能にするだけの威力を持っていた、だがシグナムは役目は果たしたとばかりに笑った

後方で光る閃光、

「遠き地にて、闇に沈め……デアボリック・エミッション！！」

「なるほど彼女を囿に詠唱を……。展開、放出！」

焦ることなく、魔力を放出する帝王。帝王の発する魔力と、バリア発生阻害能力のある球形の純粹魔力攻撃が衝突し爆発。帝王が居た

辺りを煙が包む

「手加減無しだ！砕けろお！ギガント、ハンマァー！！」

はやての後ろから飛び出て、さらに追い討ちとして煙もろとも巨大化したアイゼンで叩き落そうと振り下ろす。

そして振り下ろされた風圧によって煙が吹き飛ばされた

「流石だ、鉄槌の騎士、見事な威力だ…」

そこには傷一つなく、片手でアイゼンを受け止める帝王の姿があった

「出鱈目や、何で受け止められるねん」

「いや、見事なコンビネーションだ。まさかこうも上手く嵌められるとは正直思わなかった。しかも二段構え、久しぶりに血が滾ってしまう…。しかし今日の目的は逃げることなのでね」

アイゼンを払い、片手を天に掲げ、指で音を鳴らした

「きゃあああ！？」

「シャル！？」

一番後ろに居たシャルが鎖によって磔にされていた

「手っ取り早くいかせて貰うよ……」

そこからさらに増える鎖、十が百に、百が千に。
留まることなく殖え続け、全てを捕らえるために向っていく

「何だこれ、離れる！！」

「やらせん、鋼の軛！」

下から生える拘束条が鎖を絡め取るが、数の違いが圧倒的でありいくらかの抵抗をもつとせず、捕らえていく

「よし、これで俺が逃げ切ったら解放して終了、っと」

「まだや、まだ私が居る」

「…なるほど、その二人が作った僅かの隙間に逃れたか…。だが言っただろ、これでお終いなんだよ」

声に反応するかのように、守護騎士たちを捕らえた鎖が帝王の下に集う

「…みんな!？」

「余りこう言う事はしなくなかったが、仕方がない。俺がこの地を離れるまで動くな。君が動けば…!!？」

「え!？」

後方から聞こえる突然の機械音。振り返ると既に発射の秒読みがされている戦艦主砲がこちらを向いていた。

「チイツ!？」

砲撃が放たれ、閃光が辺りを照らした…

サイド：研究者

「チクシヨオツ！チクシヨオツ！」

なんなんだ！？資材搬入から帰ってみたら、研究所も仲間達も何もかも無くなっていやがった！

「其れも此れも…あいつの！」

走りながら上空を睨む、そこには管理局員と最近、研究者狩りで知られる犯罪者が居た

「俺の、俺達の偉大な研究を台無しにしゃがって！？」

戦艦の主砲で使われる、大型の砲門が置かれていた。
コンソールを動かして、チャージに入る

「此れを使うことになるとはな！」

本来、戦艦同士の打ち合いにこそ、それは用いられる物であり、人間に使われるものではない。
だが逆上した男は、研究で使うはずだった兵器を使って復讐に走り、

彼らが射線上に、集まるのを見計って放った

「クカカ！死ね！死んでしまえ！！」

閃光が放たれ、全てを焼き尽くしていく、筈だった。

「な、なに！？」

そこには、それら全てを受けきった帝王とはやてだけが居た

「動くな！管理局だ！」

声に振り返ると、先ほどまでそこに居たはずの、ヴィータ、ザフイーラと、シャマルに肩を借りているシグナムが居た

「な、なな、な…」

「うるせえ！とにかく逮捕だ！」

彼らが何故そこに居たかは、少し前にさかのぼる

サイド：シャルル

「チィッ！？（ネイキッド！第三までなら緊急開放いけるな！？）」

（はい！しかしその場合、今までの分と合わせて、三分が限界です）

「（上等！！）」

すぐさま緊急開放、そして近くに居た守護騎士たちが繋がる鎖を

「向こうは任せた！」

「は？なにが！？ってふざけるなあぁ—————」

「星となれ！」

思い切り投げた

《キラ！》

投げた直後にダッシュし、はやてを抱きしめた

「ええ！？なに、ちょ…！？」

「動くな…！鎖よ集結…！」

怒鳴られて、静かになるはやて、それから数秒せずに

《ドゴオオオーン…！》

戦艦主砲クラスの砲撃がぶつかる

「ウオオオオー…！！最大出力で防御展開！」

鎖を前面に集め、それら全てに魔力を注ぎ込む。
鎖で編まれた三重の盾、其れは一つ欠ける事無く、砲撃を防ぎきった

「ク……！？終ったな」

サイド：はやて

「ク……！？終ったな」

私たちを守り全てを防ぎきった彼は、拘束服に戻っていてどこか苦しそうにしていた

「……何で、何で守ってくれたん？」

彼は見捨てることも出来たはずだ。アレだけの事を短時間でこなしたのだから、射線から逃れるくらい訳は無い筈

「……………一つ聞きたい」

私の質問に答える気はないようだ

「え、うん」

「夜天の書の管制人格……彼女は不幸だっただろうか？」

突然の、其れも夜天の書に関することで聞かれてしばらく呆然としたが

「うっん、リインフォースは自分のことを『世界一幸せな魔道書です』って言っとったで…」

すると彼のバイザーの下から涙が流れてきた

「そうか、ならば良かった。本当に、良かった…」

彼はゆっくり離れていく。

元から一人で捕まえないが、捕まえるということが頭から抜けてしまって、私はその背中を見続けるしかなかったのだった…

Episode - 8 (後書き)

こんな筈では…。気付いたら伏線を張ってた。
回収するかもわからないものを…

戦闘描写は難しい、ぜんぜんダメな気がするよ。
とりあえず、この後フェイトを入れて、ストライカーズだ。
気合をいれていこうと思います。ばむ〜んでした。

Episode - 9 (前書き)

時間がかかる…。まあ、全てが思いつきで書いてるから仕方ないのかもですが

Episode - 9

サイド：フエイト

『——— っ て こと が あ っ て ん 』

「そうなんだ」

管理局の執務官室でモニターと向かい合うフエイト。会話をしているのは親友の一人であるはやてであるが、どうやら先日、帝王と戦ったらしい

『で、気になったんやけど、あの人って本当にS級の犯罪者なんか？』

その戦いで彼の行動が通常の犯罪者と違ったことに対して疑問に思っているようだ

「そうだね、私も不思議に思ってたんだ。通常、犯罪者は法に触れてるわけだから、必ずといって良いほど殺傷設定で攻撃してくるんだけど…」

『あの人は非殺傷設定で攻撃してくる』

「そう」

その上でさらに手加減をしている。

其れが異質といわれる、彼の不思議なところ。

法を犯したものは、犯罪を起こしたことで理性の箍が外れ、殺さなようにするなどの配慮は一切ない。

「さらに言えば、彼が起こした犯罪は、どうみてもS級に指定されるような大きなものじゃないんだ。主に狙っているのは、違法研究所だし、彼の居た現場では死亡者は一人も出ていないんだ」

『…それってどういうこと何？』

「上層部に、彼をどうしても捕まえない人物が居るってことだよ」

二人の顔がだんだん険しくなっていく

『正義感溢れる局員がつて分けないし…。ばれたら拙い事を揉み消すためか…』

「憶測でしかないけどね…」

二人でしばらく考え込んだ

『そういえば、あの人が帰り際に、ちょっと気になる事言ってたな』

「気になること?」

『そう、それは――』

はやては事件での会話をフェイトに聞かせた

「夜天の書の関係者?」

『少なくとも、管制人格のことは知つとつたんや、無関係ってことはないやろ。それで今、ユーノ君に頼んで夜天の書が起こした事件を調べてもらってるんよ』

「でもそれは…」

『心配せんでええよ。抱え込んだりせえへんから。それに、ユーノ』

君からは、資料が膨大だから数年越しの気持ちで居てくれって言われてるしな』

「そう、それなら良いけど…」

『っと、時間みたいや、じゃ、また電話するわ。いつでもええから家に遊びに来てや』

モニターが閉じられ部屋が一気に静かになる。

はやてとの電話から数十分して扉が開いた

「フェイトさん」。資料お持ちしました」

そこに入ってきたのはシャーリーだ。先日、執務官補佐に指名してついて貰ったばかりである

「ありがとう、そこに置いておいてね？」

「わかりました」

しばらく二人で仕事をこなす、そこに

「あれ？ふえいとさん、連絡が入ってます」

「誰から？」

「えーと、うわ！ハラOWN提督からです」

「クロノから？こっちに繋げてくれる？」

目の前にモニターが現れる。そこに映し出された自分の義兄、クロノ・ハラOWN、現在提督で艦長をしている

「クロノ、久しぶりだね、どうしたの？」

『ああ、ちょっとお前に、頼みたいことがあるんだ』

「頼みたいこと？」

『実は、今度一緒に乗船するはずだった、執務官が急に来れなくなってしまうな。その代わりにフェイトに来てもらえないだろうか

『？』

詳しく聞いていくと、Sランクの魔道師を中心とした犯罪組織を追っているようで、どうやら明日からのようだ

「随分急だね。………うん、明日からなら空けられそうだ」

『悪いな、頼んだぞ。それじゃ——』

そのこの、詳しい打ち合わせを済ませ、モニターを消す。

「シャーリー、私は明日から数日でかけるから、後お願いね」

「解りまし、って！私はいけないんですか！？」

「ごめんね、あくまで一人だけだから、部屋がないみたいなんだ」

「そんな〜！」

アースラ艦内のブリッジで、これからの打ち合わせを詰めていた

「武装隊がすごいね、みんな高ランクだ」

「ああ、今回はかなり大きな犯罪組織だ。中枢の幹部数十名でも、それなりの戦闘が予想される、だから、最低A A Aランクの人間で編成した」

「私の出番は無さそうだね」

「無いにこしたことはない」

ミッドチルダから離れたい地の次元世界らしく、出発してからもうすぐ、一日を経過する

「艦長！もうすぐ目的地なのですが、その地で微弱ながら時空震を感知しました」

クルーの連絡を受け、クロノの顔が陰しく変る

「時空震？モニターできる位置に行ったらすぐにモニターしてくれ」

「はい！」

「フエイト、君も準備をしておいてくれ」

「わかった」

それから数分、転送できる位置に着き、モニターに映し出される

「これは…」

その光景を見てその場にいた全ての人間が口を噤んだ。

映し出された光景は、濛々と立ち上る黒煙と、その黒とは対照的な白い騎士甲冑の人間が印象的な戦場。

比率的には100対1のはずの戦力は、たった一人の人間に圧倒されていた。

「帝王……」

「これはもはや、戦闘ではないな。これは…制圧だ。武装隊は待機、

けして先走るな、あの戦闘が終了しだい突入！」

その後僅か数分の後に、数多の次元世界を股にかけた巨大組織の中枢は、鎖で縛り上げられ、戦闘の意思を刈り取られた。

それを成し遂げた帝王は、気にする事無くアジトの中に入っていく

「よし、突入！」

転送を行なおうとしたら、艦内に警戒音が鳴り響いた

「だ、だめです、転送座標にジャミングがかけられ、転送不能です！」

「なに！？」

「そんなことまで出来たなんて……」

今までにない事態に混乱するクルー、焦りを見せだすクロノとフェイト。そこにまるで見計らったかのように、通信が入った

『こんにちは、管理局の皆さん』

声だけの通信だが、フェイトにはそれが誰の声か分かった

「帝王、どういづつもりですか？」

『む？テストロッサ執務官もおられたか、やはり君達とは何かしらの縁があるのかもしれないな…』

声からは飄々とした、態度が窺える

「何故連絡を取ってきた！今の際に逃げることも出来たはずだ」

『今回は多少事情が異なる』

クロノの質問に答えたと思ったら、映像も送られてきた。

彼の手の中には、まだ小さな子供が抱えられていた、その子供の身体は酷い傷や手術痕がはつきり残っており、かなり衰弱しているようだ

『今は安定しているが、何時容態が悪化するかわからない、だからこの子の身柄をそちらに預けたい。だがこのまま俺も連行されては敵わないのでな、あちらの集団に武装隊を向わせる、そしてこちらには執務官一人で来てもらいたい…。もしこの条件を満たされない

ときは鎖を解く』

クロノはしばらく考えた後に、答えを出した

「分かった、その条件を飲もう。元々、君が捕らえた者たちの捕縛が任務だ。それ以上は、今の戦力では難しいと判断する。構わないフェイト」

「うん、彼も疲労はしているだろうけど、彼らを逃がすわけには行かないし、帝王一人と組織の崩壊、どちらがより深刻かは、比べようがないよ…」

『賢明な判断に感謝する』

それだけ言うと、一方的に切られてしまった。

「ジャミングが解かれました」

「よし、武装隊を回収に向わせる。…フェイト、余り無茶をしない程度に情報を聞き出してくれ。頼んだぞ」

「分かってる。私も個人的に聞きたいことがあったし…」

バリアジャケットを着て、武装隊とは違う場所に転移する。なのは
から聞いたこと、はやてが言っていた夜天の書に関する事、それ
ら確かめるために…

Episode - 9 (後書き)

今回も前編、後編の二話構成です。

この後書いたらストライカーズですが、DVDが見当たらず書けない…。
い…。
如何しよう…。

何かおかしなところがあったら感想でご指摘ください

Episode - 10 (前書き)

遅くなった。まあこれくらいの速度であることは自分で覚悟していたが、若干遅さに絶望した。

というわけで投稿しました、待っていてくれた方に感謝です。新しく来てくれた方にも感謝です。では見てってください

Episode - 10

サイド：シャルル

「ふう、ネイキッド、ジャミング解除」

了解

通信を終えたシャルルは、腕の中の子供の治療を続ける。

この子はこの組織で人体実験を受けていたらしく、リンカーコアと身体の両面で酷く弱っていた。

後数日遅ければ、命すら落していたかもしれない。

「魔力資質が高いところだった事件に巻き込まれる子供が多いな…」

この子も例に漏れず、まだ小学生ほどだがAAランクと高い数値を誇っている。真剣に取り組めば、十代でSランクに差し掛かるかもしれない

マスター、転移反応あります。こちらに一つ、あちらに複数

大きな傷の手当てを終えたシャルルはその報告に大きく頷く

「流石だね、約束は守ってくれるか」

ええ、初めてではないですか？あんな口約束にに応じてくれたものは…

「ああ、管理局の中でも彼らは信用できそうだな。彼等が言っていた通り、若くして少将候補に挙がっているわけだ、何が最善かしっかり把握している」

そうした人物評価をしている内に、前方から人影が見えてきた

「…。約束通り、一人できました」

「ご足願つてすまないな、この子を――」

「その前に！」

するべき事をやったらすぐに立ち去る予定だったため、その呼びかけは予想外だった

「貴方が何故この場に居たのか、教えてください。今回の事件は、管理局の一部の人間しか知らない極秘のものです。幾ら貴方の情報網が優れていても、それを知りえることは困難のはずです」

「……………今回の件に関しては、まったくの偶然だ。これだけデカイ組織のアジトを見つけるのは、並大抵のことではない、俺達では無理だ。しかし、前に君と一緒に居た八神はやて、彼女と遭遇した事件でのデータで今回の事に当たっただけだ」

数日ずれてしまったのは、そのときの無理が祟ったためであるが態々言うつもりはない

「……………では後いくつか質問を。貴方は何故、なのはを、高町なのはを助けたんですか？何故なのはが堕ちたあの場に居たんですか？それと貴方は夜天の書について何か知っているのですか」

「今、まったく関係ないな、事件の調書というより個人的な質問というところか、そんな事、話すつもりは……。まあいい、夜天の書の事はノーコメントだが、高町を助けた理由は教えてやる」

話すつもりは無かった筈なのに、つい口を突いて出てしまった。しょうがないだろう。あんな泣きそうな、悔しそうな顔を見てしまったら答えなければ心が痛む。

あの事件は彼女にとっても痛ましいものだったのだろう

「…俺が助けたのは、二つの理由がある。まず一つは、彼女が諦めず、飛ぶことをこよなく愛する者だったからだ。それが無ければ俺はあの場に放置しただろう、酷い様だが俺もあの時、満身創痍だったから気に入らない人間を助ける余裕など無かった。二つ目は……」

そこで言うかどうか躊躇った。

これを言ってしまうと自分の情報を与えてしまいかねない。そうすると自身の出自を明らかにされる可能性が出てくる、そうになると、僅かな可能性だが計画が無駄になるかもしれない

「…………俺が抜け出して始めてあったまともな人間だったからだ」

「抜け出して？それは――」

「うぐぁ！？」

会話の途中、突然腕の中の子供が呻きだした

「これは！…チッ、俺の回復では追いつかないな。ハラウン執務官、早くこの子を船に運ぶんだ！」

「は、はい！」

「いいか！？この子の症状は――」

わかる範囲で症状と治療法を掻い摘んで教えていく。フェイトは専門知識を持たないだろうが、船の医者ならこの説明で通じるだろう。今は時間との勝負だ、検査しながらの治療では間に合わない可能性がある

「解ったか！？今言ったことを船医に伝えればいい。俺としてもこ
うも早く、発作が来るとは思わなかった。とにかく急げ！」

二、三言葉を交わし転送されるフェイトを見送る

「向こうはどうなっている？」

無事回収されたようです。解除しても問題はありません

「そうか、では捕縛鉄鎖解除。…帰るか」

ええ、十分でけりが着いたとは言え、一番を開放してしまったのですから療養されるのがオススメで……。マスター、彼らから通信

が入っています

「珍しいな、向こうから掛けて来るのは…。繋いでくれ」

モニターが現れ、複数の人影が映し出される

『.?』

「いつも通りですよ。そちらは御変わりなく?」

『』

「それは良かった。で、今日はどういった用件で…」

『』

「そのデータを見つければいいんですね?」

『』

「もちろん、そのための俺ですから。この命が消える前に出来る限りのことを…」

「？」

「それはだめだ。最初の契約だったはずだ、それだけは変えられない」

「」

それを最後に通信を終えた。

「さあ、ネイキッド、かえって買い物だ。良いもの選ばないとな」

マスターのセンスでは無理があります。私が選んでさしあげます

「ああ、お前が選んだものはみんな喜ばれているからな、頼んだぞ。…しかし予算内に抑えてくれよ？前みたいの一つ、うん十万とか無理だから…」

マスターの安月給は把握しています。任せてください

真正面から言われると悲しいな……

サイド：フェイト

アレから数日、あのときの少年は治療しながら、医療施設で元気に暮らしている。

今日はその子を訪問するために休みを取った。

「こんにちは」

「あ！フェイトさん、こんにちは！」

少年は私を見るなり、走り出して前まで来て元気よく挨拶をする。

（以前見に来たときより、明るくなっている？）

それ自体は、喜ぶべきことだ、始めは反発自体はしなかったものの、事件のショックで周りを避ける態度を取っていた、それがこれほど笑顔で人に挨拶をするなど今まで無かった。

フェイトは以前にもこのように明るくなった子供達を見てきた、そのこたちは皆一様に、『お兄さんに会った』と話しており、以前会話の中に出てきた足長おじさんがその『お兄さん』であるようだ。そして案の定、彼は『お兄さんが来た』といい、にこやかに手の中に納まるプレゼントを握り締めていた

「それが入っていた袋、お姉さんが貰って良いかな？」

「はい！どうぞ！それとフェイトさん、これをその人に渡してください。プレゼントを貰ったらすぐに帰ってしまってお礼を言えてないんです」

渡されたのは手紙、これで何通目か、私の手元には既にかなりの数の手紙が保管されている。早く特定して渡さなくては…

いくつかその子と会話をしてから私は車に戻り、包みを調べていく。毎回手渡しなのに、丁寧に梱包している、その梱包だけである程度、どの店で包んでもらったか解るのだが

「やっぱり、また違う世界の違うお店だ」

毎回包みと中身がちぐはぐで、さらにその店に問い合わせても、最近その商品は売られていない、または調べても所有者がしつかりといたりする。

無駄だとわかっているが一応名前の確認をする。ここは余り重要視しなくなっていて、名前を忘れてしまっているが、帰れば以前の包

みと名前の照合が出来るので念のためである

「え〜と、しゃ・る・る……あれ？シャルル・K・グリーンフェル
…ト…」

数分の思考停止、自分のドジ加減に後悔することまた数分、やっと
戻ってきたフェイトは

「ええええー！！！」

叫んだ…

サイド：シャルル

《ピンポン》

呼び鈴が鳴らされ、来訪者を知らせる

「…なんだろう。若干デジャヴを感じる気がする」

身震いをしながらドアに手をかけた

「どちら様で…しょ…つか…」

目の前に紙が掲げられていた。それも、つい先日渡した、プレゼントの包装用紙。

ゆっくり紙が退かされて見えたのは、フェイトの少し怖い笑顔だった…

Episode - 10 (後書き)

どうだったでしょうか？

この後に少しこの続きを書き、いよいよ本編書くぞ！

……これ何度目の台詞だ？

Episode - 11 (前書き)

やっと書けた。

やはりプロット1の思い付き9で書いてるのは問題だろうか…

思い付き9割だから気付いたらまったく分けの分からないことになってそうだ

Episode - 11

サイド：シャルル

俺は今、自分の部屋のリビングでフェイトと対峙している……正座で。

なぜ！？しかも彼女にはこのマンションのことは教えてない筈なのだが

「……なんでこの部屋が分かったのでしょうか？」

「はやてが前に話してたからね、自分の部屋の隣にシャルルが居るって」

原因判明、お隣さんでした。

「そのはやてなら、今仕事で居ないよ……？」

彼女が訪れた理由は、彼女の手に持つ紙切れを見れば分かるが、一縷の希望を託して尋ねてみた。

「今日は貴方に用があったから……」

あえなく撃沈。もし俺の正体のことまでばれていたら、この部屋から逃走しなければいけない
如何するか頭を悩ませていたら、俺の前に仁王立ちしていたフェイトの顔がフツと和らいだ

「別に怒ってる訳じゃないんだ。ただ、何で名乗り出てくれなかった気になっただけで…」

どうやら、ばれているのは施設への訪問だけらしい

「…別に、これといって理由があつた訳じゃないんだ。ただ、そう言うお礼とか恥ずかしいじゃないか…」

「……それだけ？それだけで、こんなに回りくどく、バラバラの所で買つてばれ難くしていたの？」

「？別に回りくどくも難でもないよ？バラバラなのは、俺の仕事の都合でいろんな世界を回っていたからそうなってしまっただけで…」

事実、表向きの顔としてカメラマンとして数多の世界を渡って、品物はその行き帰りなどで買ったり包装したりしている。
名前を書いて贈ってしまっていたのは、失敗だったが…

「あ、そうだったね。…それじゃ、何で身寄りの無い子や、先天資質のため事件に巻き込まれた子供達に援助や贈り物をしていたの？」

サイド：フェイト

「あ、そうだったね。…それじゃ、何で身寄りの無い子や、先天資質のため事件に巻き込まれた子供達に援助や贈り物をしていたの？」

わたしは先程までの会話で、完全に謎が解けたような気がして、何気なく聞いた。

手紙も渡したし、さつさと帰ればよかったのにそんなことを聞いてしまったが為に、私を自分を悩ませる事柄を作ってしまった

「…そんなの、大人の勝手な我が儘に付き合わされて、子供が自由に夢や目標を見られない世界は…悲しいじゃないか」

そのときの彼の顔は、悲しそうな、悔しそうな顔、何故彼がそんな顔をするのか分からないが、その表情に私は惹かれた。

彼が言ったことも、それは奇しくも自分が仲間たちに述べた大切な思いであり、自分のやるべきことだった。さらに言えば彼はそれらを実施し、私が出来なかった子供達の笑顔までもを引き出すことまでやってのけたのだ。

顔が赤くなるのを感じる、油断していたところに初めて純粹に自分と同じ物を目指す人に会い動揺、自分で感じている胸の高鳴りに首を傾げる

「そ、そうなんだ。あ、私仕事に戻らなきゃいけないから帰るね！
ごめんね、急に押し掛けて。また今度改めて来させてもらうから」

私はその場から急いで駆け出す。
何なのだろうか、あの気持ちは…

それからフェイトは数年その感情に戸惑いながらすごす事となった。

サイド：シャルル

「そ、そうなんだ。あ、私仕事に戻らなきゃいけないから帰るね！
ごめんね、急に押し掛けて。また今度改めて来させてもらうから」

「あ、おい！……行っちゃった。何だ？顔を赤くして、そんなにヤ
バイ仕事だったのか？だったら立ち寄りなければ良かったのに…」

マスターの鈍感。この先苦労しますよ？

「なぜに!？」

それから彼らは、あらゆる事件を通して幾度となく顔をあわせていく。

帝王は自分の不幸 エンカウント を呪い、なのはは、何とか会話を成そうと奮闘し、フェイトは、シャルルと会うと毎回顔を赤くし、帝王と会うときは軽くあしらわれ、はやては、ご近所付き合いをしながら親交を深め、帝王について時間を見つけては調べている。

そんな生活が続いて四年…

「それじゃ、またなシャルル君」

目の前には軍服を着た八神はやてが居た

「ああ、一年だったっけ、がんばれよ、実・験・部・隊！」

「ふん！言っとき、そのうち本物にしたるから」

お互いに笑顔を浮かべて冗談を言い合う。

「また仕事が一段落したら会おうな。その時までにはシャルルの料理も美味しくなったら良いな…」

「もう！言わないで下さいよ！」

シャルは顔を赤くして怒る、アレから何度かレクチャーしたがあまり進歩らしい物は見られずかなり気にしているようだ。

「おい、また美味しいアイス教えてくれよな」

ヴィータは何度かオススメのアイス店を教えていたためかなり懐かれてしまった。
それから口々に言葉を交わし、別れる。

「……さて、これから忙しくなりそうだ。彼らからの情報では彼女達の新設部隊はこれから起こる事の備えらしいし。：ハア、俺も本格的に動き出し始める頃だから、また確実にエンカウントするな」

しょうがないでしょう。この時期に重なってしまったのはもはや必然、聖王教会の予言で出てしまったのですから

「ああ、なんだっけ、『古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる一人の王の下、聖地よりの翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる』だったか？」

何処で情報を得たのか分からないが予言された原文を得て、自分で解読をした。古代ベルカ語の原文を訳すことは今ではとても難しく数週間の解読期間が必要とされるが、彼はベルカの王であったため問題なく解いた

ええ、おそらく、この一年以内に起こると推察されます

「良かったよ、あと一年なら…身体はもつ……………」

マスター…

サイド：はやて

はやては考えていた。

新設された自分の部隊の本当の設立理由の予言、その新しく現れたと言つ一文の事を……

（古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる一人の王の下、聖地よりかの翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる。この続きに出来た新しい一文『かの翼は羽ばたき、大地を削る。死せる王はその羽ばたきを一身に背負いまた眠る』この文の意味はなんなんやろ……。）

何処まで考えても答えに辿り着けないと悟ったはやては、考えるのを止め、皆に話せるようになったら皆で考えようと言う結論に至った

「さて！新しい隊舎を見にいか！」

Episode - 11 (後書き)

ふう、やっと次だ、しつこかったな…

感想待ってます。

Episode - 12 (前書き)

ああああああ!! 一週間経ってしまった!
もっと早くあげる心算だったのに…

待っていてくれた方達はありがとうございます。
見てってください

Episode - 12

「腹…減ったな……」

シャルルは、マンションの自室でテーブルに倒れ、空腹を訴えていた

当たり前です。動き回るために、カメラマンとして定期収入を期待せず暮らしてきたのに、今までの蓄えを寄付に全て使うバカが何処に居ますか…

ネイキッドは呆れた声を上げる

「いや、まさか持ち込んだ所が倒産するとは、流石に思わないよ…。だがあと一日耐えれば当てが有る。別の会社の人間が仕事を見繕ってくれているからな」

マスターのその謎の人脈には、毎回驚かされます

「そりゃあ、襲撃だけしてても、金は貯まらないからな、コネを作れるところでは作るよ。それ即ち、上手な世渡りである、ってな。それよりネイキッド、まだ見付からないのか？」

はい、最近は探査に時間を掛けられなかったのもまだ――pipi
―いえ、ただいま発見しました。…これは、一昨日運び込まれてい
ますね。今からだとあちら側の機械と遭遇してしまいそうですね

そこに、更なる情報を取得するネイキッド

あ…

「……おい。何だ、今の”あ”は、とてつもなく嫌な予感がするん
だが」

【レリック】は現在リニアレールで輸送中。しかし、ガジェット
に取り付かれコントロールが奪われた模様

ネイキッドはさらに、管理局が動いたことを知らせた。しかも出勤
までの時間を見るとはやての六課の可能性が高いそうだ

「あのマッド博士はもう少し穏便に事を進められないのか…？はや
ても仕事が速すぎるぞ。もう少し俺のことも考えて欲しいもんだ、
いつも受身ばっかじゃないか」

独り言を呟きながら、マンションを出る。此処からだとかかなりの距

離がある、ついた頃には全て終わっているかもしれない。

「だからって、行かないわけにはいかない。…はあ、マッドの玩具を相手にするのは久しぶりだな」

憂鬱だ、と溜息が漏れる。AMFが付いている物であっても、彼の拳と魔法には絶対的に相性が悪い為にシャルルにとっては数が多く、鬱陶しいと感じるだけである。

「チツ、やはり居たか」

リニアレールに向かい飛行中、目の前にガジェットの大群が出てきた。

一型を中心に新型の姿も確認できる。その総数五十体

データ解析完了、敵機動兵器群は我等の足止めを目的として動いています。殲滅しなければおそらく何処までも着いて来ます

その後、解析された新型のデータに目を通す。

そこに映し出されたスペックは驚くに値する物だが脅威にはなりえない。

「最速で破壊する。ネイキッド、このロスタイムを含めたりニアレ

「ルの移動先の算出を頼む」

了解、何分ですか？

その質問にシャルルは不敵な顔を見せる。

「……五分だ！」

拘束服から甲冑に開放し、鎖を伸ばして、AMFを張っている手近な機体を捕まえる。

「フンッ！」

機体をそのまま絞め壊し、放り捨てる

「俺の鎖は、消せないぜ？」

サイド：フォワード

「一閃必中！えええりやああー！！」

エリオが新型のガジェットを貫き、そのままストラダを振り上げた。

それにより、引き裂かれたガジェットは爆散、これでこの場の全てのガジェットを始末したことになる

『車両内、及び上空のガジェット反応、全て消滅！』

『スターズF、レリックを無事確保』

オペレーターの声が自分達の初出勤が無事に終わったことを知らせてくれる

『車両のコントロールも取り戻したですよ、今止めま〜す！』

通信越しにラインが機嫌よく操作をしている

「終わったわね」

「うん！私疲れちゃった〜」

「もう、アンタは…」

目標を確保し、緊張が緩み回りの警戒をしていなかった。

『！熱源反応復活、ガジェット再起動！スバル、ティアナ、気を付けて！』

大破し、近くに転がっていたはずのガジェットが急に動き出し、スバルとティアナに攻撃を仕掛けた

（AMFがまだ消えてない！？くッ、対応が間に合わない！）

（ダメだ！ブーストしても追いつかない！）

スバルとティアナは突然のことに、反応が鈍り、合流に向っていたエリオとキャロは、遠くからその動きに反応していたが距離が離れすぎていて間に合わない。

二人は目の前に迫った攻撃に身体を硬くし、痛みを堪える為に目を瞑った

「……………。あれ？…！？これは」

ティアナはなかなか来ない衝撃に躊躇いながらも目を開けると、そこには完全に大破したガジェットが二体、重なっていた。

どうやらこちらを襲おうとしたガジェットは、上から落ちてきたガジェットに潰された様だ

「助かったわ、二人とも」

自分達以外にその場にいないので当然これを行ったのも残りの二人、エリオとキャロだろうと考え、お礼を述べたが

「い、いえ！？僕達じゃありません。それは僕達のもっと上から降って来ました」

「え？ちよつと、じゃ誰が——」

「戦闘の直後に、気が緩むのは頂けないな……」

背後から声。

その場から飛び退く、スバルとティアナ、二人の合流を果たしたエリオとキャロ、四人で多少開けた場所に位置取りする。

「貴方は……」

「すまないが、会話をしていたら怖い人たちが来てしまうからね。手短に言う、そのレリックをこちらに渡してくれ」

拘束服の男がそれ以上の話はしないとばかりの勢いで用件だけを伝える

『あかん来よつた、そいつと戦ったらあかん！即時退却や！なのは隊長とフェイト隊長が来るまで何とか逃げ切り！』

八神部隊長の焦った声が聞こえてくる。

だがこの距離で逃げ切ることは難しい、残されたのは

「三人とも、解ってるわね」

「うん！なんとか、なのはさん達が来るまで守るんだね」

「時間を稼ぐ、ぐらい僕達でも出来ます！」

「はい！フリード、行くよ！」

そして戦闘が始まる

「でりゃあああー！」

スバルが突っ込む。屋内戦において最速の機動力で一気に肉薄し拳を突き出す。

帝王は動かない

（良し当たる！）

が、気が付いたら彼の横を通り過ぎていた

「え？え？」

帝王は横から軽く手を添え機動を変えた、数秒にも満たない時間で完璧に攻撃を見切り、その上で攻撃に合わせ、手を添えることは並の反射神経では出来ない

「フリード！ブラストフレア！シュート！」

何が起こったか未だ気付かないスバルを援護する形でキャロの竜、フリードリヒの火球が放たれる。

「よつと！」

帝王は事も無げにそれを避けると、レリックの入った箱に向って駆け出した

「取らせない、スピア・アングリフ！」

「チッ！」

エリオの突撃を後ろに飛ぶことで回避。

「避けた直後なら！」

ティアナの魔法の中で最速の攻撃が放たれる。それを勢いよくしゃがむ事で避ける
そしてまた仕切り直し

（皆、あたしに考えがある、今から言つとおり動いて）

今までの戦闘を見たティアナが作戦をその場のメンバーに伝える。

「行くよ、エリオ！」

「はい、スバルさん！」

今度は前衛の二人が左右から攻めて来た、帝王はそれを前後どちらかで避ける心算だったが

「む！？」

既に操作型スフィアが前後を抑えていた。
残された選択肢として、上空に逃げると

「フリード！」

「なに！？」（誘い込まれたか、やはりこのままだと制限がきつ過ぎる！）

既に上空が押さえられていた。
が、目に見えてレリックから皆が離れていたため、鎖を出し、それを蹴り付ける事で急加速。
手に箱を取った瞬間

「何！幻影だと！？」

「決まれええー！ファントムブレイザー！！」

（姿が見えないと思ったら、この砲撃を撃つ為の時間稼ぎと誘い出し
しか！）

放たれる砲撃を寸での所で避けるが、バイザーが半分壊れ、右目の
翠が覗いている

「……なるほど、やはり機動六課と言う所は油断できないようだ」

短い戦闘では有ったが彼らは初出撃のため、その濃密な時間に息を
切らしている

「今日は、君達の健闘を称え、ここで引かせてもらうよ。怖い人た
ちも向ってきてるみたいだし……」

そこまで言って帝王はその翠の瞳でフォワードメンバーを見ていく

「実に才能溢れたメンバーだ、教官も基礎からしっかり固めている
ようだし。……中でも君が一番伸びそうだ」

「……え？あたし？」

眼を向けられたティアナは混乱した、今までこのメンバーに対し、
劣等感と言う暗い感情があった為今言われた事が分からなかった

「戦術と戦略は違う……。これを忘れなければ君が何処に向うべきか
解ってくるよ。ではまた戦場で……」

そうして彼は去っていく

「戦術と戦略…」

この台詞により彼女の劣等感が少しだけ和らいだ。この先どうなる
のだろうか…

Episode - 12 (後書き)

あれ…？ティアナがヒロイン？いや！そんな心算じゃないんだ！
ただ魔王なのはが降臨するのを防ごうと思ったただけなんだ！

このまま三人以上ヒロインができてしまいそう…

主人公設定 S t r i k e r S 開始時点の状態（前書き）

とりあえず連続っぽいことしました

設定更新！

主人公設定 StrikerS開始時点の状態

シャルル・グリーンフェルト

new!! 現在、二十歳相当。身長178センチ。容姿、左目は紅く右目は翠、長い銀髪を首の後ろ辺りで赤い紐で括っている。甲冑とは異なり、黒を好んで着込む。

主人公、古代ベルカの帝王のクローンだがクローニングの際数々の偶然が重なり、生前、帝王当時の記憶を持つ

世界を護るため自ら汚名を着都市一つを消滅させる。(StrikerS編では語られる予定はありません。)

戦闘スタイルは徒手空拳が基本だが、古代ベルカ王族の持つ固有スキルで【帝王の鎖】を使う

その鎖は遠隔操作と自律制御の二通りの選択が出来、自律制御時の鎖単体の能力は、Aランク相当である。また遠隔操作時は鎖を介して魔法を放つことも可能である

new!! 鎖は限りなく実体に近い魔法でAMFを受け、消えるのに数分を要する。

五ランクダウン相当のリミッターをつけている。

(尚、この小説ではリミッターは最大五ランクという設定で行きます)

病気を患っている模様。常備薬あり

ピース・ネイキッド

シャルルのデバイス、最高評議会の指示で作成されたワンオフ機
待機時は三角錐のペンダント、そして何故かカメラにもなる

形状は肘まで伸び腕の数倍の太さを持っているほど大きな籠手、色
は白

バリアジャケットを二種類持ちその一つは拘束服で着用者の魔力を
リミッター以上に抑える役割を担っている。もう一つの形状は白を
基調とした配色がされた騎士甲冑である

new!! 探査にその機能の大半を注ぎ込んでいるため、日常では
数分の会話しか出来ない。戦闘時はリミッターの管理、敵の分析を
行い、情報をいち早く知らせる役目を担っている。そのためシャル
ルはほぼ一人で魔法の行使を行っている

主人公設定 S t r i k e r S 開始時点の状態（後書き）

とりあえず作者が書いてみたいモノまとめ

ぬらりひよんの孫 雪女最高です

真恋姫無双 褐色美人良いですよ

もう一度 魔法少女リリカルなのは 今度は無印から

コードギアス 新プロジェクトも動いてるようだし…

灼眼のシャナ ヴィルヘルミナさん良いですね

とりあえずアンケートみたいにとって、もし余裕があればどれかを
書きます

感想までどしどし送ってください

Episode - 13 (前書き)

かけたので更新します。

く！？アンケートが来ない！難しいんだね、そう言っの言っの…

Episode - 13

「刻印ナンバー9、護送体勢に入りました。追撃戦力を送りますか？」

とある研究所で白衣を着た男がモニターから目を離し、報告をした女性を見る

「止めておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけでも十分さ」

その男はまたモニターに目を向け、口の端を吊り上げていく

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材が揃っている上に」

モニターが切り替えられ映し出されたのは、フェイト、エリオ、そしてシャルルであった

「ふふ、この子達、生きて動いているプロジェクトFの残滓と、私が創り上げた最高の失敗作にして成功作が手に入る機会があるのだ

からね」

「ドクター、プロジェクトFは解るのですが、彼は失敗作といっているのに手に入れる必要があるのですか？」

「おっと、君にも説明をしていなかったね。彼に使った技術は少し特殊な物だね、私でも一から完成させることは難しい物なんだよ。…ふふふ、それにしてもよく生きていられたものだ」

その顔は何処までも嬉しそうで、何処までも歪んでいた…

サイド：シャルル

マスター、何故見逃したのですか？あのままなら確実に獲得出来ていたのに

自身のマンションで薬を飲み一息ついた所に、ネイキッドから先ほどのことを聞かれた

「あの場でも言っただろ？彼らの健闘を称えて——」

嘘ですね。いえ、事実だったとしてもそれ以外にあるはずです。納得できる答えを戴きませんと、この場所を管理局に通報します

はぐらかそうとしたら、脅してきた。こいつは以前にも、切れて俺が潜伏先に使っていたホテルを通報すると言う、報復を行った為、脅しとして有効だろう

「ちょ！？それは止めてもらえますか！？ここ追い出されたら行く場所なんて無いんですからね！？」

完全に低姿勢の敬語。普通の術者とデバイスとは違うパワーバランスが生まれていた。

マスターが早く言えばいいんですよ。そうすれば私もこの様な真似は致しません

「いや、大したことじゃないんだよ？ただ、あれ以上の時間をかければ、なのはがきそうだったし、バイザーが壊れてたから、素顔がばれる虞があったからね」

…そう言えばやたら高速で接近してくる人が居ましたね、アレが彼女でしたか。何時もマスターが居るといきなり何時もの1.5倍速で動き出しますからね

昔、言った”捕まえて”辺りから、彼女は俺を見つけると周りの局員を無視して動き出すことがあった。

もちろん、模範的な局員らしく、そのときも命令に添った形で無視&1.5倍であった、そしてそのときの顔は、かなり生き生きとしている、…その対象の自分としては気が気じゃないが。

しかも今回は、自分が隊長として動くため、いつもより自由度が高い所為もあって、途中まで追跡される事態に陥った

「ハア…、元気なのは良い事だが、たださへ動きが取り辛いのに、毎回アレでは余り出張る事が出来ないな。だがそれも、もう少しで全てが終る…。もう粗方証拠は集めたんだよな？」

はい、現段階でもある程度の効果は期待できますが、後一押しですね。スカリエッティが動きを見せ、その繋がりが確認できれば確実な物となります

「そうか。もう一人の王の方はどうだ？」

そちらは全くと言って良いほど目ばしい物はありませんね。こちらはかなり嚴重で、管理局では煙一つ出てきません。マスター以外のベルカの王といえば、聖王、霸王、冥王。この辺りが有名どころなので、違う方面でも調べてはいますが、情報はありません

「ん…。霸王辺りなら、記憶の伝承があつた筈だから、もしかしたらとも思つが…。ま！今幾ら考えても意味は無いな。今後について――」

p i p i p i、 p i p i p i

「お！さつそく、仕事が決まりそうだ！」

携帯端末に表示されている名前を見て、シャルルは声を弾ませる。

「もしもし？社長ですか？こんにちは、それで仕事は…」

『ああ、それなんだけどねえ。ちょうど内の長期密着取材をする企画でねえ、住み込みでやって貰いたいのねえ。取材も出来たよねえ、フェルト君？』

会話をしているのは、ミッドチルダでも指折りの売れ行きをしている雑誌を作っている会社の社長。

「もちろんです、場所さへ教えてもらえれば、何処へだっていきますよ！」

『ああ、良かったのねえ。うちの会社の子達は皆、今度取材する

機動六課の隊員の誰かのファンだつて言うから行かせても仕事になら無そうなのねえ。お金は前払いで振り込んで置いたから宜しくなのねえ」

「え！？機動六課はマズ—— ブチ！！……」

前払いですから、どうにもなりませんね。それとも、この仕事を断つて、また数日飢えてみますか？

シャルルは機能停止した。まさに前門の虎、後門の狼、である。逃げ場が無いことを悟った。

サイド：はやて

「はあ、まったく！」

今日は何故か、機嫌が悪いはやて。

「如何したんですか？はやてちゃん」

気になった彼女の融合機にして、大切な家族であるリインフォースは尋ねた

「…それがな、もうすぐ取材の人が来るねんけど」

「ああ！あれですか！それで何が問題だったのです？」

管理局でも目立った存在の彼女達は、取材などこれまで何度となく受けていて、慣れた物のはずだが今回は余り気乗りしない様だ。

「その取材は住み込み言うたやん？前線メンバーの取材が主やし、女性が多い上に男性宿舎は、今いっぱいやから、女性記者の方でつて頼んどつたし、アチラさんも了承した筈やったんよ。でも、それが急に、男性だからって今電話があつてん」

「それじゃあ、男の人が住むですか？」

「まさか。部屋が無いのにどうせえっちゅうねん、来てもらったのに悪いけど帰ってもらっわ」

サイド：シャルル

「来てしまったな……」

機動六課を前に、立ち尽くすシャルル

何時までもグズグズしてないで下さい。マスターが気を付けられればれる事なんて無いんですから

「精神的に休まらないだろう、いわば敵地だぞ。それを何日も滞在しなくちゃならないなんて……鬱だ」

トボトボした足取りでゆっくり隊舎に向う。

後姿から乗り気ではないのがすぐに解るほど、肩を落とし、気のせいか頭の上には縦線が入ってるようだった。

「とりあえず、はやての居る隊長室に向うか。……そしてここは何処だ？それは何処だ？」

迷っていた、適当に歩いていたらどうやら裏庭に出てきてしまったようだ。

道を周りに聞けばいいのだろうが、ちょうど昼時の所為なのか、誰も見当たらない。

と、そこで見知った後姿を見つけた。

綺麗な金の髪に黒い制服を着て、姿勢正しく歩く姿は、とても様に

Episode - 13 (後書き)

何がしたいのかわらなくなってきた。

とりあえず、書いて楽しいからこのまま何処までこの設定で行けるかな。

勿論完走が目標だが、無茶展開が出てきそう

Episode - 14 (前書き)

書くための時間、三時間

充電（やる気になるための）時間、四日ほど

可笑しい？

Episode - 14

「あはははは！ひーひー、あかんで、それはつぶつぶ！」

悲鳴を聞きつけ、現場に到着すると相当数の野次馬と固まっていた俺とフェイトを発見したはやは場所は部隊長室に変え、事情を聞き必死に笑いを堪えていたが、耐え切れなくなり、大爆笑。

「そこまで笑わなくても良いだろう！？こっちはかなりの人数に囲まれて身動きできないし、フェイトはフェイトで、俺を見ながら動けなくなるし。どうしろと…」

あの時の状態を思い出して軽く暗くなる。

隣に居るフェイトも俯いたまま自分の失敗を恥じているようだ。

「えーと、で、話を戻すけど、俺はここに入れないのか？」

そう、これが本題。事の発端であるこの仕事の行く末を確かにしなければ落ち着かない。シャルルにとって、この仕事が出来るか出来ないかは死活問題なのだ。

「ああ、良えよ良えよ。何処の誰だか解らない奴やったら返すところやけど、シャルル君やったら信用できるし、部屋やったら私等の

部屋に――」

「ダメエ!!」

突然フェイトが大きな声で反論する。

フェイトに様子を見たはやては、手を合わせ訳知り顔になり、ニンマリと笑った。そのときに笑ったはやてには、何故か縞縞の茶色い尻尾が見えた気がした。

「そうやねえ、私らの部屋は人数おるし、まだ余裕のあるフェイトちゃんとなのはちゃんの部屋の方がいいかもな。両手に花や! 嬉しいやろ?」

ブンブンブン!!!

首が壊れるんじゃないか心配になるほど高速で横に首を振るフェイト

「バカか? そもそも女性の部屋に男の俺が行けるか。冗談は程ほどにして結局如何するつもりだ?」

「面白いな、ええやん乗ってくれたって…。部屋に関しては、部隊の人たちには悪いけど、少し詰めてもらってスペース作るわ。でもあんま期待せんという、今でもギリギリやから誰かと相部屋になると思う」

申し訳なさそうに話すはやて、確かに相部屋になると整備などが出来ないだろうが、そもそも今回の事はあの社長がしくじった所為である為彼女が謝るのは筋違いである。

どちらかと言うと、契約違反のこちらを受け入れてくれた天使に見える。…これで餓死せずに済む

「そんな事は気にしないさ。そこまでしてくれるんだ、助かるよ」

「そうか。ならこれから暫らくよろしくな、記者さん？」

「ゴシップで彩ってやるぜ！げへげへげへぶぶ！！??」

華麗な突っ込みが2方向から飛んでくる。綺麗なボディーブローと顔面にパンチがめり込む

「テイク2……。これからよろしくな、記者さん？」

「ひゃい……。これからよろひくおねはいしまふ……」

滅多にしない事はする物ではないな

「それじゃ、隊舎の案内やけど…」

そこではやては思案する。

フェイトではさっきの二の舞になりそうだし、自分もまだ仕事が残っている。かといって初対面でいきなりって言うのもなんだか…

「はやてちゃん、この書類なんだけど——」

「君に決めた!!」

「にゃ!?!」

「と言うわけで、ここからは私が案内するね?それにしても久しぶりだね、シャルル君。結構背が伸びたみたい…」

目の前にいるのは高町なのは、この姿で会うのは一年ぶり位の為、彼女に言うとおり当時と比べると結構背が伸びた。

「そうだな、でもはやてとかに聞いていたからそんなに久しぶりな感じがしないけどな」

「そうだね、私もそんな感じかな？はやてちゃんと話をするとな割くらいはシャルル君の話題だからね」

その回答にシャルルは、それは多いのか？など考え、生返事で返したが、間違いなく多いだろう。話せる範囲での仕事の話、最近〳〵があった、知り合いが〳〵だなどの他に、”別枠”でシャルルの会話が入っているのだ。

十分話せば、三分は永遠とシャルル、これは多すぎる。

「で、次が食堂。今は昼時を外れてるけど皆ここで食事を取ることになってるんだ」

「俺も食わせてもらえるんだよね？」

「にやはは！当然だよ！ここはちよつと交通の便が悪いからね、一々出かけるのは時間とお金の無駄だよ」

その答えに安堵を示す。

そして次々と進められる隊舎の案内。

そこで、通路の向こう側からフォワードメンバーが向ってきた

「あ！なのはさん、それから…え〜と？」

「ああ、スバル。この人はね、私たち隊長三人の知り合いで、シャルル君。前に言ってた取材の人だよ」

「取材！ねえティア、ティア！あたし可笑しくないかな？」

「うっさい！話しかけないで」

二人して、取材と聞き服装を正し始めた。
さらに一緒にいた子供二人は余り気にした風ではなく、それどころかジツとこちらを見ていた

（この二人どつかで…？）

「あの…。あの時のお兄さんですよね？」

「わ、私も覚えてますか？」

暫らく思案した後、

「ああ！エリオ君とキャロちゃんだね！覚えてるよ、少し大きくなつたかな？」

プレゼントなど贈っていたが、その目的は笑顔にして精神的に楽にする事だったため、その一人として二人とは出会っていた。この二人の心の傷は相当らしく、出会った当初はまったく笑ってくれなかったが、割と通い詰めて何とか笑ってくれるようになった。その後二人は保護責任者が出来たことは知っていたがまさか二人同時にこんなところで出会うとは思っていなかった

「はい！あの時は本当にお世話になりました」

「私もお世話になりました。でも突然来てくれなくなったので心配しました」

「ああ、君達の保護責任者が決まったって聞いたからね。もう心配ないと思って行くのを止めたんだ。心配かけてごめんね」

そんな三人を不思議そうに見ているのは

「ええと、三人は知り合いなの？」

「ん？ああ、ちょっとな、それより案内を頼むよ。…それじゃ、また今度取材させて貰うからそのときに話を聞かせてもらうからね、話す内容を考えといてくれよ？」

そしてまた隊舎を廻るためその場を離れた。

「ねエ！ティア、今度取材するって、なに聞かれるのかな！」

「さあね、それよりどうすんの？なのはさん、暫らく空きそうにな
いから、あの白い奴のこと聞けないわよ？」

「それじゃあ、フェイトさんのところに行きましょう。今日は仕事
が少ないって言っていました」

そして彼女らはその場を後にし、フェイトの元に向う。

彼女らは、幸運にもなのはの帝王の話の聞かなくて済んだのだった。
なのはは、帝王の事になると長い間喋るのである、その時間は帝王
との遭遇期間に比例すると言われ、彼女を知っている者から見ると
「性格が変わる」らしい。

「そしてここが最後で、男性宿舍だよ。部屋番号は解る？」

「ああ、さっき連絡が有ったからな。今日はありがとう、助かった
よ」

「いいよ。これも仕事だから、にやはは」

一通り見終わったら日が沈み良い時間になっていた。
その後幾つか会話をし、別れて部屋に着く

「お！アンタが俺のルームメイトかい？」

「そうなるな、よろしく俺はシャルル。シャルル・K・グリーンフ
エルトだ」

「おう！俺はヴァイス・グランセニツク、ヴァイスでいいぜ」

ヴァイスとは、馬が合ったのか、割とすぐに打ち解けた。
その後、色々話したがヴァイスのヘリ談義は長く、明け方まで続い
た。かなり濃い話を永遠と聞くのはつらい物がある…。

Episode - 14 (後書き)

作者の書きたい物増刊号

サモンナイトシリーズ 久しぶりにプレイして

f a t e エクストラが出たから

フェアリーテイル リサーナが死んでる…

テイルズシリーズ ファンです

とある魔術と禁書目録 二期が秋にやるから

これらの作品を書きたいが前回書いた物より優先度が低いな。
言ってみただけ、気にしないで…。多分書けないから

Episode - 15 (前書き)

祝！10万PV！1万ユニーク！

流石はなのはのネームバリュー！この作品がここまで来れたのもなのはの名前につられた皆様のおかげです。

自分も良くつられて覗き名作に行き着きます。皆様に名作と言われるように精進しこれからも書き続けます

Episode - 15

『おら！いづくぞー！！』

モニターの中ではそれぞれの特化訓練が行われていた

「いや、それにしても皆さん良くやりますね」

今見ていたのはヴィータとスバルの訓練風景、彼女達のポジション、フロントアタッカーは敵陣に単身で切り込んだり、防衛ラインを維持するなど、攻撃が集中することが多い、そのため防御スキルの訓練が重要でありその訓練を行っている。

他のメンバー、ライトニングのエリオとキャロの訓練はフェイトが担当し、回避訓練。彼らはまだ幼い体のため防御など身体に負担のかかる物より、避けることを教える。

同時にその訓練はスピードの強化にも繋がり、二人のポジションにとっても意味のあるものになっている

そして最後にティアナとなのはだが二人のポジションであるセンチガード、このポジションに必要とされるのは、誰よりも広い視野を持って、いち早く中、長距離を征することにある。そのため足を止めた精密射撃の熟練、必要に応じた弾の選択など、判断速度と命中精度の向上訓練になっている

「いや、やってますな」

共に訓練の見学をしていたヴァイスが言葉を漏らす

「初出勤が良い刺激になったようだな」

さらにもう一人、同じく訓練風景を眺めていたシグナムが答えた

「初出勤はもうしたんですか？」

白々しく尋ねる

「ああ、お前が来る前日だったな。これ以上は詳しく教えるわけにはいかないが、無事任務を果たしたからな」

「そうですか、それは良かった。やはり怪我はさせたくないですからね。それに心なしか生き生きして見えます」

「いいっすねえ、若い連中は」

「若いだけあって成長も早い、まだ暫らくの間は危なっかしいだろ

うがな」

写真を遠望モードに切り替え、只管に撮り続ける

「シグナム姐さんは参加しないんで？」

「あ、それは自分も気になっていました」

もう一時間撮り続けているが、隣に居るこの二人も、ずっとこうして共に見ているが仕事は大丈夫なのだろうか？

「私は古い騎士だからな、スバルやエリオのようにミッド式と混じった近代ベルカ式とは勝手が違うし、剣を振るうしか無い私がバツクス型のティアナとキャロに教えられることもないしな」

「それじゃ、模擬戦が出来るようになってからが仕事ですね」

「そうなるだろうが、教える以前に私は物を教える柄でもない、戦法など”届く距離まで行つて斬れ”くらいしか言えん」

シグナムの台詞に、ヴァイスと目を合わせ苦笑いを浮かべる

「へへへ、すげえ奥義ではあるんすけど」

「ああ、そこまでの境地に至るには彼らは、まだ早いね。」

シグナムが腑に落ちない顔を浮かべてこちらを見てくる

「シャルル、お前はわかるのか？」

「何がです？」

「戦いが、だ。主はやてと話しているときもそうだったが、お前は時に鋭い発言をする。それも、戦いを経験した者特有の発言が多い」

シャルルは背筋に冷たいものを感じた。つい口に出てしまう小さな事、余り気にしてこなかったが、これからは周囲の目がある。発言は慎重にしなければならない

「やだな、これでも色々な地方に行ってたんですよ？護身術くらい心得てますよ」

「そうか、そうだったな。すまない忘れてくれ」

その後訓練終了まで、当たり前障りの無い話をしながら写真を撮っていく。

フォワードメンバーは完全にへばっていたが、自分が知る局の新人育成より幾分か効率的に感じる。

戦技教導官の方針が、または戦技教導特有の物なのか、どちらにしても局の中身の無い教育より成長するだろう。

確か戦技教導はなのはが担当していたはずだ。

基礎を徹底的に指導しているのは、おそらく、自分の過去が関係しているのだろう。

彼女の経歴は、華々しくは有ったが、同時に信じられないほど無謀の上に立っていたのだ。その結果が、撃墜、リハビリと言う苦難の道。

今でこそ笑っているが、その現場に立ち会った俺には彼女がどこか焦っているようにも映る。

あんな思いは自分だけで、と言う思いなのだろう。

「さて、データの整理をしたら昼飯にするか」

マスター、報告したい事があります

部屋へ帰るところでネイキッドが話しかけてきた。

最近、管理局と繋がりのある犯罪者が減ったため、緊迫した声が出さなくなったネイキッドだったが、今日はどこか何時も以上に声が

硬く感じる。

誰も来ない物影に隠れ報告を聴くことにした

「どうした？」

はい、先ずはこちらを…

そこに映し出された一枚の映像。映っているのはフードを被った三人組、一人は背が高く、体付きはがっしりしている、もう一人は背が低く少女のようだ。そして最後に空を飛ぶ小さい人影

「コイツは、融合機か？」

おそらく…、以前あったデータに合致します。それもレプリカではなくオリジナルの古代ベルカの融合機、名は烈火の剣精、炎熱能力を保有しています

以前調べた物の中に融合機の実験をしていた研究所があった。だが、辿り着いた頃にはそこは廃墟になっており、あるのは死体ばかりだった。

そのため、襲撃されたと断定し、調べていくと辿り着いた先が

「なるほど、スカリエッティか…」

はい、それも剣精を除く二人からは、リンカーコア以外に魔力反応があります。おそらく、身体に何かが埋め込まれているのでしょう

シャルルは顔を歪め嫌悪感を露わにした。

「胸糞悪いな…俺以外にも身体を弄るか。しかもアレは死者だ…流石は、『ドクター』。死者すら蘇生するか」

知っていたのですか？

「ああニュースにもなったぞ？Sランク魔道師が亡くなったって結構大きくな。まあ、理由は事故になってたけど…。これが、お前が硬くなったのは」

…マスターの境遇に似ていましたから、報告するべきかどうか考えました

自分と似た境遇、自分とは違う道。

彼は今、どのような気持ちで過ごしているのだろう

「気にするな、同じ蘇生を経験した者同士、仲良く話すさ。機会があればだけどな」

苦笑いを浮かべながら「どっちが先かな」と自嘲気味に語る。

それは、彼の寿命か、自分の寿命か、どちらにしても、もう長くは無いと言っているのだとネイキッドは理解していた。

理解しているからこそ、自分の回路が焼ききれようと彼をサポートするのだと固く誓った。

Episode - 15 (後書き)

感想待ってます。

Episode - 16 (前書き)

やった！やったぞ！二日で更新できた！

何か興に乗って書き続けている。内容がグダグダになっているかも知れど、この内容を入れなきゃこの先考えることが出来ないの
我慢してね？

Episode - 16

時間は夜、シャルルは荷物を纏めて隊舎の外に出ていた

「さて、一日だけだが確りこなさないと。両方の意味で…」

明日行われるオークションの写真を収めるために、会場近くのホテルで一夜を明かし、その足で会場入りする手はずになっている。そして大きなオークションでは裏取引がされたりすることが多く存在する。そしてその情報が入ったため、その現場を押さえることを依頼された。

「まったく、あの方達は俺を何でも屋か何かと勘違いしてないか？」

まあ、似たようなものである事は疑いようはありませんから

時たま、こうして表ざたには出来ない不穏分子を取り押さえる仕事を回される。

たまにそうした人間から情報が出てくることがある為、まったくの無駄ではないが良いように使われているようでいい気分にはなれない

「余り考えないようにするしかないな。情報がデマであることを祈

りたいね。そしたらゆっくりオークションを楽しめるのに…」

余りそう言った期待はしない方が良いでしょう？

「解っているが、ホテルアグスタは高級ホテルだぞ。リッチな気分
に浸りたいじゃないか」

理解し難いですが、急いだほうが宜しいのではないですか？

「そうだった、明日早くから打ち合わせがあるんだ！」

そして翌日

「ネイキッド、異常は無いか？」

ホテルアグスタの会場脇で逐一怪しい動きをする人間がいないか、
確認しながら品物が入ってくるのを待っている。

エリアサーチを常に行っています。取引が行われれば、すぐに解
ります

「そうか、なら——」

「あれ？シャルル君？」

「ええ！？」

「あ、ホントだ！」

背後から聞き覚えのある声が聞こえた。

「おお、三人とも奇……遇……」

振り返った時、一瞬誰だかわからなかった。

なぜなら、三人は綺麗に着飾っていて、何時もとのギャップが有り過ぎる為、思考が追いつかなかった

「？どうしたの？」

反応がおかしかったシャルルを心配して、なのはが話し掛けてきた。はやては理由がわかったのか、ニスマリした顔で。フェイトは二人の背後に隠れる位置に立ち覗き込んで来る

「い、いや！別に、な、なんでもないぞ！？ただ綺麗だな、可愛い

なっと思ってただけだから！…じゃなくって！？」

シャルルは生前、王という立場から、こういった女性を見る機会が多かったはずなのだが、身近な人間になればなるほど、口が回らなくなってしまう。そういう時は大体、思ったことが口を付いて出てきてしまう。

「キレイキレイキレイキレイ」

「フェイトちゃん怖いわ、それ」

「にやはは、でもその気持ち少し解るな。まっすぐ言われると嬉しいよね」

「うおおお～～！？！？」

自分で言った台詞に頭を抱え悶絶寸前、フェイトは連呼をし続けているのはとはやてが、なんとかそれを鎮めるといふ、カオスが出来上がったのだった。

「へえ～それじゃ、シャルル君も仕事やから昨日から出かけてったんか」

「ああ、俺も驚いたよ、まさかこんな所で鉢合わせするとは思ってもしなかった」

「にはやは、仕事の事は詳しく話せないからね」

何気ない会話をしていたら、外から敵性反応が僅かにあった

「おつとごめん、上司から連絡だ。それじゃまた、隊舎で」

「うん、お仕事がんばってね！」

「お互い様だ！」

その場から急ぎ離れて状況を確認する

「何があつた？」

ガジェットの反応、数およそ四十です

「ここにレリックがあるのか？」

「いえ、少し似た反応はありますが、ここの商品の中にレリックは

確認できません

すると、その似た反応に惹かれてやってきたのか、ここの中にドクターの求める物が置いてあるのだが

マスター、この騒ぎに乗じて取引が行われています。場所はフロア3階、304です

「チッ！下らない事には頭が回る、外の様子は！」

機動六課と思わしき反応を複数検知、反応から守護騎士たちとスターズのフォワードだと思われます

「なるほど総出で警備に当たっている訳か、それならすぐに危険がある訳ではないな。確保優先だ、確保次第、外の敵を殲滅する」

了解セットアップ

光に包まれその姿を拘束服に変える。

バイザーが壊れた代わりに顔の半分を覆うマスクを装着している。

「これはあまり付けなくなかったんだけどな。趣味じゃない」

それはマスターが壊すから…

「解ってるよ、では行くとしましようか」

「ではこれで…」

「ええ、確認しました、お納めください」

ホテルの一室にて怪しい一団が、大金と物資の交換を行っていた。

「それにしても良いタイミングで騒ぎが起きてくれたものですね。おかげで、こうして取引が恙無く終った」

「ええ、それではここで…。我らは何も知らない、他人同士です。接点も何も無い、ただ会場に一緒にいただけの関係」

「解っています。私たちは赤の他人この商品もこの世に存在しない」

彼らは下卑た笑みを浮かべ、荷物を持って部屋を出ようとする

『そう言う訳には行かないな』

「な！？これは念話！？一体何処から！」

辺りを見渡しても、先ほどまでと変わらないホテルの部屋。だが確実に見られている。

彼らの額から汗が流れ落ちる。

彼らは背中合わせになり襲撃に備え身構える。彼らは、自分達がそれなりの力を持っていると自負している、今の取引とて、万全を期すため、結界を幾重にも重ねて掛けたのだ。

それなのにまったく、その存在を認識できなかったことに焦りを見せていた。

そこで扉が大きな音を立て始め、ついには大きな破碎音を立てて壊れた

「ごきげんよう、そして……さよならだ」

部屋に入ってきた拘束服の男。その目立った格好に彼らはその存在を一瞬で理解した

「て、帝お……！？」

彼らの意識はそこで途絶えた。

「ミッション、コンプリートだ」

取引の映像を確認、決定的瞬間も収めています。彼らはこのまま身柄を拘束され捕まるでしょう

「わかった、ではここを管理局に通報して——」

「大丈夫ですか!？」

時間が止まった。

「…壊す必要無かったんだよな…」

壊した時の大きな音から異常を察知した三人がデバイスを片手に、この場に駆けつけたようだ。

この状況は誰が見ても俺を悪役だと思うだろう。
実際彼女達もセットアップ完了し、近くに倒れている人間から介抱を شدした。

この状況を目にすれば自分でもそうする。

「ちょうど良いタイミングだ、このデータを君達に上げよう」

ついには開き直って、仰々しい態度でこの事件のデータを送りつける。

先ほど、外の反応も消え、戦闘が終わったようなので向こうに出向く必要が消えた。

「行くぞ、ネイキッド！」

「あ！待ってください！」

窓から逃走を計ったが、なのはが後を追って来た

「ええい！付いて来るな！」

「捕まえるまで追いかけます！」

「しつこいな君は！」

「じゃ、捕まって下さい！」

「くそ、面倒は嫌いだ。捕らえよ！」

なのはの周りに鎖を出現させ、捕らえて身動きを封じる

「それではな、高町なのは」

その場から全力で離脱。後ろでまだ何か言っているが構う余裕は無い、この後、不審に思われないように会場に戻らなくてはいけないのだから。

それにしても彼女の執念は凄まじい物がある。

さらに、着け回される時間が延びている気がするから恐ろしい。

Episode - 16 (後書き)

注意書き・この作品のなのは、「にやはは」と笑うが原作Strikersでは普通に「あはは」と笑います。

Episode - 17 (前書き)

順調順調
♪

なんだか気分が良い！徹夜で、最高にハイってヤツだ！！

Episode - 17

「ネイキッド、アグスタでの六課の戦闘データは取得できるか？」

出来ませんが、何に使う御積もりです？

オークションが終わり、現場検証の邪魔になる事から六課の人員より一足先に帰り、資料を纏めている

「奴らの狙いがあるのか、召喚の反応があつたのは何なのか。それを調べたくてな…」

何のためにドクターはガジヨットを向けさせたのか。

さらにそれに協力したと思われる、召喚師がいたことを感じたシャルルは、その人物の特定に乗り出していた

解りました、ハッキングを行いますので数分お待ちください

それきり黙りこんだネイキッド。たったの数分で最新鋭機を導入する六課のセキュリティを突破すると言つてのけるのだから、どれ程のスペックか想像も出来ない

取得完了、やはり内部からだと楽ですね

「少し後ろめたいがな」

戦闘時の映像が表示され、それに食い入るように見つめるシャルル。段々その表情は険しくなっていく

如何しましたマスター？何か不味い事でも…

「…いや、目的は解らないが、人物の特定は出来た、以前お前から報告があつた三人のうちの一人だ。恐らく繋がりはあるが、直接的な部下と言うわけではないだろう。一緒にいたゼストが戦闘に加わっていなかったしな。俺が氣に成つたのはむしろこれだ…」

これは…ミスショットですか？

そこに映し出されたのは、ティアナが起こしたミスショット。危うく味方に直撃するような軌道を描いていた

「焦っているんだ…」

焦り、ですか？

「ああ、恐らく若い人には、原因がわかっていても取り除くのは難しいんじゃないか？目に見えた才能が有った人間には特に…」

と、言いますと？

「彼女は、自分に才能が無いと思い込んで苦しんでるんだ。潜在能力の高いスバル、幼くしてBランクの魔道師エリオ、召喚と言うレアスキルを持つキヤロ、それ以外にも、節操無く優秀な人材を収集したからなはやては…」

つまり、回りが凄過ぎるから、劣等感を抱いていると言うことですか？彼女の思い込みも大概にして欲しいものです。全力が出せない状態だったとは言え、一時的にマスターを上手く手玉に取ったんですから

「そう言ってくれるのは嬉しいが、これは意外と深刻な問題なんだ。恐らく根底にある物はもつと根深いんじゃないかな、経験したことがあるから解るよ」

経験…ですか

「ああ、…これは少し話をしなければ成らないかな…焦ってる理由

も含めて…」

現在、ティアナの居る場所を探し、林に足を向けた

「お？何だ、シャルルじゃねえか。こんなところで如何した？」

林に入ったところで、ヴァイスが林から出てきた。

「こっちに、ティアナが居たと思ってな。少し様子を見に…」

「何だ、お前もか。俺もその積もりだったんだけどよ。ありゃ、聞かねえよ、「凡人だから」だとさ」

「あんなに才能豊かなのにな…」

「全くだ。俺の立つ瀬が無いぜ」

その日は暫らく二人で会話をし、ティアナが帰宅するまでその様子を眺めていた。

「…ん？誰だ？こんな朝早く…」

翌日の四時、まだ日が昇りきっていない時間から、外に向う人間がいた

「ティアナとスバルか…。無茶を通すつもりなのか」

手早く着替えて、その後を追うことにした。
着いて行くと昨日と同じ場所で、二人は話し合っていた。

「で、ティアの考えてることって？」

「短期間でとりあえず、現状の戦力をアップさせる方法。上手く出来れば、アンタとのコンビネーションの幅もグッと広がるし、エリオやキャラのフォローももっと出来る」

時間外の基礎訓練をするなら未だしも、独自に新たな事をなそうと
していた。

基礎が出来上がっているなら未だしも、途上の彼女らがそんな事を

すれば、最悪身体を壊し、大変な自体になることもある

「うん。それは、ワクワクだね」

それに気付かずに二人は、訓練に没頭し始めた

「やめろ、やめろ！そんな事しちゃ行けない！」

たまらず、顔を出し訓練を中断させた。

「な、何ですか！？今訓練中で危ないですよ！」

「今そんなことはどうでも良い！その無意味な訓練をすぐに止める！」

「な！？貴方に何が解るんですか！一般人なんかに、無意味とか言われたくありません！」

「確かに俺は一般人だが、君達より、なのはの訓練の意義を知っている」

その言葉に顔色を変えて睨みつけてくるティアナ。

「それが何だつて言うんですか！？私は強くなりたいんです！何時までも同じことだけじゃ…、私だけこのままじゃ！だから、私は私なりの方法で強くなるんです！」

「だから、教えを無視すると？なのはの訓練は君達がギリギリ耐えられるラインを設定し、一番効率よくレベルが上がる遣り方を取っている。それでも解らないなら…」

私服のまま構え、二人に相対した。

「君は賢い。強くなる方法も色々考えているだろうし、自分の欠点と能力の把握は出来ているだろう。技を増やし、行動の幅を広げようとしたり、切り札を編み出そうとしたりもしてるかも知れない。だが…」

一歩も動かず語り掛ける。ティアナとスバルもその場から動くことが出来ず、静かに話に耳を傾ける

「それは基礎が固まり、もう一段君達が成長してからだ、応用はその後。君のその思い上がり、基礎の重要性を私が教えてあげよう。構えなさい…」

「う、うわあああー!!」

ティアナは挑発に乗り、スフィアを形成し放った

「ちょっと、ティア!あの人は魔道師じゃないよ!？」

「君も同罪だ、一緒に遣らねば私が君の意識を刈り取る…」

スバルは驚愕した。数メートル離れていたはずなのに、耳元でささやきが聞こえたからだ。

スバルは反射的に振り向き、腕を前に突き出し攻撃を防いだ

「私は、武術を少し修めていてね。今は基礎の歩法だ。さあ、魔法を使えない一般人に倒されなくなったら、本気で掛かってきなさい…」

彼は子供をあやす様に、優しく話しかけてきた…

Episode - 17 (後書き)

もはや一般人じゃない…

なのはの魔王降臨を出さないためにがんばって調整中。

アレは名場面だ必ず入れる！て、人は感想に書いてください。
その感想の人数によって決めます

Episode - 18 (前書き)

仕事先から夏休みを貰って、せっせと書き綴っています。

充電期間が短いと何書いているか解らなくなるなあ

Episode - 18

（何で！何で当たらないの！？）

ティアナは信じられなかった。

相手はただの一般人、特に優れた動きが見られる訳でもなく、鋭い訳でもない。

ただ一個一個確実に避けていく。

（…ッ！スバルが！？）

スバルとシャルルが鬨ぎ合い、その隙間に撃つティアナは思い通りに攻撃が放てないでいた。

制限されたその空間で、砲撃を撃つタイミングになってスバルが幾度も射線上に出てきて遮り、甘い軌道になっている。そのため全てを冷静に避けられる

「なんで！なんで！？」

魔法の才能は絶対だと思っていた。

だが、目の前の人は、魔法を一切使わず、魔道師と渡り合っている。見ていて解る。この動きは才能じゃない。

動きその物もかなりの部分で共通する動きが見られる。
同じ動き、つまりは基礎運動を繰返しているだけなのだろう。
たったそれだけで自分達が…

「…がつ!？」

静かに崩れ落ちるスバル、気絶をしたようだ。
その場から駆けるでもなく、静かにこちらを見据えるシャルル、その姿にティアナは堪え様の無い恐怖を感じた

「あ、あ…」

「お休み…」

そこで私も意識を失った

「ん、うん……」

重たい瞼をゆっくり開ける。
そこは良く知る自分達の部屋

「ティア！？良かった目が覚めたんだね！」

覆いかぶさるように様子を窺ってくるスバル、その隣には先程まで、自分達と戦っていたシャルルさん

「起きた様だね。手荒にして済まなかった」

本当に申し訳なさそうに謝ってくる姿は、先程恐怖を感じた人物とはまるで別人に見えた

「いえ…」

「早速だが、復習をしようか」

「……え？」

「え？じゃないよ、教えてあげると言っただろう？さて、…戦っていて君は何を感じた？」

「それは…。私の攻撃が…全て避けられた事が…」

「そうだね、君の攻撃を私は全て避けた。それが出来たのには理由があるんだが解るかね？」

戦っている違和感と言うものを確かに感じた。

「私達の行動を誘導した…？」

冷静に考えれば、そうでもない限りアレだけ頻繁にスバルと噛合わない等有り得ないのだから

「その通り。相手が動く位置に動いてみたり、わざと身体のバランスを崩してみたりと、その行動を一つ説明するのは時間が掛かる。要するに、相手の行動を限定し、選択肢を与えなかったと言うことだ」

淡々と、先程の種明かしをしていくが、言うだけ簡単な事ではないことは誰が聞いても明らかだ

「まあ、これは経験から来る勘によるところもあるが、これも一つの才能が必要だね。君はこちらの才能に恵まれてるようだ」

その時、この人が何を言ってるのか解らなかった。あんな動き、私

が出来るわけが無い！

「君は自分が皆より劣っていると思うんだろうが、それはお門違いと言つものだ。確かに君は魔法の才能と言つ点で他の三人より、僅かに劣っているかもしれない。しかし、それを補つて余りある才能が君にはある」

自信に満ち溢れた顔を見てみると、自分までそんな気がしてくるから不思議だ

「君には考える力がある、指揮官としての才能だ。敵が如何攻めるか予測し、動くことが出来るという事は、つまりは罠が張れると言う事、戦場では魔法の才能以上に貴重なことだ。だから、君がやるべき事は、自分の選択を広げるのではなく、寧ろ相手の選択肢を狭める。攻撃が通じないなら、通じるように追い込めば良い」

彼の話聞いていて、何故か以前接触した通称、【帝王】の台詞と被った

『戦術と戦略は違う…』

彼はそう言った。そして今、目の前にいる人も内容こそ違うが、重なる部分がある。

何食わぬ顔で敵陣にいるはずが無いので、別人なのは解り切っているのだが、何故か重ねてしまう自分がいたのだった

「だから今は、ゆっくり遣りなさい。そして、手広く拡げるのでは

なく一つの事を究めなさい。ああ、それと、今日あった事は君たちの胸の内に閉まっておいでくれよ?」

「はい…。ありがとうございます…。…」

「それと、今日は朝練休みになってるから、それまで身体を休めて、午後の練習には出るように」

話し終わると出て行ってしまった。緊張していた空気が一気に弛緩して

「は～～!」

「疲れた～～!」

二人して身体を崩す。

「なんか凄かったね…。あっさり負けちゃった」

「そうね…」

二人で話すのはやはり先程の戦い、二人は悔しがる所か、どこか腫れ物が取れたような清々しい顔をしていた。

「教官みたいだったね」

「まあ、教え慣れてそうだったけど…」

アレだけの武術が出来るのだから、どこかの道場で、師範代として門下生などに訓えていたんじゃないだろうか

「ネイキッド、スバル・ナカジマの家族構成とか解るか？」

勿論です、私はマスターのデバイスです。不可能は有りません！

「それじゃ、スカリエッティのアジトを調べて潰しに行くか？」

御免なさい…。私は役立たずです…。こんなポンコツ捨てて乗り換えることをオススメします…

「振ったのは俺だけど、そこまで落ち込むなよ！？」

ええ、解っています冗談です、それでスバル・ナカジマでしたか、それほど時間は掛かりませんが如何されたんですか？

「ああ、恐らくだが、彼女は純正の人間じゃない。戦闘機人だ。触れた感じで、機械的な感触があつた」

戦闘機人…、ドクターの研究にも確か…

「ああ、もしかすると、管理局中枢にも潜り込んでいる奴が居るかも知れないから、管理局の人員データも全て洗い直してくれ」

わかりましたが、彼女を疑って御出でですか？

「それこそまさかだ！彼女は純粹な子だ、そんなことが出来る人じゃないよ。ただの癪だよ、不安材料は極力減らしたいだけ。情報は生き抜く事にとってもっとも大事なことからね」

わかりました、管理局の情報を取り出すのに、かなりの時間が掛かると予想される為、暫らく時間の管理ができませんので、薬はしっかり飲んでください

「解ってるさ、自分の身体何だから」

暫らく点滅していたが、やがて完全に沈黙した。

「毎度済まないな、無理させてはっかで…」

優しくデバイスを撫でて、それを胸ポケット、心臓に一番近いところに入れて持ち歩く。

それは彼なりの信頼の証なのだ。

Episode - 18 (後書き)

割と高評だったみたいで、魔王なのは出さずに済みそう…

模擬戦の「頭、冷やそうか…」を無くすのは異色だと思っけど何とか書けると良いな

偶には無い物語が合ってもいいと思っんだけど嫌という方は「戻る」を押して下さい

Episode - 19 (前書き)

一日一話で更新！はこれからも時々あるかも。

そろそろ自分で駄文卒業かな？とか思ってるんですがどうでしょう？
結構なアクセス載ってるんで天狗になってるんですが…

Episode - 19

「何か、あったみたいだね」

なのはは、訓練をするティアナを見て雰囲気が変わったことに気付いていた。それも良い方に変わった事が訓練に如実に現れ、シャープシュートの切れが以前より良くなっていた。

以前見られていた、焦りから来る無茶が減り、集団訓練では、こちらが驚くほどの成果を出している。

「これなら、次の模擬戦も余裕ができるかな。…シャルル君が何か遣ったのかな？」

ティアナが変わったのは、シャルルから二人が倒れたと連絡があったときからだ。

自然と関連性が見えてくる。悪いことではないし、何を如何すると言いつ訳ではないが、何が有ったのか気になるのは仕方が無いと思う

「ああ、こんな所に」

「あれ、シャルル君？如何したの、私に何か用事かな？」

訓練が終わった頃、丁度そこにシャルルが姿を現した。

ティアナは深く一礼してその場を後にする。その行動になのはは、目を瞬かせるが気を取り直し、シャルルに應對する。

「用事も何も、俺の仕事は君達への取材だ。時間は前に伝えたと思っただけど…」

新部隊と言うことで、働く主要人員は皆多忙であり、時間が取ることが困難なので、交代で一日一人のペースで行っている。それが今日、なのはの番だったのだ

「ああ！忘れてた！？」

「だと思った、時間も圧してるからこの場で遣らせてもらうけど構わないか？」

「う、うん。大丈夫だよ」

その後、二三雑誌用の質問に今後の抱負など、それらしい事を答えて終わりとなった。

「よし、ありがとう。これで取材は終わりだ。お疲れさん」

「お疲れ様。この後暇かな、フェイトちゃんとお食事なんだけど、一緒に如何かな？あ、食事と言っても私達の手料理なんだけどね。本当ははやてちゃんも呼んだんだけど仕事が大変みたいで…」

「ぜひ！と、言いたいけど、彼女、俺の事嫌ってるだろ？何時も逃げられるし…」

「そんなこと無いよ！……寧ろ逆というか」

「え、何？」

「ううん、何でも無いよ、それで如何する？」

「邪魔でなければ…」

シャルルも男な訳で、美少女達との食事は願ったり叶ったりである。フェイトと気まづくならなければいいなと、少し不安はあるのだが、やはり綺麗な子は目の保養になるし、手料理は一種の憧れでもある為大変楽しみだ。

シヤマル？アレは料理教室だよ

「それじゃ、決まりだね。一時間後に部屋に着てね？」

「……………」

そして今二人の部屋の前である。やはりこうなったか、と心の中で考えながら目の前のフリーズフェイトを見つめる

「いらっしやい、もう出来てるから早く上がって」

なのはに誘われるまま部屋の中に。そして二人と見つめ合う形で座り、テーブルの上には湯気を立てる料理の数々、思わず喉が鳴る

「じゃ、食べようか？いただきます」

「……そうだね。いただきます」

「いただきます！」

静かに食事が始まる。フェイトもチラチラこちらを見ているが、食事時は比較的落ち着いている。

一通り食べてから口を開く

「どれも美味しいな、久しぶりだよ、こんなに美味しいのを食べたのは。特にこれと、これかな」

指差された料理にフェイトの肩が上がる

「にやはは、ありがとう、それが私でそっちがフェイトちゃんだよ？」

「そうなんだ、美味しいよ、フェイト」

「う、うん、ありがとう…」

それを契機に色々な会話をし、少しずつ話せるようになったフェイトであった

「そうだ、聞きたいことが有ったんだ。シャルル君、ティアナに何か言ってくれた？」

「ありゃ、やっぱばれてたか」

「そりゃ、アレだけ変われば誰だって気付くよ。それで何を言った

の？如何すればあそこまで変わるのか参考までに…」

「別に何かしたって訳じゃないよ。少し彼女の才能が何なのか説明してあげただけだよ」

「説明？」

「俺なんかより、君達のほうが彼女について知っているだろうが、彼女は焦りすぎてたから、その原因を取り除いただけ。周りに置いて行かれる劣等感で言うものをね。周りが目に見えた才能が溢れた子ばつかじゃないか」

その言葉になのははハツとなり、静かに聴いていた

「なのは、君も少し考えたほうがいい、こんなに少数の部隊なんか無いんだから、教導の意味と如何したいかをしっかり教えてあげないとそういう子が出て当然だ」

「ちゃ、ちゃんと教えてるよ？」

「本当に？全部？自分の気持ちも？俺ってこんな仕事遣ってるから色々調べたりすることが多いから、君達の関わった事件の映像資料なんかも見てるんだ。君も昔言ってたじゃないか、”言葉にしない

と伝わらないこともきつとある”って。まあ、九歳で覚えてないかもだけど、今回のこともそう言うモノだって俺は思うよ?」

なのはもフェイトも、真剣な表情でこちらの話を聴いている。

まさか昔の自分を引き合いに出されると思っていなかっただろう。だが、まだ管理局に発覚する前の映像や、日常風景などの場面をどうやって録ったのか今でも謎である

「だから今度、しっかり話してあげるといい。何故今の形を取ってるのか、自分の気持ちと過去、…は任せるけど。そうだな…今度の模擬戦の後くらいで良いんじゃないか?」

「うん、そうだね、そうするよ。ありがとう、教えてくれて」

「こちらこそ済まない。説教みたいになっちゃって、飯時にする話じゃないなこれは」

「そんなこと無いよ。勉強になっちゃった」

「何とか出来て良かったよ。爆発寸前だったからな、ティアナは」

「そうなんだ。フフ、これからは私も相談にのって貰おうかな?」

まだ若干堅いが、それでも支える事無く話すフェイト

「勘弁してくれ、そんなに偉い人間じゃないんだから」

苦笑いを浮かべるシャルル。

その後、晩くまでいろんな話をして過ごした

一方はやては…

「ああああ、何で今日に限ってこんなに仕事溜まってんねん！？ヘルプミー……」

「頑張るですよ…はやてちゃん……」

仕事に追われデスクに嚙り付いていた…

Episode - 19 (後書き)

これでなのは魔王フラグは消えたと思うんですが、シャーリーの
出番も消えたかも…

作品の後書きとかに他の作品のキャラを出演させる物ってあります
よね？

アレに自分のキャラを出して欲しかったりします。

何方か出してください！

自分じゃ、後書きでキャラを動かせられないんで怖くて書けません
(汗)

模擬戦書くか悩み中。ティアナが無茶をしないため戦いを一から考
えなきゃいけない。小学生の作文並みに「もぎせんがあつた。みん
なごうかくだった。」みたいに書かず、スルーしようかと…
如何したら良いかな？

Episode - 20 (前書き)

一週間経ってないな！？良し！

と言う訳で何とか一週間以内に投稿できた。

結果として模擬戦は諦めた！

戦闘を一から考えるのはオリジナル展開の時だけで十分。
それ以上は文才の無さが更に際立つ…

Episode - 20

静まり返る林の奥、シャルルは座禅を組み、精神集中している。シャルルの前に徐々に浮かび上がる人影、黒く、隙間だらけの人影はシャルルの指示に従ってその姿を消し飛び上がる。

「……ふう。ネイキッドが居ないのとリミッター制限があると、此れをするのは気力を使うな」

今だ動かず、額に汗を滲ませながら苦笑いを浮かべた。

人影が向うは海上。スカリエツティが、何をするでもなく漂わせるガジェットの観察をするためだ。

六課の隊長陣が破壊に動くが、此れは威力偵察。

何処からか奴が見ているはずなのだ。モニターしている機械を見つけ、出来るならば逆探して、研究所の在り処を突き止める。出来なくとも、何処かに繋がりは必ずある筈なのだ

「コイツが居ないと調査をするのすら間々ならないとはな」

胸ポケットのデバイスを小突き、立ち上がる。

「そう言えば他のメンバーって待機なんだっけ……。模擬戦後だから疲れが出たんだろうな」

昼から行われた模擬戦は丁度仕事と重なり見られなかったが、ボロボロの姿で笑顔を浮かべていたので問題は大きくはなかったのだろう

「…ん？ロビーに集まってるのか？」

待機なので何もおかしい事は無いのだが、皆何故かモニターに向かい真剣な表情を浮かべている。

「こんにちは、皆さん何をしてるんですか？」

「あ、シャルルさん。今、なのはさんの過去の映像を見せてもらっていたんです」

「へえ………」

本人が居ないが、どうやら伝えることを選択したようだが場面が変わり、雪の降り頻る世界でなのはが撃墜される。だが誰が遣ったのか定かではないが自分の情報はまったく出てこなかった。

「っと、今までののが公式記録。ここからがなのはさんのデバイスから取ったデータ」

「ゴフ!？」

「ちょ!如何したんですか!？」

「な、なんでもない」

また切り替わり出てきたのは、今より幾分か背の低い自分。
初めて彼女と出会った場面だ

「あれ?さっきのはこんなところ無かったですよね?」

「そう、隠蔽されたんだよ。なのはさんはこのときの治療で一命を取り留めた、だけど将来有望な局員が犯罪者に救われる。これは結構なスキヤンダルだからね」

「当時、まだ名前も知られていなかった者だが、これより僅か数ヶ月で第一級次元犯罪者 ストレイト として名前が広まり、今では帝王 としてその存在が恐れられている」

「非公式だけど、これが彼を最初に映像として残した物なの。背格好から、はやてちゃん達と大して変らない年齢だと思っただけぞ

れ以上は誰もわからないのよ」

シャーリー、シグナム、シャマルの順に内容を話していく。

「と言うか、これ俺が見ていていいものなのか？」

「お前は我らの不利になるようなことはしないだろ？」

「まあ……」

確かに、知り合いを売るほど落ちぶれては居ないが、堂々と宣言されると照れる

「あの、この帝王と言う人はなにが目的なんですか？」

スバルが口にした一言で周りが静まり返る。

「あ、それ私も気になってました。この間は【レリック】を集めてるみたいでしたけど……」

「それは解らない。確かに恐ろしいほどの実力者ではあるが、奴が

遣ったことといえば、違法研究所襲撃、被災者救助、しかも奴が関わった事件で死傷者は居ない。なぜ一級犯罪者として危険視されるかすら解らないからな」

「確かに…。事件の内容を聞く限り、良くて二級犯罪者ですよね」

張本人としては、この場はなんとも落ち着かない

「ぐ…！…また…か…」

久しぶりの魔法を行使した反動か、発作を起こした。
服のポケットを弄り、薬を取り出すが、手が震え落としてしまった

「ちッ…！」

「大丈夫ですか！？ 凄い汗…。シャマル先生！」

「大丈夫…。これを飲めば…落ち着く…」

新しい薬を取り出し口に含む。
暫らくして症状は治まったが、体力を使ってしまった為かなり顔が青い

「お騒がせしました。自分はこれで失礼します。疲れてしまったみたいで…」

「大丈夫かな、シャルルさん」

「薬を持ってたって事は持病みたいね」

ロビーでの話が終わり、先程のシャルルの症状について語っていた

「あれ？これその薬じゃないですか？返してきたほうが良いですよね」

エリオが床に落ちていた薬を拾い、テーブルに置く

「それにしても持病がある人って珍しいですよね。今じゃほとんどの病気は治せますから」

キヤロが珍しそうに薬をみていた。
あらゆる次元世界が集まるこの世界では、内科治療は驚くべき進歩
を遂げ、今では一桁ほどこしか死亡者は居ない

「……！？ちよつといいかしら？」

薬を見て顔色を変えたシャマルが話しかけてきた

「これは、私が返して置くわね。近くに行く用事もあるから」

「はい、お願いします」

薬を握り締めてその場を離れるシャマル

（何でこの薬を彼が飲んでいるの！？いえ、まだこれが私の考えて
いる物と同じと決まった訳じゃ…。でも、もしそうだとしたら彼は
……）

シャマルは自分の仕事場に帰り、すぐさま調べ始める。
彼女が危惧している薬は、ある研究でしか使われなかった、かなり
過去の物だ。

（でも、そんなはずが無い。あの薬なら今も生きているはずが…）

p i p i

結果が表示され、成分を確認していく

「そんな…！？やっぱりこれは、あの人は…」

そのモニターに表示された結果は、細胞賦活剤。

過去、Fプロジェクトが確立されていない頃、違法なクローン実験に用いられた細胞劣化を抑える延命剤。

ただその薬を使ったとしても、三年と持たない粗悪品

今、何処の研究機関も作るはずの無い存在しない物。

それを彼が服用すると言う事は…

「劣化……クローン…」

Episode - 20 (後書き)

感想を待ってます。

何でも良いです、罵詈雑言ならハアハアします。

楽しいと言ってくれたら、イヤッフウウー！！！します

Episode - 21 (前書き)

はい、続きを更新。

いい感じ。そろそろ主人公を六課から飛ばす予定

能力解説はまたもうちょっと進んだら…

Episode - 21

「……私は如何したら……」

シャマルはアレから悩んでいた。

劣化クローンであるということは、違法な組織、または個人が関わっていると言う事になる。

真実を確かめるため、気は進まなかったが彼の過去を洗い出し、探っていた。

だが何処を探しても彼の過去は出てこない、確かにどのような仕事をしていたか、などの情報はあるが彼の出生や、直接関係する人物は存在しなかった。

その事からシャマルは更に思い悩んだ。

（ここまで調べて何も出てこなかったということは、やっぱりそういうことなの…？）

シャマルの頭に浮かぶものは、はやての隣に立ち、笑い合うシャルルの姿。

数ヶ月共に過ごし、家族のように接してきたその姿は心から楽しそうで、はやても知己の友人以外では彼以上に楽しそうに会話をしている所は見たことがない。

「如何したん？シャマル。食事進んでないみたいやけど？」

「え！？何でもないわよ？大丈夫」

今持つ情報をはやてや、隊長たちに伝えるべきか。

（もう少し…。もう少しだけ調べよう。それでダメなら皆に…）

今の関係を出来るだけ崩したくない。その思いからシャマルはもう暫らく様子を見ることにした

その頃シャルルは

「ハンカチ持ったね？IDカード忘れてない？」

「えと、大丈夫です」

「小遣いは有るか？何なら俺が…」

「そんな、悪いよ。私が渡すから…」

二人して財布を取り出し、エリオにお金を渡そうとする

「御二人とも！その、僕もちゃんとお給料を戴いてますから」

「「あ、そっか」」

六課結成初めての休みを貰ったエリオ達の世話を焼いていた。
この二人大概親馬鹿である

「ライトニング隊も一緒にお出かけ？」

隊舎の外まで見送りに行くと、丁度なのはがいた。
どうやらスターズ隊の見送りらしい

「あんまり晩くならない内に帰るんだよ？夜の街は危ないからね」

「。地区に入っちゃダメだぞ。あそこが一番危ないんだから」

「「はい！」」

「にやはは、そうしてるとなんだか家族みたいだね」

「か、家族！？そんな、恥ずかしい…」

「家族か、良し！二人とも寂しかったら俺をお父さんといって良いぞ？」

「お父さん、ですか？」

「お父さん…」

確かめるように口にするエリオとキャラ。

「嫌なら良いが…」

「いえ！そんな。えと、それじゃ…」

エリオとキャラは互いに見詰め合き

「「行つてきます。お父さん、お母さん」「」

と、言ってきた。

発言には驚いたものの、こちらもしっかり笑顔で返す

「「行つてらっしゃい」」

その時のフェイトの顔は頬が紅く目尻に涙があったとか

「さうと、遣ることも一先ず終わったし、何して過ごすか」

見送り後、自分の仕事を終わらせたシャルルは遣ることも無く、ただ隊舎を歩いていた。

暫らくして、辺りが騒がしくなった。

出かけ先のキャロから隊に全体通信のようだ。
端末を拝借し、その通信を盗み聞く

『こちら、ライティング4。緊急事態につき、現場状況を報告します』

レリックを持っていた少女を発見との事。
そして映像を見て背筋に冷たいものを感じた

「如何言つ事だ…これは！？彼女まで…彼女まで愚弄するのか！」

そこに映る小さい少女。彼が知る昔の聖王に瓜二つ、さらに微弱に感じる魔力が彼の怒りを更に駆り立てる

「これが…予言のもう一人の王…。まさか君を複製するとは…なあ、オリヴィエ」

声を押し殺し、頭を冷静にしかしその心は激しく怒りに燃えていた

「あの場にいると言うことは、スカリエッティが複製した訳ではない様だな。奴が逃がす訳が無い。…ネイキッドは今だ起動せず、か俺が出られないならば…」

以前来た林に足を向ける。

今日はまだ日が高く、隠れるには難しいが、緊急事態で皆忙しいため平気だろう。

その場に座り込み座禅を組む。

すると、以前のように鎖が人の形を取り始めた

「今日の所は、あの子の護衛だ。それ以上のことは今日出向いたメンバーが居ては無理だろう」

額から汗が流れる。制限のある状態で”これ”を創り上げる事は身体に負担があるようだ。

「後は彼女達がつまく遣ってくれる…」

座禅を解く事無く目を瞑る。彼の頭の中には、人形ひとかたの視点で物が見えていた

「リンク確認、鎖影さえい行動開始」

『これは、なかなかの広域殲滅戦だな。はやてが、限定解除をしたか』

海上付近に向う途中、大きな爆発とかなりの魔道師の気配がした。まあ、本体のすぐ上で超長距離砲撃を放っていれば誰でもわかることだが。

『それにしても何だ、この反応は。大型召喚？やはり、この状態は感覚が狂うな…』

愚痴を溢しながら、向う方角とは別の場所での戦闘を感じる。

『間一髪って所か。今有る貯蔵魔力なら一発くらいなら防ぎきれるか…』

目の前にへり、そして離れた位置で高エネルギー反応。魔力ではない所を見ると、戦闘機人の能力のようだ。そして砲撃が放たれる…

「フェイトちゃん！追いつける！？」

「限定解除しても難しいかも…」

なのはとフェイトはへりに向って全力で飛ぶ。しかし、その速度では恐らく敵の砲撃に間に合わない。そして無情にも砲撃が放たれる

『ちよ、ちよつと待ってください！魔力反応確認！ランクはオーバーS！？へりに向って突っ込みます！』

突然の介入、そして着弾。煙でへりとその影を包み込む

『やれやれ、落とさせないよ。死なないとは言っても、彼女の面影のある子を傷つく所は見たくない』

煙の向こうから聞こえたのは、何かを介して話しているようで、聞き取りづらかったものの間違いなく帝王の声だった

Episode - 21 (後書き)

はい、暫らく病院で世話になってました。熱いからね…

皆さんも気をつけてお過ごしください。

あ、でものんびりする時間が出るのは良いもんだよね？

Episode - 22 (前書き)

空いた口が塞がらない……

一日で1万PVを超えたぞ？これは何の間違いだ？
この作品がそこまで……？

これだけは言っておこう、なのはのネームヴァリユーは偉大なり！
！

Episode - 22

『へ、へりは健在！直撃を免れました！』

オペレーターからの報告を聞き一安心したが、煙が晴れ、そこから出てきたのは見たことの無い黒い塊。先程聞こえた声は帝王のものなのに、その姿は全く見覚えの無かったものだった

『謎の魔道師も健在！…あれ？魔力がC？そんなさつきは…？』

どういう事が解らないが彼の魔力は減ったらしい

『何をしている。早く敵を追え、ここは俺が守ろう…』

その声到我に返り砲撃の犯人を追うことにした。現在、彼は防衛をしてくれた事から戦闘の意志はなしと判断し、その場を離れた

「うつそゝ、ドクタゝあんなの聞いてませゝん」

「どうするの？」

「とにかく逃げましょう？」

身体にピッタリフィットしたボディースーツを着込んだ二人組みの女性
性が、予想外の人物の出現に驚きながらも撤退の準備をする。
が、そこで上空からスフィアによる攻撃。

「見つけた」

「早い！？」

フェイトに発見されその場をすぐに逃げ出すが、少しすると、追いかけることをせず距離を取り始めた。

その行動に冷や汗が出てくる。諦めるということは無いのだから残された選択肢としては

「広域空間攻撃！」

「うつそ〜ん！」

はやての広域魔法が見舞われる

「遠き地にて、闇に沈め…、デアボリック・エミッション！」

それも間一髪で難を逃れるが、抜けた先にはすでになのはとフェイトが砲撃をスタンバイしていた

『む？もう一人居るか…。ここの防御はもういらないな。今回の事は少々頭にくる。ドクター達に警告でも放っておくか…』

足に力を入れ、その場から消える。

転送ではなく、ただ移動しただけなのだが、見た者は消えたように感じたことだろう

二人の砲撃から逃げ切った者たちは一呼吸置いて安堵していた

「トーレ姉さま、助かりました」

「感謝…」

砲撃の寸前新たに来たトーレによって救われたのである

「ボーっとするな、さっさと立て。馬鹿者共め、監視目的だったが来ていて良かった。セインはもう、御嬢とケースの確保を完遂しようだ。合流して戻るぞ」

『その前に伝言を頼もうか…』

周りからの監視を抜けたのを確認したはずだったのに何の気配も無く、突然背から声がかけられた。

薄ら寒いものを感じながら、三人は振り返り人物を確認した。

その場に居たのは、消えかけ人の形を取った鎖、今までこんな物聞いたことが無い

「私のライドインパルスに追いついたのか…！」

『あの程度の速度なら問題無く。戦闘するだけの余力は無くなってしまったがな…。それより伝言だが、”聖王を駒とするなら貴様の粗末な命を賭ける”と言っておけ。貴様が作った出来損ないからと言えはわかる筈だ』

言い終わるとその姿が完全に消失した。

異様な空気を残しながら…

「ハア、気分悪いな……。まさか限界まで動かすことになるとは思わなかったからな」

昨日は、力の使いすぎから体調を崩し、そのまま倒れるように寝てしまった

「まずは食事を取らなければ――」

「うわあああんっ!!」

隊舎を抜ける途中、なのはの部屋から子供の大声が聞こえてきた

「子供？誰かの連れ子でも居たのか？」

扉の前まで来たところではやてとフェイトと鉢合わせをした

「なのはに用事か？」

「それはこっちの台詞や、何してるん？」

「いや、この部屋から子供の泣き声が聞こえたものだから…」

「優しいお兄さんとしては、聞き逃せなかったって事かな？」

「子供は好きだからな。そうじゃなきゃ、ボランティアなんか出来ないよ」

会話をしながら扉を開ける。その向こう側では、小さい少女に抱きつかれ困惑しているなのはとその周りで同じくどうしたらいいか迷っているフォワード陣。

子供ひとりに悪戦苦闘する姿は歳相応のお姉さんだ。

「エースオブエースにも、勝てへん相手は居るもんやね」

など暢気な感想を言うはやて、その脇を通り抜けあやし始めるフェイト。フェイトのあやしは堂に入ったもので、あつと言う間に泣き止み、我慢させることまでしてしまった

「それじゃ、この子のお守りは俺がやるよ。こついつのには慣れるからね」

「任せてええか？」

「ああ、任せてくれ。君達はさつさと仕事に戻りな」

そう言つて真つ直ぐヴィヴィオに近づいて行くシャルル

「こんにちは、ヴィヴィオ。ヴィヴィオは綺麗な眼をしているんだね？ほらお兄さんも同じ色をしてるんだぞ？お揃いだ」

出来るだけ優しく語り掛けるシャルル。

「そつえばシャルルさんもこの子と同じオッドアイなんですね」

「それにシャルルさんも子守に物凄く慣れているようなんですが…」

「それはそつだよ。彼は私以上に子供の相手をしてたんだから」

フェイトが彼の今まで遣ってきたことを語る。

施設に入った子供達などを、元氣付けるために通い詰めるといったことを幾度も繰返してきたシャルルにとって、あやす事など手馴れた物だ。

本人も自分で言っていた通り子供好きで苦に感じたことが無いのだから天職なのではないだろうか？

「おゝい、そこで話し込んでないで早く行ったらどうだ、皆これから仕事だろ？」

いつの間にか、ヴィヴィオを担いでいるシャルルが急かす

「あ、聖王教会行くために屋上でヴァイス君待たせてるんやった！なのはちゃんフェイトちゃん急ぐで！」

「ほら、あんた達も行くわよ。私達だってそれほど余裕が無いんだから！」

その場から駆けて行くメンバー達、それを見送りこれから何をするか考える

「それじゃ、とりあえずお兄さんの部屋に行こうね。お絵かきして遊ぼうか」

「うん、パパ！」

「……………お兄さんの部屋に行こうか？」

「うん、パパ！」

「……………まあ……いつか……………」

Episode - 22 (後書き)

今更ながら一話一話が短いのだろうか？

全然先に進んでいる気がせん。

後何話かダラダラが続くかも…

Episode - 23 (前書き)

俺はきつと馬鹿なんだ……

同じ日に投稿なんて…暇じゃないのに…

Episode - 23

「くくくっ！そうか、彼がそう言ったか！ありがとう、ノーヴェ。よく伝えてくれた」

研究室で伝言を聞いたスカリエッティは愉快気に笑い、モニターに映る鎖の集合体を眺める

「ドクター、気になっていたのですが彼は一体何者なのですか？それに出来損ないというのは…」

名前だけが、度々その存在はドクター自身から語られていたが、何が失敗で何が成功なのか語られていない

「うん、そうだったね。良い機会だ君達にも話しておこう。彼とはこれから幾度か、衝突することになるだろうからね。教えてあげよう彼という存在がどういうものかを！」

芝居がかった動作で、手を天に掲げ自慢げに語りだした。自分が作った作品についてを…

シャルルにヴィヴィオを預けてきたのはたちは、聖王教会で真実を告げられていた

「私の能力、プロフエーティン・シェリフティンで予言された王。これは恐らく帝王のことでしょう。彼は古代ベルカにおいて忌み名として伝えられています。そのため詳しい情報がいままでありませんでした」

聖王教会に措いて機動六課の本当の設立理由が、騎士カリムの予言能力にあったことが明らかになった。そしてその予言の内容が開示され、今出来る予想を立てていた

「今までということとは、今は？」

「今は、無限書庫司書長のユーノ・スクライアさんに依頼し、情報を少しではありますが得ることが出来ました。本来ならまだ時間がかかる筈だったらしいのですが、はやてが頼んでいたものがこちらと重なっていたことから、大幅に時間短縮が計れました」

「はやてが頼んでいたことって確か…」

「そう、夜天の書と帝王の関係性について。私もまさか、古代ベルカ時代の王様と関係が有るなんて思わへんかった。その辺はまだ調べられてないんやけど、少なくともその時代に関係があったのは確かや」

「それはまた今度で。彼が本当に帝王で、その力を全て使えるのなら、それだけで世界にとって脅威になりえます」

カリムは今有る情報を見ながら真剣な眼差しを今居るメンバーに向ける

「帝王の恐ろしい所は、彼一人で国家戦力相当の軍事力を作り出せることと、彼自身も数多の王を圧倒するだけの個人的な武力を持っています」

「そりやまた、無茶くちやつすねえ」

スカリエッティのアジトにて、ナンバーズが一人を除いて集まっていた

「ああ、その通り。その強さ、その能力、どれを取っても彼は異質だ。そして彼が忌み名として語られることになった事件に興味を抱いた評議員の方々が、私にそのクロージングをするように言ってきたのさ。自分達の傀儡にするために」

「それが帝王。ドクターが作った人造魔道師……」

「そうだ、だが私も彼らの言うことに従ってばかりいるのに飽きていた頃だったからね。複製のさいに、わざと劣化するように作ったというわけさ」

「なるほど、それが失敗作といわれるわけですか。ですが成功作とは？」

「彼を複製させるために用いた技術はFプロジェクトなのだがね、どいうわけか、彼は生前の記憶を持っているようなのだよ！そうでなければ、生まれた直後に逃亡など出来るはずが無いのだから！」

未知の現象を思い出して興奮するスカリエッティ。喜悦に歪む表情は幼児が新しいおもちゃを貰った時のようで、瞳が輝いていた

「さらに！通常、人間という器には、内包できる魔力の総量というものが決まっている。限界以上の魔力を内包させることによって、人間は内側から崩れ落ちてしまうのさ。所が！私は彼に限界以上の魔力を内包させることに成功した、いや、成功したというよりは、彼が耐え切ったというべきだろうな。その証拠に、劣化を続ける身体と限界以上の魔力を持って尚、今も保って、活動をしているのだからね」

「これから起きる事件で危険視すべきはこの二名、スカリエッティと帝王。今までの戦闘を見る限り、この両名は敵対関係にあるが、これからどうなるか解らない。くれぐれも気をつけてくれ」

クロノが確認のためにこれからのことを言っていく。
それを浮かない表情で聞くなのは。

「なのは、如何したの？」

フェイトが心配して声をかけた。

「うん、あの人は、そんなに悪い人なのかなって……。思っちゃって」

自身のことと、今までの事件を通して感じていたことをなのははいった。

それは、フェイトにしたってはやてにしたって感じていた事である

「気持ちは解るがアレは犯罪者だ、気持ちを切り替えてくれ。僕も彼については、釈然とはしていないんだ」

「え！？クロノも！」

「ああ、色々有ったが、奴に助けられた局員は二桁では足りない……」

クロノは何かを思い出すように、目を瞑り、深く息をつく

「だからといって、犯罪を見逃すわけには行かない。それが僕達の仕事だ。だから…」

「とは言ったが、君達が彼とぶつかる事は、可能性としてはかなり低いのだがね」

「どう言つことだよ？この間だって、邪魔されてたじゃねえか？」

「さっきも言ったが、今も身体が持っている事のほうが奇跡に近いのだよ。私の計算では、恐らく後数回の戦いが、彼の限界だ…」

先程の顔とは対照的に、心底残念そうに肩を落していた。

「故に、彼を危険視しなくてもいい、作戦に支障は無い。もし、出会っても、時間を稼げば彼は自滅する。その後回収してくれても十

分データは取れる。だから……」

「「勝負（祭り）は、公開陳述会だ！」」

両者の思惑が交錯する公開陳述会まで、後数日……

Episode - 23 (後書き)

いよいよ陳述会。クライマックスに近づいて行きますなあゝ

読みづらいかも知れないけど、今回の話でシャルルの秘密が完璧に
暴露！

後は正体を明かす所を如何するか…

Episode - 24 (前書き)

一日一話♪三日で三話♪一話進んで二話下がる♪

更新、なんだか頭が沸いてきた…

Episode - 24

「はやてちゃん…。ちよつと良いかしら…」

「如何したん？そんな顔して…」

シャルは決心した。幾ら探しても出てこない情報、大事な時期で有るからこそ、心配事は早めに摘み取ることにしたのだ。

「このデータを見て欲しいの…。これはシャルル君の落とした薬のデータなんだけど」

「これって…！？」

「うん、彼は劣化クローンなの…」

シャルとて苦渋の決断だった。言ってしまうえば、違法研究に携っているとして、何かしらの罪に問われるかもしれない、はたまた、保護を受けるかもしれない。

色々な事を考えて漸く出した結論だった

『シャルパパ、行っちゃいやああ!?!』

連絡を取ろうとしてモニターを開いたら、ヴィヴィオに泣きながら抱き付かれているシャルルと、それを宥めているのはとフェイトが居た。

『ヴィヴィオ、我が儘言わないで…』

『シャルパパも困ってるから、ね?』

『いやああ!?!』

『あゝ、困ったな…』

絵を見る限り、出張に行くお父さんを引き止める娘とそれを止める母親と言った所だろうか。

本当の家族のように微笑ましくあり、今から彼に詳しい話を聞かなければならないと思うと罪悪感が沸く

「皆、如何したん?」

『はやてちゃん!』

『実は、シャルルの取材日程が今日で終わりだったでしょ？それで帰り支度をしてたらしいんだけど…』

「なるほど、それを話したらヴィヴィオが嫌がったと」

どうやら、フェイトでもあやすことが出来ないほど、泣き続けているらしい。

シャルルはしゃがみこみ、ヴィヴィオの眼を見て話し出す

『ヴィヴィオ、今日は帰るけど、また直ぐに会いに来るし、ヴィヴィオが危なくなったら、お父さんが必ず助けてあげるから…。だから、泣かないでくれるか？』

そう言うと、眼に涙を溜めながらも渋々ながら離れるヴィヴィオ。安堵する面々。

「ホッとしてるとこ悪いんやけど、シャルル君にはこれについて話してもらいたいんやけど？」

手に持って見せるのは落とした薬。
それを見て険しい顔をし、懐を探るシャルル

『……解った。君の部屋に行けばいいか…？』

「隊長達も同席させるけど問題ないか？」

『え！？私達も？』

『話さなきゃいけないことが出来たんだ、居てもらったほうがいいかもしれないな』

「単刀直入に聞くで、シャルル君、アンタは劣化クローンであつて
る？」

「それが解ったから呼んだんだろ？」

部隊長室に集まる六課隊長陣とシャルル。
劣化クローンと聞いてその場に居る人間の表情が変わる

「劣化クローンで私と同じ…」

「いや、言っちゃ悪いけどフェイトちゃんより性質が悪いでこれは…」

相変わらずの表情を浮かべているシャルルとは正反対にはやての表情は堅く引き締まっていく

「後……。どれぐらい生きられるん？」

「さあな、余り時間は無いとは思うけど…」

更に場の空気が変わる。余命が残り少ない。いきなり思い事実を告げられて驚かない人間は居ない

「…そうか。なら…犯罪に関与してることは…?」

「その前に、連絡したい人が居る。もし、こういう事態になったら連絡を寄越すように言われているんだが、構わないだろうか？」

「構わへんけど?」

「ありがとう、……」

端末を手渡し、出てくる人物に備える。

恐らくそれが彼の身元を証明する人間だろうからだ。

『何じゃ、お前さんから連絡をくれるなんて珍しいじゃないか』

だが、そこで出てきた人間は彼女達の予想を遥かに上回っていた

「キキ、キール元帥!？」

そのモニターに映ったのは、時空管理局・武装隊栄誉元帥ラルゴ・キールその人だった

『ほほっ！別嬪さんがいっぱいおるな。なんじゃ、嫁さんの紹介か？ミゼットとレオーネにも知らせんと……』

「おい！そんなことで呼んだんじゃないよ義父さん！」

「「「「義父さん!?」「「「「」

「この人が俺の身元引受人…みたいな人だ」

『公式発表じゃないかの』

余りのも突飛な事実に放心状態。

いち早く気付いたフェイトが何かに納得したように頷いていた

「シャルル・K・グリーンフェルトのKってキール元帥のファミリーネームだったんだ」

「グリーンフェルト方は俺の誇りだからな。悪いとは思ってたんだが、二つのファミリーネームを使ってるんだ」

「え、え〜と、ではシャルル君の件は…」

『勿論全て承知しておる。それら全部踏まえた上での身元引受人じゃ』

その場に居た全員が肩を落し崩れ落ちる。
仲の良い友が、犯罪者ではなかったことで張り詰めていた緊張が解

けたのだろう

『それで？ワシはもう良いのかね？』

「は！？も、申し訳ありません。お忙しい中、ありがとうございました！」

敬礼をして、返事をする

『なに、家の奴の疑いが晴れて良かったわい！はっはっはっは！』

モニターが切れ、静寂が続く。嵐が去った後のようにドツと疲れが出てきた

「あゝ、大丈夫か？俺この後用事が入ってるんだが、もう出て平気か？」

「あ、ごめんな、変な疑いかけて…」

「気にしてないさ、むしろ当然の反応だよ。それじゃな、また、何時か会おうな」

「シャルルも！身体、気を付けてね！あんまり無理しちゃダメだよ！？」

「そうだよ！ゆっくり療養して少しでも長く…」

「大丈夫だって、自分の事は自分で判断できるから」

そして扉を潜り、外に出る

外に出、また緊急回線に繋げる。先程とは違う、仕事をする時、帝王の顔だ

「突然の呼び出し申し訳ありません。でも宜しかったのですか？私の身元引受人を公言してしまっ。もし世間にバレでもしたら」

『何言っておるか。それはワシ、ミゼットとレオーネ、三人でも話し合ったこと。ワシ等の依頼を聞く代わりに、動きやすいようにワシの名を貸しておるんじゃない？ 契約に則っただけじゃ…』

「そうですか。では引き続き」

『ウム、管理局の膿み出しを頼む。一番の優先は評議会じゃがな』

「それは勿論、そろそろ、引き摺り下ろして見せますよ…」

Episode - 24 (後書き)

ご都合主義が嫌い？知らんよ！俺は大好きだ！！

御免なさい。でもこれで、幾つかの話でシャルルが連絡を取っていった人物が誰だか判明したと思います

Episode - 25 (前書き)

更新します。

最近PVが増えて嬉しい限りです。

Episode - 25

「とうとう明日が公開公開陳述会…、恐らく予言の正否を決める時…」

薄暗いマンションの部屋で明日の準備を済ませるシャルル。不安点は、アレから起動をしないネイキッドのことだ。

スケジュールを狂わせる奴ではないので、そろそろ起動するはずなのだが、何時もより知らせが遅い。

やはり最新鋭の揃う本部にハッキングを仕掛けるのは無理があっただろうか…

何をやっているのですか？決戦の時は近いというのに…

「のわっ!？」

暗い表情を浮かべながら準備をしていたらいきなり声が聞こえた

「お前…！？遅いじゃないか！何をやっていたんだ？」

いえ、言われていた通り、管理局の洗い出しを…。そしてやっと掴めました。評議会の居場所が

「何？そこまで遣っていたのか！？今まで、出てこなかったものを」

はい、場所を気付けた原因は、洗い出しの最中、不審な女性のお蔭ではあるのですが…

「不審な女性？それは…」

はい、入局当時の情報が出てこそ、家族構成など全て偽りです。恐らくですが戦闘機人かと…

それを聞いてシャルルは考え込む。ここに来て人手が足りないのだ。恐らくスカリエッティは、この氣に乗じて聖王の遺伝子を持つヴィヴィオを連れ去るだろう。

自身の死後の兵器のため、どのような物かは余り詳しく知らないが、遺伝子情報を読み取り起動する兵器は知っている。あれほど小さい子供を利用するなどそれ以外に考えられない。

更に評議会に乗り込み、決着を着ける。

ここまでで二人の人間が必要だ、また陳述会にも出向き、予言の阻止をしなければ

「なかつ大地の法の塔、虚しく焼け落ち……か。しょうがない、リミッターを4段階開放して、鎖影を創る」

何を言っているのですか！？そんなことをすれば何分も持ちませ

んよ！？

「お前こそ何を言っている…。これさえ凌げば、もう俺の出番はなくなるんだ。お前の言っている時間制限だつて、身体に大きく変調が出ない時間なだけだ、我慢できる範囲だよ」

ですが、そこまで無理をしなくても…。ただでさえ肉体の劣化で、魔力に頼らねば動くことも困難なのに…！

「解ってるよ、そのための4段階だ。そこまで開ければ全盛期と同じように動ける」

…解りました……。もう何も言いません、ただ……死なないで下さい、マスター

「今まで出が一番難しいお願いだな、努力はするよ」

苦笑いを浮かべて日が差し始めた窓際に立つ。その姿が徐々に甲冑に変わり、魔力が進る。

日に当てられ煌びやかに輝く白い甲冑、銀髪をたなびかせ立つその背は決死の覚悟を抱いていた

「俺は止まらない…、この命尽き果てるまで…」

「やあ、ドゥーエ。君からの連絡はあったばかりだが、何かあったのかい？」

『はい、どうやら帝王にこの場を嗅ぎ付けられてしまったようです。どのように処理を……』

ラボでスカリエッティがNo2ドゥーエより報告を聞いていた

「ほう、気付かれましたか。…では少し早いが、ご老体達には退場願おうか」

『了解しました、迅速に処理します』

通信が切れその場に他のモニターが開かれる。
その向こうには戦闘準備を整えたナンバーズとゼスト、ルーテシアの姿がある。

「ドクター、宜しいのですか？」

「なに、彼らが今いなくなった所で大筋に変化は無い。我らのスポンサー氏に最後に見せてやろう。我らの想いと、研究と開発の成果をな……………さあ！始めよう！」

ナンバーズが行動を開始する……

『何だこれは！？』

『ジエイルめ！暴走しおって・・・！』

『まったく、我らへの恩を忘れたか！』

暗い室内で脳髓同士が会話をしている。

生命維持ポット内に漂っているその姿はとても管理局の最高権力者とは思えない

「お悩み事ですか？」

メンテナンスの為に訪れた女性が憤慨する脳髓に語り掛ける。

『ん、お前か、何、些末な問題だ。お前が気にすることではない』

『その通り、こやつもすぐに自分の過ちに気付き、頭を垂れに来るだろう』

「ふふふ」

『何が可笑しい・・・？』

今も絶対優位に居ると考えている彼らのその滑稽な姿を見て、スクリエッティに似た笑みが浮かぶ

「いえ、私はただ・・・」

その姿が徐々に変わり、ナンバーズと同じボディースーツを着た女性に変わる。

それが彼女の能力【偽りの仮面】^{ライアーズ・マスク}、管理局の優れた検査機でも気付けないほどの精巧な変身が出来る、潜入任務には最適な能力である

『お前は、ジェイルの！？』

「ここで、死んで頂きます」

固有武装である、ピアッシングネイルと呼ばれる爪型の装備を掲げ、振り下ろす

「な！？」

が、突然身体が自由が利かなくなった。
自分の身体を見下ろすと、何重にもなって身体を縛っていた

「それをされると困るんだが…」

声がした方を振り向くと、そこには帝王の姿が。
だがそんなはずは無い、だって

「そんな…、貴方は今六課に居たはずじゃ・・・」

事実モニターに映し出されている映像には帝王がシャルとザフィ
ーラと協力し、防衛に当たっていた。
がそこでまたおかしなことに気付いた。

「アレだけの力があって防衛？撃退ではなく？」

謎が頭を駆け巡る。幾ら考えても答えに辿り着けない

『おお！お前は。漸く帰ってきたか！』

『まったく何をやっている！早くコイツを片付けんか！』

『ふん！これだから出来損ないは困るのだ！』

口々にシャルルに命令を飛ばす。自分達の置かれている状況と敵対関係についてまったく考えていない。自分達が創造主だと威張り散らし、それが当然とばかりに振舞う

「何を言ってるんだ、あんた達は…、俺は、あんた達を社会的に抹殺するためにこの場に来たんだ。全てが闇に消えないようにな」

これより数多ある事件の全てが明かされる

Episode - 25 (後書き)

原作遵守だが、ちょっとだけ順番を変えます。

この人たちはそもそも、本編に絡んでなかったんで、何処で出すか迷ったんですね。

おかしいところがあったら感想をお願いします

Episode - 26 (前書き)

更新します。

今回はちょい悩んだ。正体暴露の回！お楽しみに！

Episode - 26

「まったく！やってられないっすよ！」

「愚痴愚痴うるせえ！真面目にやれ！」

「解ってるっすけど、こんなの面倒っすよ」

「姉もそう思う、タイプゼロを戦闘不能に追い込んだのは良いが、直後にコイツとは……とりあえず、時間を稼げば勝機はある」

現在三人は、ある人物と戦闘を行っていた。

（それにしても何故ここに居る？オットーからの連絡ではコイツと戦闘をしているとの事だったけど……）

それは帝王。

六課と今現在目の前にいるモノ、そしてまだ知られていないが評議会に居る三人目。

帝王は複数の場所に存在していた

「如何なつて…」

ドゥーエは捕まりながら目の前に表示されている状況に、目を丸くする

「気になるか？」

これからする事の準備の為に端末をいじりながら、こちらに顔を向ける事無く声をかけてくる

「っ！…当然でしょう。同じ人間が違う場所に同時に存在してる。これが気にならない人間は居ません。見たところ別人という訳ではないのでしょっ？」

見えている範囲では、それらの動きは同じである。
つまり変身魔法を使った別人が居るという事は無い

「ああ、そうだ、だが違う」

答えがちぐはぐだ、最初に肯定して否定した。如何いう訳だ？

「俺と、六課にいるモノは同一体だ。そこで三人と戦っているのは違う」

ギンガを庇いながら戦う帝王の映像を指す

「つまり今の貴方は、コピーだど？」

「そうだ、俺はこういう存在だ」

彼は手をかざす、するとその手が途端に崩れ、鎖になる

「俺はコレが変身魔法を行使した存在で、本体とは別の思考を持つ。まあ、戻ればそれも本体に蓄積されるし、ホイホイ使えるほど簡単な魔法でもない」

「……そんな大切な事を教えて宜しかったんですか？」

「今までこの能力の対処をいくつかされたが問題なかった。故に喋ってしまっても——ぐっ!？」

帝王のコピーが苦しみだし、鎖が緩む

「はっ！」

好機と見たドウエは緩んだ隙間から抜け出した

「お三方の殺害は無理だと判断し、この場合は引かせてもらいます。その方々をどのように使われるか存じませんが、ドクターの夢は止まりません！」

走り抜けるドウエ、それに小さく舌打ちして、ゆっくり立ち上がる

「六課にいる奴の貯蔵魔力は残り僅か……、本体も限界か……」

「ハアハアハア……」

背にギンガを隠しながら、意気を荒げ、膝を折る

「ドクターの言ってた事、本当だったすね」

「ああ、こちらでも手痛い損傷を受けたが、目標の確保は出来そうだし……」

やられたと思った、最初からこちらの弱点である時間稼ぎが目的だったようだ。

近距離のヒットアンドアウェイ、中距離の爆炎による煙幕、長距離からの牽制、それらが上手くかみ合った事と、ギンガを庇いながらの為全力が出せないことが、時間を与えることになってしまった。体力はそこをつき、戦うことが出来なくなっただけでなく、仮面は剥がれ、素顔を晒すことになってしまった

「チッ、さっさとタイプゼロを詰め込んで帰ろうぜ」

「させ——」

「ギンねえ——!!」

させないと、叫ぼうとした瞬間、スバルが飛び込んできた。

その荒れた戦場に現れたスバルの瞳は姉であるギンガに向けられる

「あ、ア、ああ、ああアア、うああああアアッ!!」

血を大量に流しながら横たわるギンガを見たスバルの中で、何かが切れた。

スバルから魔力ではないエネルギーが溢れ、風を生む

「ハアハアハア……、スバル……」

こちらの声は聞こえてない。スバルには目の前敵のことしか見えていないようだ

「ギンねえを……よくもおっ!!」

スバルが突っ込む。

「今のうちに治療を……」

荒い息を整える間もなく、魔法を行使する。
酷い怪我をしているギンガの応急処置をする

「ノーヴェ、ウェンディ、アレは姉が抑える。悔しいがこうなつてはタイプゼロの回収は不可能だ。ここから離脱するぞ」

「了解つす」

そこから離脱を開始する三人、それを追うスバル。
無理な力に耐え切れなくなり始め、マツハキヤリバーから煙が出始めた

「この子なら無事だというのに……！」

恐らくギンガが死んでいると勘違いしているんだろう、殿を務めるナンバーズを相手に、更に力を使う。

そこで更なる爆発が起き、スバルが吹き飛ばされる。

「逃げたか……」

救援に来たナンバーズによってその場から姿を消した。
だがそれでも後を追おうとする

「スバル、その彼女なら無事だ。生きている……」

肩を掴み動きを止め、こちらを向かせる。

「あ……、シャルル、さん……？無、事……あ、あは、よか、った
……」

ゆっくり崩れ落ちるスバル、力の使いすぎによる一時的ショートの
ようなものだろう。

デバイスも完全に落ち、ボロボロだがまだ直せる範囲だ

「スバル！」

少ししてからティアナを抱いて飛んでいたのはが追いついた。
こちらはもう大丈夫だろう

「ゴホッゴホッ！」

《ビチャビチャ》

彼の口から血が吐き出される

「え……？シャルル、君なの……？」

スバルに駆け寄り無事を確認したなのはは、漸くこちらに近づき、顔を確認した

「やあ、なのは……」

もはや隠すことを止めたシャルルは口元の血を拭い笑いかける

「な、何でシャルル君が……その格好をしてるの……？」

聞かずともなのはにだってその意味ぐらい解る。だが、何故今まで気付かなかったのか。髪の色が同じ、体格も声だって似ていたのに。それは恐らく、魔力の反応が原因だろう。

シャルルの日常生活で感じる魔力は一般人、もしくはそれ以上に小さい物だったから、あの圧倒的な存在感と、魔力を持つ帝王と結びつかなかったのだ。それ故に解らず、気付かず

「そのままの意味だ、俺が……【帝王シャルル・グリーンフェルト】だ」

こんな、再開を果たすことになったのだ……

Episode - 26 (後書き)

如何だったでしょうか、する筈だった事件を公にするのを先送りにして遣ってしまった。

前回の最後の一文が無駄になったが後悔はしていない！

感想待ってます！

Episode - 27 (前書き)

更新します。そしていつの間にか三十話！

そろそろ本当のクライマックス！

後何話続くか解りませんが、温かく見守りください

Episode - 27

「だ、だってシャルル君は……三提督が……」

自分が探していた人物、その予想外の姿になのはは、頭が混乱していた。

「彼らとは、契約がある。それを遵守した結果、あのような形になった」

「でも！でも、貴方からは魔力を感じたことなんて……」

「身体に幾つもありミッターをかけてるんだ、そう簡単に解られたら困る」

「じゃあ、やっぱり……」

「騙していた、と言う事になるのか。最初から全てを見させてもらって——」

そこまで口にしてから、シャルルは固まった

「急用が出来た。この場を後にさせてもらうつよ?。」

「あ、だめ、だめだよ!動いちゃダメ、休まなきゃ!。」

「そうしたいのも山々なんだが、ヴィヴィオが……。それに下準備はしてあるからね。」

「なのには、捕まえるという考えはなく、ただ身体を案じてくれていた。」

「それがとても嬉しかった。」

「ここで止めるよ!行かせないから!。」

「幾ら早く動こうと関係ないんだよ……。チェンジ・シフト発動!。」

シャルルが魔法を発動させ、その場が照らされる。

光が収まった所には、先程と変わらぬ位置にシャルルが立っていた

「シフトを確認、貯蔵魔力が尽きた事により変身魔法を解除し、本体に知識を還元する。」

シャルルは鎖になり、鎖は魔力の粒子となって消えていった。

「え、え？消えた……？」

なのはには何が有ったか解らなかった

「ハアハア……。シフト確認。知識補完完了……」

周りを眺めると、倒れ臥すシャルとザフィーラが居る。
コピーの手が回らず、六課隊舎は焼け落ちて、ヴィヴィオを抱えて
飛ぶ人物を発見する。

「もう少し魔力を込めて置けばよかった……」

独自の思考回路があるといっても、それは魔力量に依存する。

魔力量が多ければ多いほど、幅広い思考を行う。

ここで戦闘を行ったコピーは、防戦を選択し、被害を最小限に抑えはしたが魔力量の問題で攻勢に転ずることが出来ず、結果的にヴィオの誘拐を許してしまうことになってしまった

「動けっ！動けえ！ヴィヴィオ、ヴィヴィオォー！」

飛び去る敵を追いかけることが出来ず、その場で身体を這わせる。別の場所で魔力反応を確認。かなり大きい反応だ。

「これは、竜……召喚、か……」

目の前に浮かび上がるシルエット、黒く大きな竜、二足歩行で人の様に見える

「アルザスの、真竜、か……。久しく見るが、大きくなったな……」

それも当然、何百年も経っているのだから、竜という存在上、時が経っただけ大きくなるものだ。

その黒竜がガジェットを一掃する。

スッキリするほどの一撃で全てを残骸に変える、がそれだけでは終らなかった。

虚空に向け、プレスを吐き続ける、どうやら召喚暴走をしているみ

たいだ

「六課に……顔を……」

真竜が六課に向いブレスを構える。

それが放たれでもすれば、六課は跡形もなく消滅し、その場に居る人間は間違いなく全員……

「冗談ではない……！死なせるものか…死なせるものかぁー！」

フラフラになりながらも、身体を精神の力だけで飛ばし、六課の前に移動する

「ここは、彼女達の居場所だ…。ヴィヴィオの帰る場所だ！壊させない、守るんだっ！」

両手を前にかざす、鎖が纏まり即席の盾が出来上がる。

それに魔力を注ぎ込み、強度を上げる。

向こうもチャージを終えたのか、口から大きな力を感じる。
そして口が開かれる

「ウオオオオーーーーッ！！！！」

衝突する力と力、生半可な衝撃ではない。

それら全ての衝撃波すら、シャルルはその身に全てを受けていく

「ガアアアアーーーーッ！！！」

つばぜり合いの様に拮抗する攻防もその一撃で終わりを告げる。
キャラが正気を取り戻し、竜を戻したのだ

「あ、とは、ヴィヴィ、オを助けに……」

緩やかに前進しながらシャルルは落下して行っただけ……

『はやて、ちょっといいかい？お願いされていたものが、今全部分かったんだ』

「お願いされてたもの……？」

事件の処理が一段落付き、アースラにて反攻作戦の準備をしていたところ、ユーノから連絡を受けた。

はやてはあの大きな戦艦のことかと思ひ連絡を聞いていたが

『帝王と夜天の書の関係についてだよ。何年も掛かってしまったけど、漸くわかったんだ』

昔から頼んでいた、帝王と夜天の書の関係性についてのものだった。

「今忙しいから後にしてほしかったんやけど……」

『アレについては並行して調査してるよ、それに、今そこに居るんだよね？帝王って人が……』

「うん……」

数時間前にさかのぼる

「信じられません。こんな人が居たなんて……」

墜落したシャルルは、六課のメンバーに回収され、病院に担ぎ込まれていた

「そんなことは如何でも良いよ！大丈夫なの！？」

「はい、生きています。いえ、”生きてしまっています”」

「それ、どういう意味や…？」

「彼の体は既に死んでいてもおかしくない。身体は劣化でボロボロ、更に有り得ないほどの量の魔力が身体に渦巻いていて、どうして死んでいないのか聞きたいくらい…身体は気が狂うほどの激痛が襲っているはずなんです」

皆、言葉が出なかった。何時も笑いかけてくれる彼、戦いで圧倒的な力を発揮していた彼、そんな状態だったなど想像すら出来なかった。

「ただ言えるのは、このまま調整を行わなければ、一週間と持ちません」

「調整？調整って何！？」

藁にも縋る気持ちで聞く。少しでも可能性はないのか、あるならばそれを実行に移すだけだ

「それは、彼を作った人間が持つデータを元に劣化を止めるんです。前例はありませんが、今の技術なら出来るはずですから」

「二人が敵対関係だったことを考えれば、スカリエッティがデータを持つてるんが最有力候補や、結局の所今回の事件を解決せなならん訳や」

『そうだね、そういう意味で、心配事は少ないほうが良いと思うよ？』

「そやね、それじゃ、聞こうか。その話……」

『その前に前提条件として一つ。もしかしたら何だけど、彼には過去の記憶があるんじゃないかな？』

「え？それって古代ベルカ時代ってことか？」

『そう、彼、帝王は夜天の書の創造主だ……』

Episode - 27 (後書き)

ここでのいよいよ、夜天の書の伏線回収。

今まで完全無視していたもので忘れてしまってる人がいっぱい居ると思いますが、張ってたんです。伏線！

感想待ってます！

Episode - 28 (前書き)

更新です！

最近モチベーションが下がる……

暑いからか、仕事キツイからか、はたまた両方か……

Episode - 28

「創造主……それはちょっと……」

可笑しいと声を出しそうになって頭に過ぎる台詞

『本当に、良かった…』

シャルル君のあの台詞、存在を知っているだけでは出てこないだろう言葉。

そこに先程提示された情報、過去の記憶が有ると言うもの。

「まさか、本当に……？」

『それは本人に聞かなきゃ解らないけど、僕は可能性が高いと思うんだ……』

それは今は失われた過去の歴史の生き証人と言う事、それ自体も、とても貴重なもののなにに夜天の書の創造主だというのなら、それ以上の知識、技術を持ち合わせている可能性すらある。自分が創り上げた物の最後を心配する事だって分かる。

「ありがとうユーノ君、お蔭でスッキリしたわ。ここから先はちょい、本人に確かめるから……」

『そうだね、それじゃ、忙しい時にごめん』

「気にせんというて助かったわ。そっちもがんばりや！」

通信を切り、椅子に深く座り込む。

それと入れ違いに医務室から連絡が入った。シャルル君が眼を覚ましたようだ

「シャルル君、あの子達を作ったん君なんか……？」

規則正しく機械が音を奏でる。

身体には幾つものチューブが繋がれ、その先にあらゆる機械がある。

「ここは、何処だ…？」

眼を覚ましたシャルルは辺りを見回し、自分の置かれた状況を考えていた

（竜のプレスを受けた辺りで記憶が飛んでるな、堕ちたか……。という事は拾われて治療を受けているのか。窓のない部屋、僅かに伝わる振動、ここは次元航行船の中か？）

少ない情報ではそれ位しか掴めないが、少なくとも管理局の施設ではあるようだ。

それ以上の情報を掴もうとネイキッドを探すが見当たらない、やはり接收されたか。

立ち上がるうとしたところで、扉が開かれた。

「シャ、シャルル君……？シャルル君！良かった起きたんだね？」

「シャルル、無事でよかったよ……もう眼を覚まさないかもって……」

入って来たのはなのはとフェイトだった。

二人とも眼に涙を溜めて、ベッドに近づいてきた。

「良かった、良かったよ。ヴィヴィオだけじゃなく……貴方まで居なくなったら、私……」

背もたれに寄りかかるように起きているシャルルの胸に、なのはは顔を埋め泣き出してしまった。

シャルルはあの時の出来事を思い出し、ヴィヴィオを自分は救えなかったことに思い至った

「すまないな……助けることが出来なかった」

なのはの背を撫でながら、謝罪を言葉を口にした。

「そんなこと、ないよ。シャルル君は精一杯やってくれた……。こんなに身体が、ボロボロになるまで」

少しして泣き止んだのはは、急に恥ずかしくなったのか赤い顔をしてはなれた

「そうだよ、全部聞いたんだ。もう身体が、まともに動かせられなくて……」

「ばれたんだつたな、当然か……」

「今は緊急時だから、三提督にはまだお話を伺ってないけど、この事件が片付いたら話を聞かせてもらおう積りだよ」

「それも当然だな、それで今の状況を知りたいんだが、聞いても大丈夫か？」

今、仮では有るが勾留されている身の為、無理かもしれないが現状の把握ぐらいしておきたい

「……此処は次元航行船アースラ艦内。そして現在、スカリエッテイ一味を乗せていると思われる飛行船が浮上して現場は混乱してる、けどアチラ側からはまだ何の声明も出されてないんだ。ついでにシャルルのデバイスは本人（機？）の希望でメンテナンスを受けてるよ」

割と簡単に教えてくれたことの違和感を感じたものの、知りたかった情報は粗方得た。

自分からメンテを依頼し、それを受ける管理局。と少し変な状態だが、少なくともスクラップにはなっていないくて助かった

「そうか、それじゃ、君達は……」

「うん、これから対ロストログアからスカリエッティに移行して対処に当たることになる」

「大丈夫、ヴィヴィオは必ず助けるから！」

笑顔を浮かべて、元気に振舞っているがどこか、空元気なのは。ふとそこで、なのはの腕に光る腕輪が見えた。以前自分が壊し無くした物である様だ

「なのは、それ……」

「これ？覚えてるかな？私が助けてもらった時に、シャルル君が落としていったものだよ、それを修理して今まで付けてたんだ」

「覚えてるさ。……それを少し貸してもらって良いかな？」

「そんな！これは元々シャルル君の何だから寧ろそのまま返すよ！」

「そんなことする必要は無いよ、それは君のだ。少し懐かしくてね……」

なのはから受け取った腕輪を手にとつと、内側を確認し、顎に手を置く。

「これから決戦だね？」

「え？うん、そうなるかな」

「前にも言つたけど、俺は君たちが関わった事件は見てるんだ。なのはが無茶をしないか心配だな」

今はそうでもないが、過去の映像ではかなりの無茶を平気で行っていたなのは。

「にやはは、本当に危なくなつた時だけだよ、無茶するのは」

「そんな状況が来ないと良いがな」

腕輪をなぞりながら、なのはに返答する。

「ありがとう、大切にしてくれていたんだな、綺麗なもんだよ。出来ればこれからも肌身離さず身に付けていてくれよ？」

「うん！勿論、私のお守りだもん」

「フェイトも。スカリエッティと因縁はあると思うが、惑わされるな自分を信じる。俺は勿論、お前の子供達も信じてるから……」

「本当に、何でも知ってるんだね……。解ってるよ、私は私なりに決着を着けるから」

「お二人さん、そろそろええか？いちやついてたいんは解るけど、そろそろ行かなあかで、仕事あるやろ？」

何時の間にか扉が開いており、その扉にもたれ掛かる様に、こつちをニヤニヤしながら見ているはやてがいた。

「いちやついてなんかいいよ！」

「そ、そうだよ、少し話をしてただけだよ……」

二人して何に反応したのか、なのはは頬を赤くし、フェイトはもしじしながら否定していた

「それはいいけど、早く行かなあかで？」

言われて慌てて出て行った二人、見舞いに少し立ち寄るだけの積りだった様でシャルルが起きていた事で時間の事をスッパリ忘れていたみたいだ

「……二人が居なくなった所で、個人的なことを聞きたいんやけどええか？」

「ああ、そのために態々二人を出て行かせたんじゃないのか？」

「ばれたか。……それじゃ、単刀直入に聞かせてもらうわ。夜天の書、その創造主の名前は帝王シャルル・グリーンフェルト。これはシャルル君なんか？昔の別人じゃなくて……」

「そこまで調べたなら、想像できているだろ？俺は昔実在したベルカの王、その記憶と経験を全て持っている。つまり、本人であると言えるな」

Episode - 28 (後書き)

キャラ崩壊起きてない？始めた当初からの心配事である。
壊れたら壊れたで、開き直って壊し続けるけどさ……

感想待ってます！

Episode - 29 (前書き)

更新しましたよ。

パソコンのメモ帳で書きたいやつを次々書いていったら、デスクトップの半分が埋まった……
ブログだけの内容を大して考えていないような物ばっかだけど
さ

Episode - 29

「やっぱり……そうなんか……」

「ああ、だから君達には感謝をしてるんだ」

「え……？」

「彼女を救ってくれてありがとう……君が彼女のマスターになってくれて良かった。守護騎士たちも幸せそうだ、昔を見ているようだっ
たよ」

その言葉に、はやての眼に涙が滲んできた

「そんな……そんなことあらへん、私……あの子を助けられんかった……」

我慢出来なくなってしまうたのか、その両目から涙が流れ、肩を震わせながらしゃくり上げて泣いた。

「泣かないでくれ……彼女は言ってたんだろ？幸せだって……」

シャルルは指ではやての涙を拭きながら、優しく声をかけた。
暫らく、はやてはその場で泣き続けた、この何処か懐かしい人の傍
で溜まっていたものを全て吐き出すように……

「ごめんな……かつこ悪い所見せてもうたわ」

「気にしないさ、泣きたい時に泣かなきゃ、そのうち涙が枯れてしま
うぞ?」

「それなら、今度からシャルル君の胸でも借りようか?」

「ああ、歓迎だ。君みたいな美人が顔を埋めてくれるなら貸さない
わけにはいかないだろ?」

「な……!??うつ……む……」

泣いた姿を見られた仕返しに、慌てる姿でも見返してやる積りだっ
た所にこの切り返しは予想外だったようで、紅くなった顔を隠すよ

うに背を向けた

「知りたいことも知れたし、もう行くわ」

「ん？そうか……頑張れよ、恐らく最後の戦いだ」

「そんなん言われんでも解つとる、こっちの戦力は十分や、シャルル君が助けたギンガも決戦前には完治や言つてたし負けへんよ……」

部屋を出て行くはやて。

静かになった部屋でシャルルは自分の状態について考えていた。

（身体は……ダメか、魔力は問題なしで鎖はまだ活動中つと。ネイキッドは……）

艦内の何処かにある自分のデバイスに念話を送る。

（マスターですか……）

「（ああ、そっちは問題ないか？）」

（むしろ好調です。何でも言ってみるもんですね）

「（そうか……今何処に置かれている）」

ネイキッドから細かい艦内データを貰い、行動を開始する

（誘導します。全てのロックは解除しておきます）

「（そんなことまでやって大丈夫か？）」

幾ら高性能といっても、此処は戦艦の中。

電子戦にも対応したその中で気付かれることなく成すのは難しい

（今は人手不足が幸いしています。それでも十分が限界ですので、マスターがノロノロしてたら見付かります）

「（まったく、病み上がりの人間に言う言葉じゃないだろう）」

（戦場に乗り込もうとしてる人間を病み上がりとは言いません）

「（手厳しいね）」

誰にも見付かる事無く、デバイスが保管されている部屋に侵入し、ネイキッドを確保した

「待たせたな、最後だと思ってたんだがしぶとく生きてるよ」

そのようで……お互い死神に嫌われているんでしょう

「はは、それじゃ行くか……つと、思ってたんだがな」

シャルルは膝を折りその場で蹲ってしまった。
その顔は青く、まともな人間の顔ではない

「たくつ……体が言うことをきかないよ」

それも織り込み済みです。このままシェリー様の所に転送を開始します

「何、シェリーさんの所だとか？だが大丈夫なのか？」

連絡は既に入れています、転送

「いらつしゃいませ死にぞこない。これからチョコツと身体を弄繰り回すぞ?」

「毎回言い方が物騒ですね。だが今はお願いしましょう」

暗い一室、そこにはあらゆる薬が置かれていた。

初老のお婆さんが物騒なことを口にしながら、器具を弄っていた

「まったく、アレほど必要以上の服用は死を早めると言ったのに、少し前に渡した分を全部飲みやがってからに……延命剤で死を早めて如何するね、あんたは既に予想以上生きてるが、障害が消えてるわけじゃないんだ。あたしが出来るのは、体の異常を一時的に感じさせなくする所までさ、しかも精々数時間が限界さね。生命操作技術は専門外だからこんなことしか出来ないのが悔しいのだが……」

「良いですよ気にしないで下さい、それだけ有ればなんとか出来る
と思いますから。最後までお世話になりました……」

「何言ってるさ、お前さんが居なきゃ、あたしやあの時死んじまっ
てたんだからね。こんな老骨でも出来ることはやらせてもらっさ。
ほれ、麻酔を打つよ。起きたら恐らく外はドンパチしてるだろうね」

この人物シェリーは、シャルルがネイキッドを受け取った研究所か
らの知り合いだ。

以前は何度も生命の冒涇と言える行為を行ってきたが、その当時の
この人は自分の過ちに気付き、それを正そうとしたが叶わず、牢に
軟禁されていた。

そこから救い、それ以後主治医のように面倒を見てもらっている。
ちなみにシャルルの薬はこの人謹製である

「はい、ではよろしくおねがいします」

シャルルは静かに眼を閉じた。

「シャルル君が居らんでどういう事や!？」

「食事をお持ちし様としたのですが、宛がわれた部屋には居らず、彼のデバイスも忽然と姿を消していました。状況的に考えて脱走しか考えられません」

作戦まで後僅かという時に、シャルルが忽然と姿を消した。

報告を受けたはやては、体が堅くなったように感じた。

それは十年前に感じた物と似ていた、リインフォースが自ら死を選んだ時のように

（何やねん！親子揃ってそないな選択しか出来へんのか！？見つけたら絶対止めたる！）

今回はリインフォースの時と違い、どうにか出来る糸口を見つけている。

まだ死ぬと決まったわけではないのだ。

「なのはちゃん達にも伝えないかん……まったく世話の焼ける人や」

フェイトちゃんは元よりなのはちゃんにとっても大切な人なのだから、伝えるべきだろう。

これから起きる決戦でそこまで手を伸ばせるかと言え、無理だろうが気に止めて貰っておく事に越した事はない

「絶対死なせへんよ……」

Episode - 29 (後書き)

新キャラ、出す積もりなかったんだけど、書いてたら勝手に出てきた……

かなり前の話で書いた、なのはのリハビリを手伝ったおばあさんがこの人です。

この後そのまま出番があるか怪しいな……

Episode - 30 (前書き)

更新しました。

結構難産した……

Episode - 30

「ほう、この子のお気に入りが三つに分かれたみたいだね」

はい、予想より少し早いですが、シミュレート通りの動きです。
ゆりかごも矢張りと言うべきか、軌道上を目指しています

寝台に眠るシャルル、その横で現在の戦況を確認する

こちら側の計画はいつでも行えます。しかし今計画を行ったら、
今以上の混乱が齎されると思われませんが……

「それでも今この時しかないから、やると決めたんだろ？注目が一
点に集まるこの瞬間を……」

それは予言が成された時から決めていた事。

管理局の闇、それを一部メディアで公表しても揉み消してしまうだ
けの力が評議会にはあった。

だから言い逃れが出来ぬように、誰もが注目する時に白日の下に晒
す事を決めたのだ。

だが、それは彼にとって苦渋の決断だった。

誰もが注目する、とは詰まる所それだけ大きな事件で無ければなら
ない、大きな事件になればそれだけ多くの人間が苦しむ事になるの
だ。

小を切り捨て大を救う。

王として遣ってきた口惜しい決断を、新しく生を受けても尚せねばならなかった

はい、ですから私は全力でこの方をフォローしなければなりません。ですので、私の設定を戦闘向きに変えてください。魔法行使の負担を少しでも減らせるように

「はいよ！任しときな、そっちは本業さね！」

それでは計画を開始させていただきます、マスター

眠るシャルルに一声掛け、計画開始の合図を送った

『やあ！管理局と市民の諸君！楽しんでくれているかい？』

なのはたちが出撃してすぐ、スカリエッツィから全回線、メディアに通信が入った

『これはまだ序章に過ぎない！これからもっと楽しいショーを見せてあげよう！』

「スカリエッツィ！」

映し出されたその楽しい笑顔は人の怒りを増長するには十分だ。

『そのショーとやら、続きは私が引き受けようか？』

更にその場を混乱させる人間が現れた

『おや、これはこれは、君か帝王。まだ、動けるとは感心するよ！

……それでショーの続きとは何を見せてくれるのかね？』

「そんな！シャルル君！？」

薄暗い為何処にいるか解らないが、出てきたのは間違いなく、シャルルであった。

その顔には仮面は無く、もはや隠す必要も無いと言う事だろうか

『簡単な事だ。……管理局の膿を潰す、そのために今此処に出てきたんだ』

その台詞に顔を青くする者、訳が解らず首を傾げる者とに二つに分かれることに成った。

『はははっ！今、このタイミングでかい！？それは面白い、ぜひやつて貰おうじゃないか！』

膿とはつまり不正の事である。

それを今の局面で公表することは、指揮を維持する面で完璧にマイナスだ、もしかしたらそのまま総崩れと言う事態にすら成り得るのだ。

今この時しかないからと言って、それは余りにも無謀で愚かな行為ではないだろうか

『そうさせて貰おう……先ずはこれを見てもらおうか』

幾つものデータが映し出された。

それからは大変だ、彼方此方から声が上がる。俺じゃない、止めさせろ、消せなど様々だが、異常性を知らせるには十分だ。

『今見せたのは横流しや横領といった小物だ。これからが本番だ……』

今度は違うデータが表示された。

そこに書かれているのは今は壊滅して存在しない犯罪組織の名前と管理局高官の名前、裏取引が行われていた証拠だ。

それからは酷いものだ、管理局が関与した大小様々な事件がずらりと並んだ

「嘘や……」

並べられたデータの中に闇の書の事件が書かれていた

『これは俺が知る中でも最悪の部類だな……弄るだけ弄って後はポイ、その直後に起こった夜天の書の暴走により闇の書と呼ばれる原因を作った』

公開が始まってから前線が明らかに圧され始めた。

ゆりかごは浮上を続け、ガジェットは吐き出され続ける。

『最後だな、この事件の首謀者ジェイル・スカリエッティと管理局の人物が通信していた記録がある。そしてこれらを裏で指示していた方々を紹介しよう』

シャルルが映るモニターが急に明るく照らされる。
そして出てきたのは、ポッドに入った謎の脳髓

『最高評議会の面々だ、大分前からこの姿らしいが醜いものだな、
権力に張り付くものと言うものは……』

『私は彼らを裁けない、故にこの場を持って公にし、管理局の信頼
に足る人物に裁きを任せる』

「何だ……此れは……俺が信じていた管理局はこんなものだったの
か！？こんな……こんな非道なことを平気でやっていたのか！？俺
は何を信じればいいんだ……」

「おい！何してる！突っ立ってないで迎撃しろ！そのままだとやら
れるぞ！クソッ！」

こうした状況が今どの場所でも起きていた。

現場指揮をしていた者が犯罪行為をしており、その指揮に従わなくなったものがあったり、管理局と言う組織に信奉していた者が呆然となり動きを止めたりとボロボロである。

『さて、このような状況を招いたが、貴様に一つだけ言っておこう……』

『おや？まだ何かあるのかい？楽しいショーを見せてもらったのに残念だが、私にもまだやる事が有るのだがね、手短に頼むよ』

まだ会話は続く。

「おい！聞いているのか！？危険だやる気が無いのなら下がれ！」

「知った事か……もう何をしたって何も変わらないんだから……」

ある局員の前にガジェットが一機迫っていった。

避ける素振りを見せない、あの勢いで突っ込むガジェットに攻撃されれば悪くすれば死んでしまう

「俺は何のために管理局に勤めてきたんだ……」

「誰かを守るためじゃ無いのか？」

「え……？」

目の前に迫っていたガジェットは何時の間にか消えてなくなり、代わりのように一人の人間が立っていた

「そこまで思い詰めるのなら、戦え。戦って身近な人間だけでも救って見せろ！」

「アンタは……」

「俺はアイツの——」

『俺はお前の——』

「『敵対者だっ！』」

Episode - 30 (後書き)

如何でしたか？

なんか滅茶苦茶に成り始めてるけど気にせず突貫！でかいたらこんな事に……

感想よろしくお願いします

Episode - 31 (前書き)

更新しました！

クライマックスだから手が進む

まあそのクライマックスはあと五話以上は続くと思うけど

Episode - 31

『敵対者、ふふ、敵対者か！面白い、ああ！面白いよ帝王！ならば私の欲望を満たしてくれ！君が来ると思っ用意したこの玩具も漸く役に立てると言うものだ！』

それだけ言っモニターから姿を消すスカリエッティ、そのすぐ後にゆりかご内部から夥しい量のガジェットが吐き出されてくる。局員は沈痛な面持ちでその様子を見つめていた。そしてその場に残り続ける帝王のモニター

『諸君……。私は管理局の上層部を告発した、しかし！私は管理局自体に絶望をしていない』

その場に在る人間すべてに語りかけるように、体全体を使っ訴えかける。

その様はまるで演説のようだ

『君達は忘れてはいけない！その身を挺して人を救った勇氣有る局員が居た事を！』

その場に映像が流れる。
十人分は流れただろうか、それは殉職した局員達のその当時の映像だった。

『君達は忘れてはいけない！この瞬間も戦い続けるものがいる事を！』

そしてまた映像が切り替わる。

今度は今戦っている局員をライブで中継している

『我らは守り通さなければならない！家族を！友を！愛する人を！』

大量のガジェットに向って黒い一団が覆いかぶさった

『我と共に力を尽くせ！勇者諸君！今こそ決戦の時だ！』

ガジェットの破壊音に重なって大きな歓声が沸く。

「くくく、はははは！やってくれる。流石は嘗て王として人を治め

ていただけは有る。此れがカリスマと言うものなのかな？」

「ドクター宜しいのですか？あのままならば、瓦解していただいでしょうに……」

「ああ、いいんだよ。それに彼なら、私のこの自分でも抑えられない欲望を満たしてくれそうだからね、お門違いかもしれないが、少し……期待しているのさ」

今までに無い少し柔らかい笑みがそこにあつた

「ティア！ティア！見てお兄さんが映ってるよ！？」

「う、うっさいわね！解ってるわよ！」

隊長達と分かれて行動しているフォワードとギンガの五名は、目的に向っている途中、空中に映像が映し出された。そこに出てきたのはティアナの今は亡き兄の姿もあった。

「立派な人だったんだね……」

「はい、自慢の兄です！」

ティアナは手に持つクロスミラージュを握り直し、力強く応えた。

「んんんっもう！惚れてまうやろお！何やねんまったく、急に出てきて引つ掻き回したと思ったら、もう現場を掌握してもうた…… かつこ良過ぎや」

ハヤテは現場指揮を取りながら、そんな感想を述べていた。しかし、矢張りと言うべきか、現場の指揮は混乱したままだ。彼の呼びかけによって現場にいた者たちも徐々に盛り返しているものの、足並みが揃わなければ結局は敗れてしまうだろう。

今は、彼の鎖が一人一人につく形でフォローしているようだが、それにも限界がある。

そんな事をしなくても指揮を取ればと思うのだが、心を惹かれる人物だったとしても、やはり犯罪者に快く従うものは居ないだろう

「指揮する積もり無いのはわかつとったけど……しょうがない、此処からは私らの仕事や」

ハヤテは現場の全局員に向けて回線を開いた。

「こちら、遺失物管理部・機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐です。ただいま指揮系統混乱のため現場判断で指揮権を一時預かりたいと思います、了承いただける方はお願いします！」

それは彼女の懇願だった。

この現場にも、闇の書の被害者は何人も居る。評議会の起こした事件が原因だったとしても、そう簡単に割り切れるものではない。

はやての頃の事件の被害者か、はたまたそれ以前の被害者かは解らない、だがそれが解っているだけに、今この要請を受ける人間が多いとは思えない。

「お願いします！私は皆を守りたい、私の大切な家族、友達、皆を助ける力を私に貸してください！」

その後も何度か呼びかけたが、暫らくしても、返信は無かった。矢張りと言う気持ちと、役に立てなかった悔しさではやてが唇をかみ締めた時、

「——こちら、第五班。遅れて申し訳ありません！指揮官を捕縛していたため、返答できませんでしたが、そちらに指揮を委任します！自分達も八神二佐と同じ気持ちです！」

若い男の声、どうやら先程有った事件の容疑者が隊の責任者だったようで、数人の有志で捕らえ現場の人間を纏めていたらしい

「こちら、第十二班責任者ハウゼン一佐だ、同じく指揮を頼む。お嬢ちゃんには期待させてもらうよ」

次に入ったのは、少し歳を重ねた男性、自分より階級が上のため、貴方が指揮をされたらどうかと尋ねたら「私に久しぶりの戦場を楽しませてくれ！」と逆をお願いをされてしまった。

「こちら第二班、指揮を——」

「第十班、同じく——」

「こちらもお願ひします——」

そこからは、まるで待つてましたばかりに、たて続けに指揮権を任

せるといふ連絡が入ってきた。

その中には、闇の書の被害者として見覚えの有る人物も居た。そのとき、私が可笑しな顔をしていたのか、その人が声をかけてきた

『君は悪くない、胸を張れ！大切なものを守るのだろうか？』

その台詞を聞いた時、不意に熱い物が込み上げて来た。それを必死に堪えながら、改めて戦場に目を向ける

「……ありがとう、御座います。……此処から、私達の反撃です。しかし、その前に不安分子の捕縛を最優先とし、その後一気に攻勢に転じます！」

『『『『『了解！』『』『』『』』』』』』

「私が道を作った……だから無茶だけはしないで……」

一層激しい爆発を発する場所に目を向ける。

恐らくあそこにシャルルは居るだろうと考えた、今すぐ行って止めたいが、この状況ではそれも叶わない。

それならばと、はやては負担を極力減らせるように現場を動かす。

「少しくらい私欲が入ってもええよね、あの人も大切な人で守りた

い人なんやから……」

Episode - 31 (後書き)

如何だったでしょうか？

少し可笑しいと自分で思ったんですが、此れしか思いつかなかった

……

無理やりでも何でもご都合主義という事で一つ。

後まだまだ先の事ですが、こちらの作品が書き終わったら何を書こうか迷っております、のでアンケート

1、ゴチャゴチャ言っな！とりあえず俺の娘と嫁を早く書け！ヴィ
ウィッド編

2、帝王の知られざる過去を読みたい！帝王過去編

3、新しい設定で無印から再スタートしろ！テンプレ転生編

此れの中から選んでいただいて、先に十票をとったところを書こう
と思います。

改めて言いますが相当先になると思います。

では、感想待ってます！

Episode - 32 (前書き)

更新しました！

チンタラダラダラ書いてます。

楽しんでくれば幸いです

Episode - 32

「これは……」

シャルルは戦場の空気が変わった事を、その経験からいち早く気付いた

「指揮が回復したのか……？よし、これなら行けるか」

手を前にかざし、意識を集中させる。

「ネイキッド！風穴を開けて突っ込むぞ！」

了解しましたマスター、カートリッジロード！

ネイキッドのコアが淡く輝き、シャルルの手に魔力が集まる。

ゆりかごとの距離は離れており、前にも多数のガジェットがいる

「貫け狂嵐の風よ！《疾風穿孔》！」

ベルカ式の魔方陣から放たれる砲撃、その漆黒の砲撃は、進行を妨

げるガジェットを容易く飲み込み、ゆりかごに着弾、小さな穴を開けた。

「外部装甲が厚いな。今のでアレぐらいしか空かないのか」

それでも人一人位ならば余裕ですね、行きましょう

「ああ……ヴィヴィオ待ってるよ」

「くっ!？」

「ティア! うおおりゃあ!」

交戦中のティアナ、スバル、ギンガの三人、エリオとキャロは分断され召喚師の少女の元に向った

「気を付けて二人とも! この人たち前より強くなってる!」

確かにと、ティアナは静かに頷いた。

以前遭遇した時より、砲撃手の精密性やアタッカーのスピードなど格段に良くなっている。

更に、今まで居なかった戦闘機人が加わり同数ながらかなり苦戦を強いられていた。

「いや〜いい感じっすねえ、何と言つか体が軽くなった感じがするっす」

「けっ、アイツのお蔭だと思つと気分が悪いけどな」

「しかし、帝王との戦闘データは、確実に私達の糧になっています」

彼女達はそれぞれ軽口を叩きながら、武器を構える。

「まっ、こいつ等をやれるんならそれも良いけど、なっ!」

「く!?! マッハキャリバー!」

一気に距離を詰めて攻撃してきたものに合わせて、プロテクションを張る。

その拳による直線的な攻撃をスバルが受け、その横合からギンガが迫る、がそれをもう一人の戦闘機人の二刀を持って防がれる。ティアナは援護射撃を撃ちたいが、こちらは激しい射撃合戦になっていた。

「これで！」

「残念！はずれっす！」

射撃と射撃の打ち消し合い、それぞれがそれぞれの相手をして一对一の状況になっている。

ティアナとしてはこの状況は好ましくなかった。

自分のポテンシャルはこの場に居る中で一番低い、あの二人は辛うじて着いて行っているが、それも急激なパワーアップを遂げている彼女達に一步届かない様子。

自分達が勝てる可能性があるとしたら、個々の能力が上がった事でよりはつきりと見えてきた連携の甘さに有る、まさに不幸中の幸いだ。

それを為すには三対三での戦いに持ち込まなければならぬ。

「ほんっと！やり辛いわね！」

ティアナの頭が回りだした……

「……………」

フェイトは一人でスカリエッティのアジトで二人の戦闘機人と対峙していた。

共に来ていた教会騎士のシスターシャツハは分断され、そちらの方でも戦闘機人と交戦中のようだ。

「フェイトお嬢様、此方にいらしたのは帰還ですか？それとも、逆にですか？」

「どっちも違う……犯罪者の逮捕、それだけだ」

「やはり、その選択をされましたか……戦っしかなさそうですね」

そして戦闘に移行する

「ライドインパルス！」

戦闘機人の一人の太もと踝の部分に備えられた装甲から虫状の羽が伸び、高速でフェイトに接近する

「な！？以前より早い！」

「当たり前です、我らは貴女だけではなくあらゆるデータを蓄積していき、共有しているのです。以前と同じだと思われるのは危険です」

「！？くっ！」

背後からブーメラン型の武器が迫る。此方も投擲時の軌道制御が格段に良くなり、服に掠める。

フェイトは二対一と言う過酷な状況ながら、諦めず、通用する戦い方を模索していく、スカリエッティからシャルルのデータを引き出すこともせねば成らないのだから……

「……ブラスターシステム、リミット1！リリース！」

砲撃による罅迫り合い、押され始めたなのは、ブラスターシステムを起動し、一気に巻き返す。

瞬間的に砲撃の威力が上がり、そのまま打ち抜いた。

「はあはあはあ……」

ブラスターシステム、それは自身とデバイスに過剰な負担を強いるものだ。

単身突破の現状では、早々に使う事に不安を覚えるが、今は一刻も早く、ヴィヴィオの所を目指す。

先程の砲撃手を、捕縛し、先に進む。

「？気のせいかな……？」

僅かに腕輪が灯った気がしたが、今はその様子は無く、何時も通りだ

「とにかく先を目指そう！」

なのはは、気にする事無く奥に進む。
そして玉座の間が見えてきた。

「ヴィヴィオ！」

その扉を壊し、中に入ると玉座の間に座らされているヴィヴィオと、その横に立つ眼鏡をかけた戦闘機人がいた。

なのはは、戦闘の停止を呼びかけるが、聞く耳を持たず、それどころか挑発紛いの台詞ばかりを口にする。その姿は幻影だったが、モニターの向こうで何かを操作しながら話し続ける。

その戦闘機人が何かを操作し始めたと思ったら、急にヴィヴィオが苦しみだした。

「ママア！あああああああー！！」

魔力の余波で、近づくに近づけず、ヴィヴィオが泣き叫んでいるのをただ見ていることしかできなかった。

そして、目の前でヴィヴィオが徐々にその姿を大人の物に変えていく。

姿が変わったヴィヴィオなのはは呼びかけるが、その呼びかけも否定し、ただ自分の母を捜していた。

ヴィヴィオの精神は何らかの方法によって掻き乱されているのかも知れない

「貴女なんかママじゃない！ヴィヴィオのママを……返してえ！」

感情の爆発に呼応するかのように魔力が衝撃破になって迫る

「レイジングハート！ブラスター2！」

ヴィヴィオを救うため、なのはは更に自身を傷つける。

しかし、ブラスターを発動させたところで、腕輪が大きく光を発した

マスター、ブラスターモードが解除されました！

「え！？くっ！きゃあ！」

ブラスターを使って漸く拮抗するだろう力が動かず、それどころか完全に機能を止めてしまった。

その状態では、ヴィヴィオの魔力に耐え切れず、吹き飛ばされてしまふ。

なのはは背中に受けるだろう衝撃に備え身体を堅くする。

「やれやれ、やはり無理な力を使ったな？」

何時まで経っても背中に痛みは無く、暖かい感触と声がそこにあつた。

「シャルル君！？ダメだよ！こんな所に居ちゃ！？」

「良いから……君はそこで見てなさい」

「え、でも……」

「いけない事をする悪い子を叱るのは……」

シャルルはゆつくりと、ヴィヴィオの前に出て仁王立ちをする。

「父親の役目だよ」

Episode - 32 (後書き)

如何だったでしょうか？

腕輪の効果は点滅が警告、発光が体の負担があつたら強制リセットすると言つ物です。

突然過ぎないようにした積りですが、可笑しければ感想まで。

それとまだアンケートは実施しております！どしどし宜しく願います

Episode - 33 (前書き)

勢いつて怖いのださあゝ

まさかこんな話が出来てしまうとは……

以前感想でいただいた案を工夫し、出してみた。むちゃくちゃだからこれで付いてくれていたファンがどうかに行ってしまわないか心配です

Episode - 33

「そんな、ヴィヴィオは私が……！」

なのはが、ヴィヴィオと対峙するシャルルに呼びかけるために、立ち上がろうとするが体が上手く動いてくれなかった。

「あ、あれ？体が……」

「余り無理をしない方が良い暫らくは体の自由が利かないはずだから。君の腕に着けられているのは所謂、強制停止装置だ。所持者のあらゆる行動、魔力的効果を抑止するために作られた枷、それが本来のそいつの能力だ」

「でも、今までそんなこと一回も……」

なのはは此れまで自身が着けていた数年間を振り返ってみたが、それらしい事は起きた事が無い。

「……君と最初に出会ったのは、俺が始めてこの身体で外に出たときだ。研究所を抜け出したばかりでアクセサリーなんて着ける余裕があるはず無い。その腕輪は俺の力を抑えるための物で、なのはを庇った時に壊してしまっただよ……」

柔らかい声とは裏腹にその場の緊張感が高まっていく。

「さて……そろそろ父親らしく叱り付けてやろうか」

戦闘体勢が整っていたヴィヴィオは構わずシャルルに突っ込んでいった。

「聖王の鎧……Sランクの魔法すら防ぎ切るだけの強度を誇る。最強クラスの防御能力」

ヴィヴィオは拳の連打を繰り返す、しかしシャルルはその場から動かず、防ぐ事すらしない。

それを不審に思ったのか、ヴィヴィオは距離を取る

「強固な防御力は転じて、驚異的な攻撃力になる……」

聖王の鎧と圧倒的な魔力による力押しの戦法、それがヴィヴィオの戦法であり、それが聖王の鎧の持つ者の一番正しい戦い方だ。しかし、シャルルが相手だからこそ失策だった。

「だが……俺は知ってるんだよ……」

シャルルは口元の血を拭い散らし、手を前に出し構えを取った。
構えを取った事でヴィヴィオは危機を感じてか、更に突っ込んでいく

「聖王の鎧の弱点を……」

なのはには理解できなかった。

ヴィヴィオが拳を繰り出し、攻撃していたはずなのに、気付けばヴィヴィオが膝を折り、苦しんでいた。

「そもそも、何故鎧などと呼ばれているのか……身体に纏うから？
身体を守るから？確かにそれは正しい。しかし、どれも的を外れている」

ゆっくりとした歩でヴィヴィオに近づきながら話し続ける。

「聖王の鎧とは、その構造が現在する鎧と同じなんだ。故に、見えずとも、そこに継ぎ目は存在し、そこを突く事で最小の力で降す事が出来る。尤もこれは、武術の心得の無いヴィヴィオだったから出来た事で、歴代の聖王はこの弱点を補うために鍛錬を欠かさなかった」

なのはは元より、クアットロにしても、此れほどあっさりと決着が

つくとは思っていなかった。
なんせ、本人ではないとは言え、相手は嘗て最強とまで言われた聖王なのだから。

「さあ、眼を覚ましなさい。ママが待って……ッ!？」

そこまで話し掛けた所で、突如、ヴィヴィオを含めた部屋全体が虹色に輝きだした。

『嘘ッ!こんな資料にもマニュアルにも無かったのにッ!?!』

モニターの向こうで慌てているクアットロ。この現象は彼等のものでもないようだ。

「ま、まさか……そんな事が……」

部屋に充満していた虹色の光がヴィヴィオに向って流れ出し、成長した姿のヴィヴィオは、またしてもその姿を変え始めた。その姿に顔を険しくしていくシャルル。

ヴィヴィオの憧れの人、なのはのバリアジャケットを模した防護服は、徐々に黒い騎士甲冑に変わり、髪はサイドポニーから頭の上で纏め上げられていく。

やがて光が収まり、騎士甲冑を来た少女が舞い降りた。

「…………君なのか…………オリヴィエ…………」

シャルルは忘れられるはずの無いその人物の名を口にした。

「はい、お兄様…………オリヴィエ・ゼーゲブレヒト、このような形でまた見えた事大変嬉しく思います」

「我としてはこのような形は望んでおらん」

「またその様な、もう昔の事は過ぎてしまったのですよ？それに…………私とクラウスはあの事件の真相を知っています。何時までもその様な物言い、悲しいです…………」

シャルルは、オリヴィエ登場だけでも驚きなのに、彼女の口から出た言葉にも驚いた。

「知ってしまったのか…………いや、それは良い、喋り方も戻す。だが君がこうしてこの場にいる事の方が疑問だ」

「そうですね、私としても、まさかあの様な、悪戯がこうして効果を発揮するとは思いませんでした」

「悪戯？」

「はい、私は死ぬ直前、この揺りかごに、ある術式を組み込みました。それは、私の血を持つ者とお兄様が出会ったとき、私の意識をその身体に数十分、間借りさせて貰うと言う物です」

「おい、それは可笑いだろ。俺はそのとき既に死んでいたんだ。しかも本人判断が出来ない」

「解っています、だから悪戯と申したでしょう？それに、お兄様はこの部屋に血を零されたでしょう？それが発動の切欠になってしまったのですから私だけの責任ではありません」

口元に手をやり、上品に笑いながら、過去を語っていた。

「そ、それより、ヴィヴィオは！？ヴィヴィオは大丈夫なんですか！？」

心配でたまらなかったのは、痺れを切らして、声を掛けていた。

「あなたが、高町なのはさん、ですね」

「え？如何して私の名前を……？」

「この子の身体を使わせてもらっていますから、記憶は共有しています。心配には及びません。この子は全くの無傷、私がこの子から抜ければ、正気に戻ります」

それを聞いたなのはは、ホッと胸をなでおろし、壁に寄りかかっていた。

「しかし」

「え？」

「私に残された数十分、この時間を使い私の心残りを一つさせて頂きます……お兄様」

手に嵌めていたであろう手袋をシャルルに投げつけた

「私は、あの日より強くなった！お兄様を助けられなかった……解って差し上げられなかった私ではありません。決闘です！」

虹色の極光がオリヴィエから放たれた……

Episode - 33 (後書き)

シャルル「作者、何故こんなクライマックスで俺をこの場に連れてきた……納得できる理由が無ければ吊るすぞ？」

ジャラッ

作者「い、いや、なんと言いますか、この後の作品を書くための布石と言いますか……」

シャルル「……」

作者「アンケートはまだ続いているんですが、3番以外だと完全にヒロイン格が空気になるので……ヴィヴィッド編ならはやてが、帝王過去編なら皆空気と言う事態に成るので、あとがきに出そうと思いついて、この場で慣らしておこうかと……」

シャルル「……仕方ない、のか？まあいいか、それより今回の話だが」

作者「はい！今回は聖王の鎧の独自設定と、遂に判明した帝王と聖王との関係！がメインになるのかな？」

シャルル「そうだが、この展開はいきなり過ぎないか？俺の台詞で少しだけ出ただけだし」

作者「その辺の掘り下げは帝王過去編で、と言っわけですよ」

シャルル「なるほど、アンケートが片寄ったからこんな事し始めた

んだと思ってたよ、悪いな」

「そ、そそそそ、そんな事あるはず無いだろ！他の作者さんの後書きが面白そうだと言つのも理由だが、純粹にヒロイン達を思ってたな！」

シャルル「解った解った、それではこのへんでお別れと——」

作者「あ、でもこの後書きだけになるかも……ネタが思いつかなかつたり、キャラ動かすのがだるいからって理由で次から無いかも……な、なに？ちよ！？痛！痛いって！？し、しまる、亀甲縛りはヤメ……アア——！」

Episode - 34 (前書き)

更新です！

今回かなり読み辛いかも、でもこれ以上の書き方を知らないもので

……

戦闘描写は難い^{むず}、何時もは戦闘描写にならないように圧倒的な主人公の力を表現して書いてきた積りなので、振り返るとまともに書いた戦闘描写ってほとんど無いんだよね……てかまともになってないかも、短いし。

アンケートまだやってます！よろしく願いします！

Episode - 34

「ハアアアアー!!」

「オオオオオオー!!」

それはまるで舞闘のようで、なのはは見ていることしかできなかった。

拳が放たれれば逸らしまた繰り出し移動し、目まぐるしく入れ替わり攻防が続いていく。

「凄い……」

そんな光景を見ながら、なのはは他のメンバーの事を考えていた……

「しつこいんだよっ」

ノーヴェのストレートを腕をクロスして防ぐスバル。
スバルはもう息が上がっている、そう長い事戦っていられない。

「ティアは……」

横目で自分以外の人間が何処で戦っているかを確認する。
ティアナはそう離れていないが、ギンガの姿は見えない。

「ウイングロードッ！」

曲がりくねった道を形成しその場から遠退こうとする。

「ハッ！また逃げの一手かよ！」

それを追うノーヴェ。スピードは互角、いや若干あちらの方が速い。
だが、スバルはそこで加速するのではなく、反転し拳を構えた

「一撃……必倒オッ！」

「だから、それも当たらなければ何とも……なっ！？」

「デイベインツ！」

こちらに向って突撃していたのは良い、それだけならばそのスピードに合わせれば避けられた。

しかし目前で突然ありえない程スピードが上がり、距離を一気に詰められた。

此処に信頼の差が現れた。

（避けられ、シールドを―――）

「バスタアーツ！」

辛うじてシールドを張ったが、急場凌ぎのそれでは高い圧縮密度のスフィアを防ぎきれず、シールドを粉碎、スフィアが接触、拳と共にノーヴェの身体を衝撃が貫いた。

「か、っは……」

「次ッ！」

スバルは勝利の余韻に浸る事無く拘束し、背を擦りながらその場を後にした。

ある廃ビルの中で対峙しているギンガとディード、ギンガの身体にはいたる所に切り傷が出来ていた。

「ハアハアハア……」

「あなたでは私に勝てない。長時間のスピードなら別ですが、瞬間加速の方は私が上。もう諦めてくれませんか？」

「私は、まだ諦めるわけには行かない！スバルもティアナまだ戦ってる、私が先に諦められない！」

ギンガは傷つく身体に鞭打ち立ち上がる。

「ウインググロッドッ！」

ギンガはウイングロードを展開、外に向って走り出した。
この廃ビルの中に逃げ込む前に二人の位置を確認してある、時間は
然程経っていないから居場所はあまり変わっていないはず。

「合流が出来れば状況を打開できるかもしれない……」

一対一の状態に持ち込まれた切欠は、ティアナの念話が盗聴された
事が原因だ。
それと同時に戦いに勝つ為の条件でもある。

「くっ!？」

「ほらほら、手が止まってるっすよ?」

ティアナは放たれる砲撃を一つずつ落していくが、やはり出力が違

うとそれを行うのも限界が出てくる。

「隠れてばっかじゃ勝てないっすよ〜？」

障害物を利用し時間を何とか稼ぐことが精一杯な状況だ。

作戦がバレたのが痛い、何故か盗聴されると言う最悪の事態に陥り、唯一の勝つ望みが遠のいた事で、精神的にもかなり消耗している。だがそれで簡単に認めるティアナではない。

「ちょ！？あの姉妹は……！」

次の作戦を考えている時に、まるで示し合わせたように姉妹揃って敵を引き連れ走ってきた。

「仕方ない……！一か八か！」

ティアナは覚悟を決め、砲撃体勢に入った。

左右で違う属性の砲撃だ、スバルの方にスピードだけの不発弾をギンガの方には単純な砲撃を。

この様に同時に行う事はかなりの技術を必要とするが、ティアナは意地でクリアし放った。

「後ろがから空きつすよっ！」

ウェンディがその砲撃の隙を付き、攻撃をしてきた。

ティアナの覚悟とは両者にサポートを送る事で自分がどうなろうと状況を少しでも有利に運ぶ事にあつた。

その考え通り、ティアナにはその砲撃を防ぐだけの時間的猶予が無かつた。

「…………え？」

ティアナが覚悟していた痛みが寸での所で破裂した。

その原因は範囲外からの狙撃。

辺りを見回しても見えないことから並みの術者では先ず届かない様なかなりの長距離からの物だ。

「な、何すかこれ！？」

「今っ！」

ウェンディが怯んだ隙に射撃魔法を放つ。

「くっ！？でもこれ位じゃやられないっす！」

「ええええりやあー！」

駆けつけていたギンガがその射撃の煙に紛れ接近、懷に潜り込んでいた。

「な！？がっ……！？」

戦闘機人だろうと元は人間。

顎に一撃を入れる事で脳を揺らし、そのままウェンディを昏倒させ、背後から接近していたデイドに向き直る。

「やってくれる！しかし、お前さえやれば……！」

先程のティアナの砲撃でギンガに追いつけなかったデイドはこのチームの要であるティアナに狙いを変え、その本来の戦闘スタイルである背後からの強襲を緩行した。

「……く！？」

しかしその攻撃もスバルによって止められ、弾かれた。

「ギンねえ！」

「解ってる！」

そのまま二人で接近し連携によってガードを崩した。

「リボルバアーーッ！！」

「ダブルッ！」

「「キャノンッ！！」」

正面から二人の渾身の一撃を受けたディードはその機能を停止させた。

「……………か、勝った……………」

「うん、私達勝ったよ……………」

体中傷だらけの彼女らはお互いの背に背を預け、腰を下ろしていた。

「でも、あんまりのんびりしてられないわ……」

「そうね、早くなのはサンたちの救援に行かなくちゃ」

「それじゃ行こう！ゆりかごへ！」

「へっ！やるじゃねえか、新人ども」

ヘリに乗り、スナイパーライフル型のデバイスを構えていたヴァイスはモニターに映るゆりかごを見て、拳を突き出した。

「おい、シャルル。俺も守って見せたぜ、大切な仲間って奴をな……」

Episode - 34 (後書き)

作者「……ハアハアハア……」

は「なのはちゃん、あれ如何にかしたってや……何時までも亀甲縛りじゃ、ここ進まへんやんか」

な「え！？い、嫌だよ、なんかちよつと顔が幸せそうで気持ちが悪いんだもん……」

は「ならフェイトちゃん」

フェ「私も嫌だよ！そういうはやてがやったら如何なの？」

は「知らんがな、あんな変態。まあええわ、このまま進めたらうか」

な「いいのかな……？」

フェ「しょ、しょうがないと思うよ。作者がアレじゃ……」

作者「ああ、な、なんか新しい世界が……」

は「ええと、今回の見せ場はスターズの二人とギンガの戦闘やね」

な「うん、皆成長したよね」

フェ「あ、でも見せ場と言えばもう一つあるよ」

は「そうやった、ヴァイス君の台詞！あれは作者がヴァイスが好き

過ぎるために無理矢理入れたって言ってたで？」

な「うん、聞いたよ、なんか『兄貴いー！』って言った」

作者「兄貴いー！中の人かけえー！」

は「あかん、鎖引きちぎってしまいよった……」

作者「ふふふっ！復活した俺に掛ければ、この場で兄貴を召喚し兄貴のためのハーレムを作る事すら……あ、あれ皆さん何やってます？」

な「ちよつとO H A N A S Iしようか」

作者「……え？う、嘘だ！俺の作品のなのはさんはそんなことしな
——」

な「作者の勝手な願望で消された！私の奥の手！プラスター3！」

は「私らもいくで！私にもつと出番を！」

フェ「え！？え、えつと、もつとシャルルと会話をさせて！」

作者「ま、待てお前ら！その構はトリプルブレイカー！A / Sの振るぼつこ技じゃないか！しかもお前ら成長して威力も——」

な、は、フェ『ブレイカーー！！』

作者「Mに目覚めそう………ぶじゅらあ！？」

Episode - 35 (前書き)

更新しました……

なんと言つか一日一話は死ねる。楽しいけど死ねる……

今回は男臭い話です。女性は一人居るだけ登場という今までに無い仕様になっております！

Episode - 35

「お前に問いたかった……俺は良い、お前の正義の為になら殉じる覚悟があつた」

そこは管理局中将レジアス・ゲイズの執務室。

そこでその部屋の住人レジアスとその嘗ての親友ゼスト・グランガイツが一对で向かい合い会話をしていた。

レジアスの娘であるオーリスは帝王の出現で混乱した現場を如何にか収めようと出て行ってしまった。

彼女も帝王の演説に感化された一人なのかもしれない。

「だが、俺の部下達は何のために死んでいった……！如何して、こんな事になってしまった」

ゼストの手に力が籠もる。

嘗ての部下達の無念、親友と分かり合えなかった悔しき、それらがゼストを今まで動かしてきた。

「俺たちの守りたかった世界は！俺たちが欲しかった力は……！俺とお前が夢見た正義は……いつの間に、こんな姿になってしまった……」

「俺は平和にしたかったただけなんだ……」

ポツリとレジアスが語りだした。

「だが、そのためには力が！発言力が必要だった……そのために
前が見ていない所でも汚い事もやっていた。必要悪、それはどんな
時代、場所にも有らねばならない。そうしなければ世界は回らない
からだ！だから必要以上はけして手を出さなかった……あの時まで
は」

「あの時だと？」

「評議会から直々に連絡が入った『君に重要なポストを用意したい、
そのために君にやって貰いたい事がある』とな。私は焦っていたん
だろうな……出世に一番早い道が魔道師である事。早くお前が望ん
でくれていたポジションに着かなければ、お前が何時か私を置いて
行ってしまっんじゃないか、そんな事すら考えた……」

「レジアス……」

「だが結果は如何だ。今こうして管理局はスカリエッティ一人に翻
弄され、お前とこうして向かい合っている。初めから、自分の信じ
た道を……お前と目指した道を進めばよかったのに」

「ああ、俺たちは何時も遅すぎる」

二人が会話をしている横で女性局員が、静かに近寄ってきた。扉を強引に破壊し押し入ってきたゼストを恐れていたのだろう。

『レジアス・ゲイズ！横に飛べ！』

その声に反射的に飛び退いたレジアスの横を女性局員が装備する爪型の武器が通り過ぎる。
流石に衰えたとは言え軍属。基礎能力は悪くなかったのだろう、ギリギリではあるが、回避に成功した。

「ちっ！」

「貴様、何の積りだ！」

レジアスは叫び、ゼストは自らの槍を構えた。

「そんな事——」

『そんな解り切ったこと、言わずとも理解しているだろう、レジアス・ゲイズ？』

またしてもレジアスを救った声が部屋に響く。
そして当然の様に女性局員に向って鎖が伸びる。

「また、あなたが邪魔をするのですね……」

「君こそ縛られる事が好きなのか？俺の目指す場所に何時も居るから勘違いしてしまいそうだぞ？」

苦々しい表情を浮かべる女性に冗談で返すシャルル。
鎖を振り払い、女性局員は変身を解いた。

「貴様、スカリエッティの……！」

そこに立っていたのはボディスーツを着た戦闘機人ドゥーエ。

「如何する、此処にはSオーバーが三人もいるぞ。大人しく投降した方が身のためだぞ？」

「三人？」

「ああ、先程道を塞いでいた、ちっこいのと一緒にシグナムが向ってきていたのを確認している」

「……そうですか、やはり逃げられないようですね、なら選択できるのはこれ位……」

ドゥーエは自らに自身の武器を向けた。

「自決か！？ちっ！」

シャルルが走る、しかし短距離であつたとしても、突き立てるだけのあちらの方が確実に速い。

「え……？」

ドゥーエに迫っていた刃は結果的に刺さった。

しかし、それはドゥーエでは無くレジアスの腕に刺さっていた。

「む、う……」

振り下ろしたその凶器を受け止めたレジアスは腕を押さえ痛みに耐えていた。

それを呆然と見ていたドゥーエはゼストとシャルルによって完全に

拘束された。

「な、ぜ……」

「気に食わんが、奴には借りが有る、ゼストを生かしてくれたというな。そんな奴の家族を此处で死なすわけにはいかん」

腕を押さえ苦悶の表情を浮かべていたレジアスはそう言い切った。ゼストもその姿を見て笑みを浮かべている。蟠りが完全に取れたわけではないだろうが、二人の間に何かしらの変化は起きたのだろう。

「そうだ、二人に言いたい事がある」

「む、そういえば貴様に助けられたのだったな。礼を言う」

「ああ、それよりさっきの話、遅すぎるといふ事は無い」

「なに？」

「あなた達みたいな方々がこのまま管理局を去ってしまうのは忍びない。それにこれからかなり人手不足に陥る、そうなるように仕向

けたんだがな」

シャルルによって公開されていた犯罪者名簿の中にレジアスの名前は無かった。

いや、意図的に抜いたといっても構わないだろう。

「俺は過去の事件を全て見た上であのデータを公開している。あれは上層部で必要悪として割り切って仕事をしている人物、私利私欲のために仕事をしている人物を選別のためでもあったんだ」

シャルルはその人物の過去まで遡り、本当に世界を守りたいという考えを持つ人間を選んでいた。

この様な人物は数人しか居らず、そのすべて訪ね意志を確認してきた。

そしてその人物達は今戦場で奮闘している。

「最後にあなたの意志を確認に来た。まだ……この世界を守る気が御あるか？」

その大それた計画に目を丸くしているレジアスとゼスト。二人は目を合わせ、頷いた。

「「勿論だ……！」」

Episode - 35 (後書き)

作者「書いてしまつて気付いた、レジアス驚きの白さ！」

シ「そうだな、原作ではフォロー無く、亡くなつてしまつたが此処ではこんなに白いとは……」

作者「まあ、基本死亡者ゼロを目指して書いてましたし」

シ「……何言つてやがる、初っ端に一人を俺にやらせたくせに」

作者「それは物語を円滑に進めるための尊い犠牲というか……」

シ「それは良い、それよりこの現場の原作との相違点だが死亡者が三人だつた物が一人も殺さずに終わってしまったぞ？」

作者「そうだね、でもドゥーエは楽しみにしていた姉妹との邂逅が叶う前にあのような状況になつてしまつて可愛そうだったから。もうなんと言つか……ご都合主義？」

シ「それも時と場合だな。やりすぎると嫌悪感しか与えないぞ」

作者「肝に銘じます。では今日はこの辺で！感想待ってます！」

Episode - 36 (前書き)

更新です！

しかしここ最近上げ続けだ、家から当分出れなくなっただからだろうな。

とりあえずもうすぐラスト、次回はシャルルvsオリヴィエの戦いの筈です

Episode - 36

ライオット・ザンバーを起動し、何とか互角の戦いに持ち込んでいたフェイトだったが、途中スカリエッティが新たに戦闘に参加。完全に翻弄され、スカリエッティによって拘束されてしまった。

そこで優位に立ったスカリエッティは自分を倒したところで無駄だと語る。

自身の因子をナンバーズ全員に組み込み、復活できる保険まで掛けていた。

「君と私は良く似ているんだよ。私は自分で作り出した生体兵器たち、君は自分で見つけ出した自分に反抗することの出来ない子供達、それを自分の思うように創り上げ、自分の目的のために使っている」

スカリエッティの言葉に驚愕するフェイト。

その後もスカリエッティの執拗なまでの精神攻撃は続く。

フェイトだけでなくフェイトの母プレシアの名前までだす念の入れようだ。

「間違いを犯す事に怯え、薄い絆に縋って振るえ、そんな人生など無意味だと思わんかね」

フェイトの身体から徐々に力が抜けていく。

元々、家庭環境の影響か、精神面で他の誰より繊細な彼女は数々の言葉に絶望しかけていた。

『『違う!!!』』

だがフェイトに支えられ、フェイトのために今の道を選んだ子達が、今度はフェイトに手を差し伸べた。

偶然繋がっていたモニターから、会話を聞いていたエリオとキャラロが、泥まみれの姿ながら確りとした声で否定した。

『無意味なんかじゃない!』

『僕達は自分で自分の道を選んだ!』

戦闘中なのか、空を凄まじい速度で飛行しているがフェイトへの思いを声に出し続ける。

『フェイトさんは行き場の無かった私に、暖かい居場所を見つけてくれた!』

『たくさんの優しさをくれた!』

『大切な物を守る幸せを教えてくれた……!』

一緒に過ごした大切な物、それをフェイトに必死に伝える二人。徐々に二人の眼に涙が溜まる。

『僕達が、皆が付いてる!』

『だから負けないで、迷わないで!』

二人がモニターに向い叫んだ。

『戦つて!!』

「……………」

それを聞いたフェイトから、魔力が放出される。

「…………オーバードライブ…………真・ソニックフォーム…………」

これがフェイトにとっての真の切り札、装甲が薄くなり、耐久性はなくなったがその分フェイトの本分である高速戦闘が真価を発揮する。

「ごめんね、エリオ、キャロ。疑う事なんて無いんだよね…………私は弱いから、迷ったり悩んだりをきつとずっと繰り返す。だけど…………」

フェイトの表情は先程の絶望に染まった物ではなく、生き生きとした清々しい物だった。

「良いんだ、それも全部私なんだ……！」

戦闘が行われている場所とは正反対に位置するその場所にN o , 1
ウーノが居た

「魔力値が増大！？……っ！？」

突然の異常に困惑し、直ぐに打開策を考え出そうとしたところで緑色の魔力光のバインドに拘束された。

「探しましたよ、お嬢さん、スカリエッティのもう一つの頭脳、戦闘機人十二人の指揮官N o , 1ウーノ」

緑色をした長髪の青年、ヴェロッサがそこに立っていた。

「君の頭の中ちよいと査察をさせてもらうよ?。」

近寄り頭に手を翳した所で、ウーノは気絶してしまった。

「それにしても……彼は仕事が速いこと。まさか僕の猟犬が先を越されるとはね。もしかしたら僕の実力の原型はコレだったりしてね」

この場の最短ルートを先程出くわした人物に指し示してもらい、そして道案内として、一個が先頭を走っていったのだ。

「頼んだよ、僕の妹分の大切な友達だからね……」

「装甲が薄い、当たれば落ちる!。」

フェイトはこの瞬間になっても以前苦しい状況には変わらない。

最初に出会った当初とはかけ離れた能力を持っている彼女達だ、このフォームでもどれだけ苦しい戦いになるか……

「恨むよ、シャルル……」

「それは遠慮願いたいんだがな」

「……え？」

冗談で口にした独り言に、本人の声で返事が返ってきた。

「おや、こんな所にも来てくれたのかい！ふむ、なるほどそれが君の分身体と言うわけか、実に興味深い能力だ！本人となんら代わりが無いようだ、サーチにも引つかからないとはただの変身魔法ではこつはならない！」

興奮するスカリエッティを他所に、シャルルはフェイトの隣に並び立つ。

「データの抹消をしに来たが……先に此处を片付けた方が良さそうだ」

フェイトはシャルルの言葉に疑問を抱いたが、今はこの状況を解決しなければいけない。

「フェイト、お前はあのブーメランをやれ、俺が奴をやる」

「解った、でも無理は……」

「解ってる、って言うか俺は分身。本体に言ってくれ」

詳しい能力の詳細を知らないフェイトは頭にはてなが浮かぶ。

「以前の私のスピードではない！データに有った貴様の動きを元に強化された私達がお前に負けるはずが無い！」

トーレは高速戦闘に措いて、今やフェイトとの実力は伯仲している。如何にシャルルと言えど、速度にそこまで主軸に置いていないので速度は一步劣る。

「これで！」

「……我が武の前に……速き事、その意味を失う……」

正面からシャルルに攻撃を仕掛けた筈のトーレはシャルルの背後で

仰向けになり天井を仰いでいた。
どうしてこうなったのか、周りも打ち付けられた本人すら解らなかった。

「如何した？コレで終わりでは無かるう……」

「くっ！ならば！」

一気にトップギアに持っていく、その速度は一時ではあるがフェイトすら凌駕した。

そしてシャルルの周りを飛び回り、攪乱をして何処から攻めるか気付かせないようにして背後から、襲い掛かった。

「やはり単調だ……君はもう少し射撃か武術を学んだ方が良いな」

そしてまた同じ結果。トーレの動きは常人では姿を追う事すら出来ぬほどの物になっているのに、こうして撃退された。

「達人と呼ばれる者は触れられてから反撃に転ずる事が可能だ、それでももう一つ上に昇ると……空気の震動で攻撃を読む。お前達が取ったデータは俺の動きだけなんだ、俺の反応速度は予想外か？」

まるで子供と大人、その実力差が圧倒的に開いていた。

多対一なら別だろう、お互いにフォローし合い、今のような一方的な展開を回避できる。

だがそれでも勝ち目が見えない、とトーレは感じた、自分達はスラック魔道師を倒すだけの力が与えられているにも関わらずだ。

「お前は……化け物か……」

隣では激しく戦闘が行われているのに、それをまるで感じさせない姿でゆつくりと歩んでくる。

「懐かしい呼ばれ方だ。そうだね、人を超えていると言う意味ではそうかもしれない……。お喋りは此处まで、余り遊んでやれなかったが君の活動は此处で一時停止だ……」

トーレの首筋に手刀を叩き込み気絶させる。

「さて、お前は如何する、このまま徹底抗戦か？」

スカリエツィ声を掛ける。

それと同時にフェイトももう一人の戦闘機人セツテを倒したようだ。

「その積りだよ、私は死んでも私の記憶を持った者が蘇る！そう！君のように！」

するとアジト内が突然激しく揺れ始めた。
自爆装置を起動させたのだ。

「なら、貴様の希望を俺が全て刈り取るう……」

フェイトとシャルルは己の武器を構え、スカリエッティに叩きつける。

「ああ……欲しかった、君達が……欲しかったなあ……」

口を付いて出てきた何気ない願望、それはスカリエッティ自身にとっても予想外だった。

シールドをはるスカリエッティだが元々戦闘者ではない彼に二人の攻撃を防ぐだけの技量など無かった。

（……そうか、私の欲望は………刷り込みでは無い、私の本当の願いは………）

「俺達は似ているんだよ、ただその方向性が少しずれただけ……次に話す時は笑い合っていたいものだ」

（仲間が……欲しかったただけなんだ……）

Episode - 36 (後書き)

作者「こんにちわ今晚はお早うございます、この作品を見てくれてありがとうございます！」

シ「最近始まったこの後書きコーナー。さて今回だが、スカリエツティのアジトにてフェイトの決戦だ」

作者「それにしてもお前は何処にでも出てくるな……何処にでも出てきて話に絡ませる、で考えた力何だけど、読者様が訳解らなくなりそうだ」

シ「そうだな、因みに俺の力で出せる分身の数は三体までだ」

作者「レジアスさんの所とフェイトの所とゆりかご？」

シ「ゆりかごにいるのは本体だ。だからもう一体いるんだが……」

作者「出してないな……うん、いいや今回は必要なかったって事で！」

シ「ふんっ！」

作者「あべしっ!？」

シ「説明しろ……」

作者「……もう少し先で出す積りですから……此処では勘弁してください」

シ「そうか、忘れていたとかではないんだな？」

作者「大切なファクターです、業と出していません」

シ「そうか、それなら良い、それでは今日は此処まで」

作者「次回もお楽しみください！」

Episode - 37 (前書き)

更新です！

いや、早いもので、この話で全部で四十部も書いてる事になるのか
……

あと僅かですが楽しんでいってください！

Episode - 37

「シッ！」

掛け声と共にシャルルの拳がストレートに放たれる。

それをオリヴィエは最小の力で受け流すと、カウンターで上段蹴りを放つが、シャルルはその足を掴みそのまま投げの体制に入った。

「フッ！せいッ！」

持ち上げられた身体を空中で急停止させ、残った足で蹴りを叩き込む。

「チッ！ならば……！」

掴んでいた足を離し、半回転してその蹴りに蹴りをあわせる。

どちらも相応の魔力が込められているのか、蹴り同士のぶつかり合いで衝撃破が発生し玉座が崩壊する。

そして距離が離れまた仕切りなおしである。

その間僅か数秒の攻防、それがもう何度も行われていた。

「……本当に強くなったのだな、オリヴィエ」

「はあはあ、当たり前です。これでもお兄様亡き後、はあ、負け知らずだったのですよ?」

互角のように見えていたこの攻防も、どうやら勝敗が決し始めたようだ。

「お前の体力も制限時間も限界だろう。このまま不完全燃焼で終わるのは俺としても君としても本位ではないだろうし……最後は」

その場でまるで槍投げのような形で構えるシャルル。

「お互いの全力で……」

それに返事をするように、オリヴィエもまた構えを取った。そして互いに高まる魔力と気迫。

「君の成長を嬉しく思う、そして君は俺が全力を出す相手として相応しい。我が最終奥義、その身に受ける……」

シャルルの手に黒く輝きを放つ一振りの剣が輪郭を現した。

「姿を現せ、帝剣ジュウユーズ！」

魔力で編まれている筈なのに、その形は本物の剣より確りと感じられる。

「ああ、やっと……やっとその一撃を撃たせる事が出来ました……あの最後の時すら手加減をされていたと知った時から私の唯一の心残り、お兄様に全力を出させたかった……やっと達成です」

そして高まりが最長に達した時

「いざ……」

「尋常に！」

「勝負！」

最初に放ったのはオリヴィエ、ベルカ式の数少ない砲撃魔法は軒並み恐ろしい威力を持つが、その中でも群を抜いて高い威力を持つものだ、その威力はなのはのスターライトブレイカーを凌ぐ。

「全てを切り裂け……さらばだオリヴィエ」

目の前に虹色の砲撃目掛け、手の剣を振りぬいた。

帝王シャルルが自ら創り上げた魔法、剣の姿をしているが、その真の有り方は投擲槍である。

その一撃は切り裂くことに特化し、対人での真正面からの打ち合いでは決して負ける事のない物である。

「流石お兄様……完敗です……」

速度は落ちる事無く、砲撃を二つに切り裂き迫ってくる剣、それをオリヴィエは笑顔を浮かべながら貫かれたのだった。

その隣で桜色の砲撃も階層を貫きながら、深層に潜む戦闘機人に向けて撃たれていた。

時間は僅かに遡る……

なのは目の前で繰り広げられているのは、嘗て王と呼ばれ国を治めていた者同士の戦い。

其れは一对一の神聖な物であると同時に自分では中に入る事が出来ないほどレベルそのものが違う。

『なのは、聞こえるか？』

「は、はい!」

戦っている筈のシャルルから念話が届いた。

『君の身体を止めていた効果はそろそろ消えた頃だろう、一仕事やつてもらいたい』

内容は、深層に潜む最後の戦闘機人の拿捕、しかし

「エリアサーチしていたのも纏めて消えたちゃったから探し出すのに時間が掛かるよ」

なのははこの広間に駆けつける前にエリアサーチを行っていたのだが、其れも先程の腕輪の効果で掻き消えてしまった。

『それなら心配ない、地に打ち付けている鎖がある、其れと同じ角度、向きに、あいつは居る』

地に打ち付けられた鎖、それはその場にあつた。

「いつの間に……」

『出来るか?』

「もちろん!」

壁抜き、其れはなのはの最も得意とする所。
何より頼られている事がなにはにとって嬉しかった。

「いくよ、レイジングハート!」

自身の愛機に声を掛け、チャージを始める。
桜色の収束砲が、敵に目掛けて向けられる。

「スターライト!」

『なのはさん……』

今度聞こえてきたのはオリヴィエの声だった。
顔をそちらに向けると、どちらも溜めに入っていた。

『そのまま聞いてください……先程の念話を聞かせてもらいました。
お兄様は随分あなた方を信頼されている様子、ですから聞いてもら
いたい事があります』

それは遺言のようだった、いやオリヴィエにとっては、この戦いに勝っても負けても、この世に留まれないのだから、それは正しく遺言なのだろう。

『兄は昔からなんでも一人で溜め込んでしまう癖があります。其れを心配していたのですが、杞憂のようです。でも、こんなこと言ってしまうとアレですが、お兄様が人に頼み事をするだなんて昔なら考えられない事です。ですから、これから何かと苦勞を掛けてしまうかも知れませんが、兄を如何かよろしく願います』

「は、い、はい！任せてください、私は、私達は、あの人の事を助けていきます！」

『其れを聞いて安心しました……では、この子の事を含めよろしく願います。さようなら……』

オリヴィエの砲撃が放たれたと同時に、なのはの砲撃も放たれる。

「ブレイカー……！！」

三者の魔力光が部屋中を満たした、その光が収まる頃、大きな風穴が開いた床と、倒れ臥す小さなヴィヴィオが残った。
しかし

「ゆりかごは……ドクターの夢は終わらない……」

大きな風穴の向こうから、最後の戦闘機人クアットロがそんな事を呟いていた。

そして大きな振動、動力炉も完全に止まったらしいが、それだけではこの振動の説明がつかない。

「何が起きている!?!」

珍しく戸惑うシャルルと倒れたヴィヴィオを抱きかかえているのは。

そこにはやてがヴィータを抱えて駆け込んできた。

「大変や! ゆりかごの砲撃がミッドの都心部に向けて発射体勢に入ったんや!」

まだ事件は終わらない……

Episode - 37 (後書き)

作者「どうも作者のばむ〜んです」

シ「シャルルだ、今回も見てくれた事、嬉しく思うよ」

作者「うん今回は書くのに時間が掛かったな」

シ「そうか……オリヴィエはコレで出番は終わりか？」

作者「そうです、残念ですが、彼女は既に死者。蘇るのは一時的なことなのです」

シ「俺は生きてるがな」

作者「それはそれ、これはこれ。さて今回の話ですが、やはりオリヴィエとシャルルの戦いが一番の目玉かな？」

シ「そうなのか？俺は最後のゆりかごの照準の行方が気になるが……」

作者「其れは次回！そして、今までやっていたアンケートは締め切りです！結果は以下のとおりになります」

vivid編 7票

帝王過去編 2票

テンプレ転生編 0票

シ「矢張りこうなったか」

作者「そうだね、でも改めて思った事なんだけど、過去編も見たい
と言ってくれた人も居るんだよね。だから、なんとかヴィヴィッド
編に混ぜられればなあ、とか無謀な事まで考え出してるんだけど…
…」

シ「どうなっても知らんぞ？」

作者「だめかな？」

シ「其れはお前次第だ。あの漫画の話にどうやって入れるか、が課題になるが、難しいだろうな」

作者「そうだよねぇ、それではこの辺で！また次回！」

Episode - 38 (前書き)

更新です……

他に2作品かいてるが、こっちの筆が進み順番を守れず投下。

優柔不断で申し訳ない

Episode - 38

「ゆりかごの主砲が……発射体勢にはいっただど!? 何故だ……」
「ントロールしていた奴は今やって、動力室もそちらが壊した筈……」

シャルルは思考を働かせるが原因がわからない。
そこに此処とは違う場所に居る自分の分身から通信が入った。

『聞えるか? 本体。今し方スカリエッティがゆりかごの最終手段が動き出したといっている』

ゆりかごの主砲の破壊力は、アルカンシエルと同じだけの規模をその砲撃で焼き尽くす。

アルカンシエルが空間歪曲と反応消滅で対象を殲滅するのに対して、ゆりかごは膨大な砲撃を持って焼き払う為、後の環境被害が甚大だ、下手をすれば人が住めない土地になる恐れすらある。

「……………」

「そ、それならこの艦ごと沈めちゃえば……」

「難しいで、コレだけのモンを打ち壊すには、それなりの物が必要やけど、其れを出来るだけの火力は人には出せへんし、戦艦が来る

のもまだ時間が掛かる……」

状況は最悪といって良い。

器と操作者が居なくなつた事で今まさに墜落を始めているゆりかごは、その今まで溜まっていた魔力の全てを砲撃を放つ事だけに費やし始めている。

スカリエッティの話ではこれはクアットロが勝手に組み込んだ最後の手段らしい。

「やるしかないだろう……」

シャルルは決意を固めてその場から歩き出した。
だが、そこで裾が誰かに引かれる。

「何処に……行くの……？」

なのはだ。

「砲撃を止める」

シャルルの一言は予想外であり、ある意味予想できた答えだった。

「な！？無茶や！このクラスの戦艦主砲を人間一人で止めるやなくて、像の歩みを蟻が止める様なもんや！あの時の比じゃないんやで！？」

はやてがその言葉に反発する。

あの時とは始めてあつた時の事だろう。

彼女達に出会ってから、もう何年経つだろうか。

「だが、他に方法がない……人の力では落せず、落せる戦艦は間に合わない、残るは砲撃を止めるだけだが、君が言つたように人間ではあの砲撃の前に霧散、有つて無きの如しといえる……だが俺ならば幾らかは凌げる」

『最初から死ぬ気だつたの……』

次に聞えてきたのはフェイトの声、繋がっていたモニターから見えるその眼は何かを問い詰めるようだった。

『シャルルが自分のデータを取りに来た目的は、自身の存命のためではないの？』

「……データは取りに行つたんじゃない、そっちの俺が言わなかったか？抹消しに行つたんだ。そもそも存命に興味はないよ、俺はこの事件が解決したら三提督にこの身の任せていたし、そろそろ限界

も来てる。死んで良いとも思っていたが自然とな……」

「ダメ……ダメだよ！行っちゃダメ！」

「そうや！行っちゃあかん！もう少し考えれば何か良い手が見付かるかも……」

一層強く裾を握り締めるなのは、はやても手を握り引き止める。

「そう言う訳にもいかないよ……君たちが此処から出る頃にはもう発射には間に合わない」

「それやったらシャルル君も……」

「そう、俺も此処から飛んで行ってたのでは間に合わないが、目印を置いてきている」

シャルルは二人を振り払う。

「さよなら……チェンジシフト」

シャルルの姿が薄くなる、転位を開始したのだ。

「――！」

二人が何か言っているが其れも転位中の為聞えない、静かに切り替わる視界。

「転位を確認、情報統合を確認……良かった誰も死んでない」

戦場全域をカバーするだけの鎖を制御するために用意しておいた最後の一人を常にゆりかご正面に位置する場に置いていた。
正面から見た方が戦場の把握がし易い為であったが、こうして役に立つとは思わなかった。

「矢張り、デカイな……」

ゆりかごを正面から見据えるシャルル。

「今の魔力量では耐えられないか、全ての鎖よ、還元せよ！」

収束していくゆりかごの魔力に対抗するため、自身も万全の状態に戻す。

それでもその破壊力を真正面から受けきるだけの物には成らない。それでもやる、いや、やらねばならない。

「——まいったな、この世に未練などない積りだったが……」

其れはまるで走馬灯のようなのは、フェイト、はやての顔が頭に浮かぶ。

はやてと過ごした家族のような関係、久しく感じる家族の団欒がとても居心地が良かった、たまに二人で出かけたりもして、それも楽しくて、本当に充実した日々だった。

フェイトと話した時間、真剣に子供たちのことを語る姿はとても綺麗だったのを覚えてる、その話をする時だけ見せる優しい笑顔が好きだった。

エリオとキャラを連れて四人で出かけても良かったかもしれない。

なのはと出会った時、フェイトにはああ言ったが、何故助けたのか実の所解らない。ただその姿を見たとき、勝手に身体が動いてしまっていた。その後も出会ったたびに接してくる時の彼女の眼は眩しく、何処までも真摯だった。

「本当に……」

目の前から感じる力が増し、シャルルの身体に力が入る。

「護りたいものが増えすぎた……ゴフツ！時間切れか……」

シェリーに施してもらった処置も時間切れになるが、シャルルはそれでも吐血をしながら止めようとしなかった。
そしてシャルルは己の全てを籠める盾を目の前に作り出した。

「見届ける世界よ！俺の最後を！愛する人たちを守るために今！」

シャルルは一際大きく声を張る。

「この命の灯火を燃やし尽くそう……！」

《灯火消えんとして光を増す》まさに今がその時なのか、今までかけていたリミッターを全て開き、その異常な魔力が衝撃波になって周りの人間を押しつける。

まるで退避を促すように……

Episode - 38 (後書き)

作者「始まりました、後書きコーナー！……しかし私に愉快な事を書く才能が無い、既にネタ切れを起こし、今回の目玉を紹介するだけです」

シ「ぶっちゃけたな、しかしもうネタ切れとは作者の未熟が伺えるな」

作者「はい……ネタとか考えられないもんで。と言う訳で今回は」

シ「最後だろ？そこに一番時間かけてたと聞く」

作者「そうです、自分では良く出来た方だと思っんですが……」

シ「間違いなくこの流れでは俺が死ぬ……」

作者「まだ隠し玉が残ってる！……はず」

シ「はず！？おい、本当に大丈夫なのか？」

作者「はい何とかします。それでは今回はこの辺で」

シ「次回もよろしく頼む」

Episode - 39 (前書き)

更新です！

今回でゆりかご戦は終了となります。

此処まで掛けて楽しかったです。

この後事後処理の話を書いてストライカーズ完結かな？

Episode - 39

「すうゝはぁゝ……」

戻った魔力を制御する。

全力を完全に制御して初めてゆりかごと拮抗するのだ。

「相殺が限界だな……」

人を超える力を制御しても相殺が限界で、その後、自分がどうなるかは考えなくても解る。

「死、か……それでも周りに被害が出ないし、最良の手段には違いない」

迫る危機に、何時もと変わらない風な態度を取るが、その身体は僅かに震えていた。

「だらしなない、この土壇場で死ぬのが怖いなんて……二度目だろ？ 落ち着け……」

死ぬのが怖い、其れは人間の根源的なもの、制御が出来るようなも

のではない。

「死後の世界って言うのは経験しないままこの世に再び戻ったからな、楽しみにしたくは無いが期待しておこう」

ゆりかごの魔力が収束し艦前方に巨大な魔力球が作られる。

「全魔力を盾に注ぎ込む！ネイキッド……悪いな此処までだ」

構いません、私達デバイスはマスターに使われる事が最大の喜びです。デバイスにとっても戦場で機能を停止することは誉れになります

「ははっ！まるで騎士みたいだな、それじゃ——」

「うう、気持ち悪いですよ」

準備が最後まで整った時、背の辺りから声が聞こえた。其処に顔を向けると何故かリインフォース？がいた。

「はぁ！？何？何故！？如何して！？」

この状況でありえない人物の出現、戸惑うシャルル。

「ううゝ、はやてちゃんが、はやてちゃんが投げたんですよ」

リインが泣く泣く説明する。

シャルルが転位を実行しようとした時、はやては咄嗟にユニゾンを解き、リインを投げてくっ付かせたのだ。

「『唸れ、私の強肩！！』らしいです」

「あの時何か言ってたと思ったが其れだったのか……」

あの極限状況下でシャルルがなのはやはやてを突き放した事で、転位はくっ付いていれば同道出来ると踏んだのか、間に合わない自分の代わりにリインを投げて寄越したのだろう。

「頭の回転が速いな、いや気付かない俺も俺だが……其れだけテンパッて居たという事か」

ですがコレで……突破口は開かれました

「何……？」

資料によるとリインフォース？さんはマスターが作られた夜天の書をモデルの作られているとか、ならばマスターとのユニゾンも出来るのでは……

「しかし、この子は彼女とは別人で……」

マスター、貴方は過去にユニゾンデバイスを作られたから忘れられているかもしれませんが、この時代では既にその技術は無いのです。ですから彼女は、リインフォースさんと言うデータをそのままに別の核を与えられた、云わば生まれ変わりなのです

考えなかったわけではない。

夜天の書は有用な魔法の力を世の役に立つ様に、将来有望な人間の教科書の役割を持つように、そして緊急事態の為に自らに適合するように創った。

その為、データがそのままならば、ユニゾンできる筈なのだ。

「確かに出来るか……万が一押さえ切れなかった時が有ってはいけない、頼めるかリインフォース？」

「はいです！そのために来たですよ！」

「よし、では――」

来ます！超威力砲撃です！

発射される砲撃、だが既にユニゾンの準備は整った。

「行くぞ！ユニゾン！」

「『イン！！』」

放たれた砲撃が展開されていた盾に衝突、一瞬軋んだ後、その形状を一切変化させなかった。

『す、凄いです！はやってちゃん達と同じ位、いえそれ以上かも知れないです！』

「君の雛型が俺に合う様に調整されて生まれた子だからね、当然と言えは当然か」

その姿はユニゾンにより変わっており、元々白い騎士甲冑だった物が漆黒と言えるほどの黒さに変わり、逆に黒かった魔力光は白く輝

きを放っていた。

髪も銀から金に変化し、瞳は紅はより鮮烈に翠はより深く色を増していた。

「此処からが本番だ！全力で防ぎきる！」

『はい です』

主の魔力光が変化した事により、鎖で編まれた盾もその色を白く変え、砲撃の一切を防いでいる。

魔力稼働率108%いまだ上昇中、コレならば行けます！

自身の限界を超えてその盾は更に輝きを増していく。

「そうか、もう一息……ゴフッ!？」

マスター！

『マスター!?!』

忘れていた訳ではないが、興奮とユニゾンで多少気にならなかった

だけで、その身体は依然危機的状態であることには変わりはない。シャルルは口の端から血を垂らしながら笑いかけた。

「平気だよ、其れとリインフォース、俺はまだ正式にお前のマイスターになった訳ではないぞ？」

だが其れが空元気である事は、体調を管理していたネイキッドは理解しており、今ユニゾンしているリインにはその変調が肌で感じ取れていた。

「威力が弱まってきた、そろそろ終わりだ！気合を入れろ！」

張りあげる声とは裏腹に、身体機能は一つずつ機能を止めていく。口から血が垂れ続け、魔力量に耐えられなくなつて来た身体からも血が噴出し、その騎士甲冑を紅く染めていく。

「オオオオオオーーーー！！」

だが諦めない、彼の頭の中には荒廃した過去のベルカの景色があった。

そんな光景を二度と見たくない、彼女らに見せたくない、その一心で彼は体を蝕む痛みに耐え続ける。

「や、った……か……？」

前方からの圧力が消えた事で彼は防ぎきつた事を悟る。
だがそこでリインは気絶しユニゾンが強制的に解除され、ネイキツドは機能が停止し、シャルルは力を使い果たし落下する。

（なかなか良い人生だったと思うけどな……）

この高さから落ちれば助からない、理解しても先程の様に恐怖が湧かなかった。

何かを守り通す、それがこんなにも清々しい事だったとは今まで彼は気付きもしなかった。

リインは最後の力で空中にバインドし、落下を阻止しておいた。
彼女はあとで助けられるだろう。

「後の事は任せたよ……」

「無責任な事言わんといてな……」

そんな声と共に落下していた体が浮き上がる。

「そつだよ？これから一緒にやっていかなきゃ」

「うん、勝手に一人だけ逃げちゃダメなんだから！」

落下していたシャルルを抱き上げたのはなのは、フェイト、はやての三人。

その後ろではフォワード陣とヴォルケンリッターの姿もあり、先程空中に止めておいたリインも回収されていた。

「……全く、敵わないな……それじゃ」

シャルルは傷だらけの身体をゆっくりと立て直し笑った。

「凱旋だ！」

作者「タグに書いてないけどハーレムです。それだけは譲れない！
そのために三人に万遍無く出会いを書いていたじゃないか！」

シ「このバカが！そんな事を公言して今まで付いてくれていたファ
ンが居なくなってしまうだろうが！」

作者「何を言ってますか、ここまでやってしまった以上やり通さね
ば逆に裏切ってしまうぞ！それに解決策も考えてある（にやり）。
と、言うことで今回はこの辺で！」

シ「ま、待てまだ話は——」

Episode - 40 (前書き)

更新しました！

はい、記念すべき四十話です！テンションがうなぎ上りです！

そしてもうすぐ五十万PV！何か記念でもやろっかな？

Episode - 40

規則正しく音が響く。

そこはある病室、ベッドで眠りに就いているシャルルであった。

砲撃を防ぎきった彼は、途中で気を失い、そのまま病院に運び込まれていた。

ゆりかごはその砲撃が収まった直後に到着した戦艦の集中砲火を浴びて沈んだ。

「そ、そんな……如何にもならないんですか!？」

叫ぶように大きな声を上げているのはなのは、しかし其れはその場にいる人間の総意に他ならない。

「残念ながら……私共では既に手の施しようが……」

申し訳ないと頭を下げ続ける医師団。

シャルルの身体を治す為にデータを持ってきたはずなのに、最早彼らでは進行する劣化は抑えられないと言う。

「手が無いわけではないのですが……」

「助けられる方法があるんですか!？」

「先程申し上げたとおり、私共では無理なのです。こう言うては何ですが、彼を作った人間、その人物であれば、治療が可能なのではと……」

其れを聞いて、半ば絶望した。

それは、スカリエッティに依頼をするという事だ、だが自分の計画を破談にした人間を治療するなど如何考えたってありえない。

「とにかく聞いてみるしかないやろ……」

そして彼女らはスカリエッティが留置されている場所に向うのだった。

「勿論さあ！」

説明をして放った第一声がこれである。

「こうしては居られない！早く彼の元に向わなければ！」

留置所の筈なのに、荷物があり、それを詰めて準備を始める。

「……………あれ？この人誰や？」

「解らない、私は話をするの初めてだから……………」

「性格が変わってる……………」

はやてとなのはがスカリエッティの性格に疑問を抱いた。
直接会っているフェイトに至っては、頭を抱えて混乱している。

「さあ！早く行こうじゃないか！」

生きている。

それが彼が意識を浮上させる際に感じたことである。

あれほどの砲撃を防ぎ、尚且つ生きているという事は最早偶然を通り越して奇跡である。

「身体が軽い……？」

眼を閉じたまま身体の調子を確認するように腕を動かした時に、自身の体調が良すぎる事に違和感を感じた。

なぜなら彼は、朝目が覚めるとき、激痛によって目覚めるからだ。それがまったく感じない、それどころか身体にあったたるささえ無くなっていた。

目を開けて自分がどういう状態にあるかを確認する。

「やあ！目が覚めたかい？」

「ぬおわあああゝゝ！？」

目が覚めて一番初めに目にしたのはのが丸眼鏡を掛けたおっさん、もといスカリエッティだった。

「何故お前が此処に！？そして此処何処！？」

「そんなの君を助けるために決まってるじゃないか！息子よ！」

「気持ち悪い！近付くな！確かにお前に作られたがお前の息子というのは納得いかん！」

「何！？ならば友と、ああこの響き心に愛が生まれそうだ……」

「更にキモイ！？」

二人で言い合いをしていたら、病室のドアが開かれた。

「「シャルル（くん）！」」

「ぐふお！？」

まるで駆け込むように進入してきたのは、フェイト、はやての三人。

そのままスカリエッティを押し退け、飛びついてきた。

「良かった、本当に……」

「死んでまうかと思つたで？」

「そうだよ、無理をしちゃダメなんだから」

「ありがとう……だけど今の状況を教えてくれ。何でこの場所にスカリエッティが居る？」

「あ、そうだったね、先ずはそこから話をしなくちゃ」

そして今までの経緯をシャルルに聞かせた。

「成る程、しかしよく治す氣になつたな、スカリエッティ？」

疑問、矢張りそこに行き着くわけだ。

「簡単な事さ、私に新しい欲望が生まれた！それだけなのだ」

「新しい欲望？」

「ああ、この世に蘇つたベルカの王！それが此処まで行き続け、遂には私の計画すらも凌駕する存在！君がこの先どういう人生を歩む

のか非常に興味が絶えない！ああ、こんな魅力的な研究材料が居るのにむざむざ殺してしまうわけが無いだろう！？」

陶醉したように語るスカリエッティだが、そこで、ふと顔を和らげた。

「それに、初めて気付き、やっと出来た仲間だ……私は身内には甘い男なのだよ」

「そうか……本当にお前とは笑い合いながら話が出来るかもしれない」

そして暫らく経ち、スカリエッティはシャルルの回復を確認したらまた留置所に帰っていった。

それから三人で会話をした、今まで何をしていた、あの後如何だった、それがどんなに小さな事でもシャルルには其れがとても心地よかった。

『仲良く会話中のところ失礼するよ』

だが、会話の最中にモニターにある三人が出てきた。

「ああ、お三方でしたか。今日はどういった話で？」

三提督三人が揃い踏みでモニター越しに居る。
今では公式でこの三人が揃う事は余り無く、大きな行事の時に揃う
だけだったのだ。
それが公式外で三人が揃ってこの場に居るという事はかなり大きな
話になる。

『何、いよいよお前との契約を果たそうと思つてな』

「早いですね、まあ助かりますが……」

『あらあら、私達は遅すぎるとすら思っているのよ？』

『そっちの娘達にはもう話してあつたしな』

何故先になのは達に話すのか疑問だが、其れを考えずに先を話させる。
る。

『お前との契約、私達が居住と身元を保証し、お前さんが我らの代
わりに管理局で不正をしている人間を捕らえる、そして』

一度言葉を切り、手元にある書類を確認した。

『全てが終わったからお前の処分を正式にして欲しい、だったな？』

「はい、間違いありませんよ」

『見事にお前さんに不利な契約だな、良くこんなびっくりな内容にサインをしたもんだな。まあそれはさて置き、処罰を伝える……』

息を呑むなのは達三人、そして三提督はお互いに顔を見合わせて宣言した。

『お前には時空管理局大将の任に就いて貰う！』

「……………は？」

Episode - 40 (後書き)

シ「何故俺が大将に……？」

作者「其れは作者の思いつき」

シ「貴様！ふざけるなよ！それに最初から大将をやっていた奴が居るだろう！？原作にもこの作品にも出てきていないが、勝手にリストラか！？」

作者「それがさあゝその人も君がばら撒いた犯罪集に名前があつたんだよねえゝだから捕まってしまったという裏設定！」

シ「本文に書けよ！……ハア疲れる……」

作者「そんな君にはコレ！リポ。タ。デ。！黒鷹さんからの贈り物！俺贈り物貰ったの初めてだから感動してるんだあ！」

シ「ありがたく頂きます……」

作者「事後処理うんぬんを書く積りだったけど、シャルルの処分を如何するかを先に書かなければいけないと思い立ちこうして書きました。多分この後一話分をこの続きになると思います」

シ「んぐ、んぐっふう……落ち着いた。今回はコレで終わりか？」

作者「そうだね、それでは！感想、ご指摘、何でも待ってます！」

Episode - 41 (前書き)

更新しました！

ダメだ、書いてて体が痒いのなんのって……

ご都合展開で無理やりですよ。

Episode - 41

「俺が……大将？」

彼らが言った事が理解できない。

「ふざけるな！何故俺が何も処罰されずに出世をしているんだ！？
こんなもの誰が認めるものか！」

シャルルは最早メディアにも取り上げられている。

あれだけ大きな事件中に大きなモニター越しに話をしたら、それは
取り上げられるだろう。

しかも『帝王』という名は犯罪者として管理局だけでなく全次元世界にも広まっている。

『……お前は管理局という組織の基盤を揺るがした。アレだけの犯罪者が上層部に居ると民間人にまで知れ渡ってしまった現在、管理局の威厳など何も有りはしない』

シャルルがやった事は、管理局という組織の清浄化。
汚いものを廃し、綺麗なものを出来るだけ増やす事。
しかしそれに伴い、民衆には悪印象を与えてしまった。

『故に、民衆受けする人物を上層部に就ける事で悪印象を打ち消す事にしたのだ』

「それがそもそも可笑しい何故俺なんだ、俺は犯罪者だぞ？レジアス中将や、若いクロノ提督など有能な人物は居るだろう」

そこで、その場に居る人間は溜息を付いた。

シャルルは何故このタイミングでそこまであからさまな溜息を付かれるのか解らなかった。

『貴方、気が付いていなかったのかしら？先の戦闘は全てメディアを通じて報じられていたんですよ？』

「それは……知っていたが……」

益々解らなくなるシャルルに、隣の彼女達が助け舟を出した。

「つまりね？シャルル君が命がけでミッドチルダを守ったという事が世界の人たちに伝わってるんだよ……台詞付きで」

「……は？」

「『見届ける世界よ！俺の最後を！愛する人たちを守るために今！』って奴や、カッコ良かったで〜」

「あ、愛する人たちって、誰かなあゝて思ったり……」

「！？」

シャルルの顔は恥ずかしさから真っ赤に染まり、声にならない声を上げて身悶えていた。

シャルルはあの時が最後だと思っていたが為に自分が言ったことを深く考えていなかった。

『……ゴホンツ！命がけで首都、ひいては数多の人々を救った英雄を我々が処罰したら、其れこそ管理局という組織はダメになつてしまふ。故にお前には管理局への奉仕活動という形で大将職に就いて貰ふ。他の上層部の人間も歓迎していたぞ？』

上層部の人間というとレジアスを筆頭としたシャルルが会いに行った人間達だ。

「し、しかし、それだけで人々が納得するとはとても……」

『勿論、納得しない人間も居るだろうから、もう一つ手段を決行しようと思う。……ところでお前さん、この法律は知っておるか？』

「？それは一通り……」

『そうか、ならばもう一つの手段を明かしてしまっか』

モニターの向こうに居る三提督はニヤニヤと笑みを浮かべ、隣に居る三人は顔を赤く染めてモジモジとしている。

『そこのお娘ちゃん達とお前さんが結婚すれば良い』

「……………は？」

「なんと言った？こいつ等は血痕？血か？」

『英雄と今回の作戦の功労者であり、管理局のエースたち、この様な組み合わせなら悪い印象も一転して祝い事に変わるだろうて』

「だ、だが多重婚など認められる訳がないだろう！？しかも彼女達の意味を無視した政略結婚など！」

『……ハア、やっぱり知らなかったか……このミッドチルダでは多重婚は条件付きで認められている、しかも彼女達の意味は確認してある。非人道的な事をするわけがないだろう？』

シャルルは隣のなのは達を見た。
彼女達は恥ずかしそうに顔を背け俯いた。

『この法律は魔道師不足を解消するためと、魔道師の質を高めようとした旧時代の遺物のようなものだが、今まで適用された試しがなかった為、今まで放置されていたものだ。条件というのが殊更厳しくてな、結婚する男女がオーバーSランク魔道師である事が必要なのだよ』

其れは確かに厳しい。

結婚する相手全てがSランクを超えて居なければならないのは流石に不可能に近い。

『この際だから、その法律を使おうと思ってな、ほれ、嫁さんが三人出来たぞ？』

余りの突然な出来事にシャルルは言いよどんでいた。

「あのね？三提督からは強制されてないんだよ？」

「私達がその話を聞いてお願いしたんだ」

「後はシャルル君の気持ち次第やで？……それとも、私らの事……嫌いなん？」

三人の真剣な瞳がシャルルを捉える。

「う、嬉しい……君たちの気持ちは素直に嬉しいし、俺も君達の事が……好き、何だと思う」

「何や、煮え切らん言い方やな？」

「しょうがないだろ？こんな経験今まで無いんだから。前世も付き合った女性すら居ないよ」

三人は驚き、目を見開いた。

シャルルの何処か気品漂う立ち居振る舞い、整った容姿、それらが揃っていたため彼女達は女性経験くらいあるだろうと踏んでいたのだが、予想外の情報だ。

「だから結婚、というのはまだ早い気がするんだ……婚約という訳には行かないだろうか？」

『ワシ等に聞かれてもな？それは本人同士で決めれば良い、ワシらはその結果を一般に広めるだけじゃからな』

シャルルは立ち上がり、三人の前に向き直る。

「少しの間だけ待っていてくれ……君たちを大切にしたい、暫らく俺の我が儘に付き合ってくれないだろうか？」

「「「……………」」」

三人は固まっている。

「あ、あの？」

「汚いで、そんな言い方……」

「はう……………」

「大切にしたいだって……………」

三人は顔を赤く染めてまたしても俯いた。
シャルルは不安を感じて、それぞれの顔を覗き込んだ。

「待つてたる！」

「うおっ！」

覗き込んだ所で勢いよく顔を上げたはやてに驚き、飛び退いた。

「わ、私も……待つてる、よ？」

「うん、私も。だからいつか聞きたいな？シャルル君の口から……」

なのはそこまで口にすると二人にアイコンタクトを取り、口をそろえてある言葉を口にした。

「」「愛しています」「」

Episode - 41 (後書き)

作者「zzz……zzz……」

な・フェ・は「ふう……」

シ「何故作者は寝ていて、君たちはお茶なんか飲んでるんだ？」

は「この人なら貰った「世界の銘酒100選」を飲みすぎてダウンしてるんや、私は物語りも後はエピソードを残すのみやから、こうしてお茶会をしとてん」

フェ「「渋い緑茶（玉露）」と「京都某銘菓の和菓子」だって。私にはこのお茶は甘みが足りないかなって……」

な「ダメだよフェイトちゃん！？緑茶に砂糖やミルクを入れるのは！？」

フェ「え？慣れたら美味しいよ？」

シ「そのままの味を楽しむものだ、止めなさい……」

は「それにしても私らが婚約か……何や恥ずかしいな？」

シ「寝耳に水とはこの事だよ……だが、悪い気はしないのも事実だ」

な「うん、呼び出されて『あいつの事如何思ってる？』だもん、ビツクリしちゃったよ」

シ「……今度本格的に縛り上げた方が良さそうだな……」

作者「とりあえじゅゝ、この辺で終わりにゆしちょこっきゃゝ？」

シ「寝てろっ！」

作者「あべしっ！？……次回……最終回の……予、定……ガクッ」

Episode・END（前書き）

…… やりました、最終話です！

長いようで短かったこの4ヶ月、いろんな人に応援していただき、初めて作品の完結にこじつける事が出来ました！

それでは読んでいってください。

Episode - END

あの事件から数ヶ月。

世界ではあの事件を「JS事件」または「帝王の肅正」と呼ばれるようになった。

そして、其れを行つた帝王は何と管理局大將に就任。

内部からの不安の声は出て来ず、世論からも概ね好意的に受け入れられた。

其れと同じくして婚約した事も発表、相手があのエース達だと言う事が加わり、大きく取上げられ管理局の不正を正し、世界を救った英雄として、悪印象は一転して英雄を称えるニュースで一杯になった。

「だからと言って仕事が減るわけではないのだが……ドウエ、此れをレジアスの所にとって行ってくれ」

「解りました、歸りに妹達の所によっても？」

「構わないよ、会えて居なかった時間が多かったんだ、其れくらい多めに見よう……しかし、仕事が詰ってるからできるだけ速く戻ってきてくれ」

「解りました、行つて参ります」

そして現在、事後処理に加え人員不足が深刻化し、先に事件の主犯、ジェイル・スカリエッティは『友の為ならば』と特別に設けられた管理局の研究所兼牢の中で研究員として仕事に勤しんでいる。

彼に作られた戦闘機人たちは海上隔離施設で更生プログラムをうけているが、十分な能力のあるドゥーエはシャルルの秘書に就き、ウィノ、クアットロはスカリエッティと共に研究所に籠もっている。生みの親がこんな状態のため、他の戦闘機人達は反抗する事無く自分の判断で更生プログラムを受けると決め、保護された召喚師ルーテシアと融合機アギトも共にプログラムを消化している。

「良い事なのだが、アイツの扱い辛さは如何にかならないもんか……」

スカリエッティは管理局に従事するのではなく、飽く迄もシャルルの為だと言い張り他の人間の依頼を突っぱねるのだ。

そして、たまに何かを作ったと思ったら下らない発明ばかりといい加減な所が多い。

「自分で『見てくれこの下らない発明を！』とか言ってるしな。しかし、たまにする仕事が良い物ばかりだから侮れない……」

シャルルはこの後に控える用事の為に手早く仕事を片付けていく。

「待つてろよ、ヴィヴィオ。お父さんがすぐに行つてやるからな！」

この後控える用事とはヴィヴィオに会いに行く事だった、大将の仕事と、事件の処理に追われ今まで会いに行けていなかった為に気合が入っている。

ヴィヴィオは現在、高町姓を名乗っており、高町ヴィヴィオである。まだまだ先の話だが、渦中の四人が結婚しても、夫婦別姓を名乗るようだ。

なのは、はやては構わないと言っていたが、フェイトの事情が複雑で両家の名前を大事にしたいらしく、三つのファミリーネームを持つ事に成ってしまいそうだった為、それならと言う事らしい。

「六課の試験運用も明日で終わるか……顔出してみるか」

あの部隊とは長い付き合いが有ったからか、シャルルは明日の予定を幾つかキャンセルし、無理をしても行く事を決めた。そこで、扉のドアが叩かれる、入室を許可し、その人物が入ってくる。

「失礼する、この事件について幾つか聞きたい事が……」

入ってきたのはゼスト・グランガイツである、彼はシャルルと同じくスカリエツィの調整を受け、健康体になった。

その後シャルルの直属の部下として一佐の階級を与えられ、日々忙しく働いている。

その合間にルーテシアや彼女の母メガーヌの見舞いに行くのを忘れ

ない。

「すまない、忙しかったのなら出直すが？」

「問題ないよ、それでどの事件だい？」

「ああ、この件なのだが……」

仕事熱心でシャルルとしては大変助かっている。

この日も此れが最後の仕事だったとかで、話した後に手伝ってくれた。

そして機動六課解散式当日。

式が終わり、二次会に向っていたフォワードメンバーはなのはに引き止められ、練習場に集合した。

彼女達は練習場で咲き誇るなのは達の故郷の季節の木、桜に目を奪われた。

始まりと、そして別れの季節に付き物の花、彼女らの門出に丁度良いタイミングで咲いてくれた。
集められたフォワード達になのはとヴィータが言葉を送る。

「四人とも、もう立派なストライカーだよ」

最後に言われたその一言で彼女達は感極まり涙を流し喜んだ。

「さて、せっかくの卒業、せっかくの桜吹雪、湿っばいのは無しにしょー!」

「ああ……」

「自分の相棒、連れて来てるだろうな?」

「え?え?」

フェイトを除いた隊長陣が自身のデバイスを出しセットアップする。

「何だ、お前は聞いてなかったのか?」

「全力全開、手加減なし!機動六課で最後の模擬戦!」

「全力全開って、聞いてませんよ!？」

「まあ、やらせてやれ、此れも思い出だ」

彼女達は既に戦う気満々でフェイトには止めきれなかった。
そしてバリアジャケットを展開し、全員戦闘準備を整えた。

「それでは」

「レディー」

ギンガとはやてが審判を引き受け、開始の宣言を開始する。

「面白そうだな、俺も混ぜてくれないか？」

が、そこで止められ木々の間から出てきた人物は誰もがよく知るものだった。

「て、シャルル君!？どないしたん？仕事大変なんちゃうん？」

「今日のために一日開けてきた。其れよりこの頃デスクワークばかりで身体が堅くなってるんだ、混ざらせてくれないか？」

「其れは良いけど、如何しようか？人数的にもバランス的にもちよつと……」

「それならそちら八人で俺一人でいいぞ？それなら釣り合いが取れそうだ」

「……へえー言うじゃねえか」

「我らベルカの騎士も舐められた物だ……」

「お前らこそ、戦乱の化け物とまで言われた俺を相手に何処まで保つのか見物だな」

笑っているが、顔が引きつっている。
目に見えない火花が散っている気さえする。

「え、えーと、それじゃ改めて」

「手加減無しだ、卒業式は派手に行こう！」

「レディー！」

「「ゴォー！」」

彼らは笑顔を浮かべてぶつかり合った。

これから進む道が違えども、この一年間は忘れられない思い出になる。

どこまでも、どこまでも眩しい彼らの進む道に光があらん事を……

Episode・END（後書き）

余り長文は現在書けない為今回の後書きコーナーは中止です（汗）
此れの後も番外や、続編と書いていきますのでよろしく願います！

E p i s o d e - E x t r a } 高町家にて (前書き)

復活！とはまだ行かないですが、チマチマ書いて漸く完成したので
上げます！

Episode - Extra 高町家にて

JS事件から一年の月日が流れた。

方々の尽力により、事件の爪あとは見えなくなり、たった一年で人々の間で事件の話は無くなった。

其れを成し遂げたシャルルは現在、スーツに身を包み身嗜みを整えて喫茶翠屋に向っている。

「……可笑しな所は無いか、なのは、ヴィヴィオ？」

「大丈夫、カッコいいよ！」

「大丈夫だよパパ、カッコいい！」

現在この場に居るのは現在婚約中で恋人のなのはと娘のヴィヴィオの二人。

ヴィヴィオを真ん中に手を結び、仲の良い親子のように歩いている。あの事件から一年、忙しさからなのは達の両親に挨拶をしてなかった事に気付き、会う約束を取り付けてもらった。

「しかし御実家でなくて良かったのか？自身の経営する店とは言っても、家のほうが落ち着くと思うんだけど……」

「最初はその積りだったんだけど、シャル君が味にうるさいって言ったら、それなら家の商品の味を見てもらおうかしらって……ごめんね？」

下から覗き込むように上目遣いで謝ってくる。

翠屋は今日、娘の為に貸切になっているようだ。

「別に構わないよ、それじゃ入ろっか？」

会話に夢中で何時の間にか、翠屋に着いていた。

扉を開けずとも匂いがする、此処まで濃厚で香りが良い店は久しぶりに訪れたと心の中で期待を膨らませるシャルルであった。
なのはが先に戸を開け中に入って行く。

「申し訳ありません、今日は……ってなのはじゃない！それじゃ、そちらの方が？」

中に入って出迎えてのは栗色の髪をストレートに伸ばしている若い女性、なのはから家族構成を聞いていたのでそれが誰なのかすぐに解った。

「始めまして、なのはさんのお姉さんですね。私、なのはさんと婚約をさせて頂いているシャルル・グリーンフェルトと申します。このたびはお招きに預かり大変ありがとうございます」

挨拶をし、頭を下げた所で周りからの反応が消えた、恐る恐る顔を上げると、やけに笑顔のお姉さんと苦笑いのなのはが居た。

「あらあら……お姉さん何て嬉しいわ」

「シャル君、この人は私のお母さんだよ」

「……………は？」

空いた口が塞がらない。

如何考えても、見た目と中身が一致しない。
確かにもう一名若々しいのが居るのを知っているが、まさか身近にまたこの様な女性が居るとは思わなかった。

「そ、其れは失礼しました」

「いいのよ、気にしないで？まだ私も若く見えるのね、安心したわ」

「もう、お母さん！」

並べてみると、本当に仲の良い姉妹にしか見えない、なのはも歳を重ねてもこのように若々しいままなのだろう。
内心もの淒く嬉しい。

「如何したんだい、桃子？」

「士郎さん、なのはがシャルルさんを連れてきたわよ」

「本当かい！？そうか、待ってたんだよ。……君は……」

店の奥から出てきたのは黒髪の男性、こちらは歳相応の顔立ちであるが雰囲気が何処か自分の知っている物と重なる。
薄れているが、血と鉄の匂い、戦場に居る時に感じる懐かしい気配。

「始めまして義父さん、私はシャルルと言います。なのはさんの婚約者してます」

「あ、ああ、すまない。俺は高町士郎、なのはの父でこの店の店長だ」

「……後ほどお話を……」

「！……解ったよ」

握手をしながら、回りに聞こえないように小声で話し、互いについて語ることにした。

「それでこの子が……」

「お祖母ちゃん、お祖父ちゃん始めまして、高町ヴィヴィオです！」

元氣よく頭を下げるヴィヴィオに、士郎と桃子は笑顔でヴィヴィオの頭を撫でた。

「初孫ね！嬉しいわ……」

「そうだな、なのはが一番早いとは思わなかったけど、この歳で孫を抱けるとは思わなかったよ」

士郎がヴォヴォオを抱き上げて、桃子と一緒にヴィヴィオを可愛がっていた。

その光景をなのはとシャルルは寄り添いながら、見つめていたのだった。

「では……戴きます」

シャルルの前に広がる一面のデザートデザートの山、其れを見てもまったく怯む事無く手に持つフォークで掬って食べる。

ゆつくりと咀嚼しながら、シャルルの顔は真剣そのものだ。

やがて全ての物を食べ終えたシャルルは、にこやかに笑って結論を出した。

「大変美味しいです、これほどまでの物はそうある物じゃないですよ。御主人が入れてくれたコーヒーも味を最大限に引き出しているですがもう一工夫を、たとえば――とか……」

そこからシャルルの講義のような事が始まったが、ヴィヴィオは勿論、なのはも専門知識に成ると会話に追いつけないので、二人で仲良くケーキを食べている事にした。

暫らく講義は続いたが、外もいい加減に暗くなってきたので、店を片付けてなのはの実家に帰ることになった。

「勉強になったわ、ありがとうシャルルさん」

「いえ、お役に立てたのならば良かったです」

そして、高町家の玄関の到着、扉を開けて中に案内してくれる。

「おつかえりいゝつて、おりよお客さん？」

家の中に入り、リビングで出会ったのは三つ編みに眼鏡を掛けた女性、今度は間違いなくなのはの姉だ。

「此方シャルルさん、なのはのいい人よ」

「おおこの人が！どうも、なのはの姉の高町美由希です。よろしくね？」

「美由希、恭也は？」

「お兄ちゃんなら、今こっちに向ってるって。もう少ししたら帰ってくるんじゃない？」

外国で仕事をしていた兄までこの日のために呼び戻しているようだ。今までかなり好意的に接してもらってるので、かなり気が楽になってきたシャルルは、士郎から呼ばれた、二人きりで会話をしたいらしい。

「行って来たら？今からお母さんと食事を作るから其れまで二人でゆっくりしてきなよ」

なのはの後押しを受け、道場に場所を移し二人きりに成った。

「話と言つのは……」

「君は、今まで人を殺した事があるね？」

直球の質問。

いや、正しくは質問ではない、確認だ。

「はい……過去に数え切れないほどの命を奪ってきました」

シャルルはなのはたちにも既に話した過去のベルカ時代の自分の事を話した。

内容は要約したが王として、国を、世界を守るため、自身の軍事力を持って敵国を滅ぼした事があったことなど、包み隠さずに語った。

「なるほど、それで納得したよ。俺も昔、ヤバイ橋を何度と無く渡ったが、君を見たとき恐怖を感じたよ……………それにしても魔法とは何でも有りなんだな、転生まで可能にするのか」

「ああいや、転生は確認されたのは俺だけです、記憶を引き継ぐのは居ますが、魂その物がそのままの人間はありませんから俺は奇跡から生まれたような物ですよ」

そこからは他愛無い話が続くが、もっぱら過去のなのはと現在のなのはの話であるが楽しく会話をしていた、しかし話の最中、突然道場の扉が開け放たれた。

「ん？恭也か、丁度いい、この人は…………」

入ってきたのは、黒髪で、顔立ちは士郎さんにそっくりだ。

「知ってる、そいつがなのはを誑かした奴だな…………」

「「ん？」」

おかしい、なにやら殺気が凄まじいのだが…………

「今此处で、禍根を絶つ！」

何時の間にか持っていた木刀で本気で切りかかってきた。

「ちょ！？な、何なんだ？」

木刀をかわしながら、様子を窺う。

士郎は何時の間にか道場の入り口まで退避して観戦している。

「士郎さん止めてくれないんですか！？」

「丁度良いし、どれくらい強いのが興味が……」

「う、裏切りっ！？」

「チッ！なのはから聞いていたが、なかなかやる！ならば！」

「む、速いつ！」

なのはは、食事の準備を整えて、道場で話をしている筈の二人を呼びに行く。

「何だろ？何か音が激しいような……あ、静かになった」

音が鳴り止んだが、今度は一転して笑い声が聞こえてきた。なのはは可笑しいな、と思いながら急ぎ道場に駆け込んだ。

「シャル君！何か……——」

なのはは道場の引き戸を開けてショックを受ける事になる。無傷だが着崩れしたスーツ姿のシャルと、何時来たのか解らないが兄の恭也（此方も服の乱れが激しい）がシャルルに肩を借り、抱き合うようにくっ付いている。どちらも額に汗と笑顔を浮かべ、談笑をしていた。

「これが……はやてちゃんが言ってたBL……おにいちゃんに寝取られた……」

膝を付き、頭の上に縦線が見えるほど落ち込んだ。その場には士郎も居るのだが、なのはにはそう見えたのだ、何故なら此方に来る際にはやてに言われた一言が効いていた。

『実はな？シャルル君で男の子にも人気があんなん……』

最初は冗談だろうと思い、気に留めていなかったが。

『ガチムチ系から、細マッチョまで、まあ武術を納めている人間から絶大な人気がやな……』

其れはとても良い事だ、と其れも気に留めなかったのだが。

『此れ、証拠写真』

その写真には、シャルルに顔を赤らめた男が手紙を差し出していた。更に別の写真には、別の男がまたも赤ら顔でシャルルに迫っていた。

「嫌アアアアアアアアアアア！？」

なのはが錯乱、レイジングハートをセットアップした。

「「「……え？」「」」

「スターライト……」

「シャ、シャルル君？俺はとても嫌な予感がするんだけど……」

「ええ、なのはの必殺技ですね……」

「シャルル君止めるんだ！君だけが頼りだ！」

「いや、避けてはいけない気がするんですよ……」

「「そんな事言ってる場合じゃ——」」

「ブレイカアア——！！」

「「「ぐっはああああ！？」」「」」

その日、高町家の道場で桃色の光が発生し、道場を半壊にしまった。

「はやてちゃん、このマイスターの写真は何ですか？」

はやての自室でラインが机の端で見つけた写真について聞いた。

「ちょっとした悪戯や。今日、なのはちゃんが一人でシャルル君を独占やから合成に合成を重ねて、誤情報をな。実際に人気があるん

は事実やし……」

前日になのはに写真と共にBLについて講義を行い、少なからずそちらに意識を持っていくことに成功した。それは、はやてのちよつとした嫉妬心からの悪戯。

なのはの家庭環境と溺愛されぶりからこうなるだろうと予想したはやての策が決まった。

「最近仕事が忙しくて会えてへんねんから、これくらい許してな？」

リインを見ながら可愛らしくそういった。

その時の事をリインは、はやてに縞模様の尻尾と耳が有ったと語る。

E p i s o d e - E x t r a } 高町家にて (後書き)

初めての番外編、コメディー苦手だ……面白いネタが浮かばない。

まあ、楽しんでくれれば幸いです！

Episode - Extra } 結婚式とプロポーズ (前書き)

更新にして最終です。

この番外で最終話になります。
今まで本当にありがとうございました！

Episode - Extra ｝ 結婚式とプロポーズ

マスター、私は何故このような状況になっているのですか？

ネイキッドは現在、デバイス用のメンテナンスポッドの中で色々な計器に繋がれ浮遊していた。

JS事件から早一年と少し、世界は落ち着きを取り戻し、シャルルの仕事にも暇が出来始め、この様にプライベートな時間を過ごせている。

三人の実家にも度々訪れるなど、恋人らしい事もしている模様である。

「言ってなかったか？これからは俺が戦闘に参加するという自体には成り得ない。その所為でお前が使えなくなってしまうからな、今まで通り、俺を補佐してもらう為の処置だよ」

質問に答えながらも、その顔はネイキッドではなく手元の機械に向けていた。

はぁ……それは良いのですが、先程から顔が笑いつぱなしで気持ちが悪いですよ？先程も報告に来たドゥーエさんが怖がって帰っていききましたし……

「しょうがないだろ？なんたって明日は……ってちよつと待て！ド

ウーエが来てた事を何で言わなかった!？」

そりゃ、勿論面白……ゴホン、仕事の邪魔になってはいけなからですよ

「本音が漏れたぞ……?」

その後も、久しぶりといえる主従の漫才は続いた。

その二人が言い合う背後に掛けられたカレンダーには、翌日の日付に赤丸がされ、その下にこう書かれていた。

『結婚式』と……

翌日、晴天であり絶好の日和と言える。

『それでは新婦の入場です』

聖王教会で行われる結婚式。

その場に居る人間は機動六課のメンバーや管理局高官、知り合いた

ちで席が埋まっていた。

司会の声に合わせて扉が開かれ、赤い絨毯の上に足を踏み出す影。純白のウエディングドレスに身を包む姿に女性陣は息を飲み、その隣に立つタキシードがその手を取り静かに歩き出した。新郎の下に辿り着き、いよいよ誓いの言葉が紡がれる。

牧師の姿をしたシャルルによつて。

「ッてちよつと待て！この流れから言つて、此処で結婚するんは私ら三人ちゃうんかい！？何でシャルル君が牧師の格好してんねん！」

「いや、結婚なんてまだ話してないだろ？」

「そうやけど、可笑しいやろ！このタイトルからして誰も想像してへんわ！」

「こらこら、メタ発言はよせ、それより神聖な式中だぞ？静かに……」

「ぐっ！失礼しました……」

と言つて会話が有ったとか、無かつたとか。

「んっんっ……ゴホン、汝ゼストは、この女メガーヌを妻とし、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の

者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「誓います」

「汝メガー又は、この男ゼストを夫とし、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「誓います」

その後も滞りなく終わり、幸せそうな顔をした二人が誓いの口付けを交わした。

「ウオオオオー！！ゼストオオオ！良かったなあ！うおおおーん！」

『ああ、本当に良かったね。三人で酒を酌み交わした事が懐かしいよ』

親友の結婚式で号泣するレジアス。

そして何故かモニターの向こう側でスカリエッティも泣いていた。

この三人、如何言う訳か仲が良くなり牢から出れないスカリエッティの為に三人で牢の中で酒盛りをしていた事すらあったのだ。

その現場を発見した局員は「飲み屋に間違えて来てしまったかと思

った」と語っていた。

「それっ！」

式の殆どが消化され教会の外に出たメガーヌがブーケを空に目掛けて投げた。

ブーケは弧を描くように飛んでいき、女性はその後を追っていった。その着地点には丁度ある人物が立っていた。

「えっと……は、はは、は……」

牧師の格好から着替えて出てきたシャルルの手元に収まり、女性陣からジト目に曝された。

だが若干名、顔を赤くして「次は私達だね」と会話が弾んでいた。

「あゝあ、それにしても私たちの結婚は一体何時になるのかなあゝ」

はやてがわざとらしく大きな声で口にし、その場に居る人間は苦笑いだが、シャルルだけが若干居心地が悪そうだ。結婚式が終わり、久しぶりに家族として一堂に会した食卓に着く。シャルルになのは、ヴィヴィオ、フェイト、エリオとキャロ、はやてとヴォルケンリッターのメンバーが一つに食卓に着くには少し手狭である。

「それにしても、幸せそうだったよメガーヌさん」

「ゼストは事件以降、小まめに見舞いに行ってたからな、遅かれ早かれこういう事態にはなっていたさ」

ゼストはシャルルの直属として働く傍ら、暇な時間は全て彼女の為に使っていた。

ルーテシアも行動を共にしていた時間が長かった為、自然に父親として接しているようだ。

「良いな、私達も何時か……」

結婚式を思い出しているのか、フェイトは顔を緩ませる。

「そうだ、何時になったらはやてと結婚するんだよ！はやてがいつ

も愚痴ばっか言ってたぞ？」

「そうよ？いつも聞く私達の身にもなってくれるかしら」

「グイーター！？シャマルまで！？」

「こつちも似た様なものですよ、フェイトさんは会ったびに、まだかまだかって……」

「最近では、何日会えない、二人だけずるいとか言ってるもんね」

「ちょっと二人とも！？」

今思い出したばかりに、それぞれがそれぞれの愚痴を口にする。

「む……うん……」

シャルルはまたもばつが悪そうに、顔を顰めて何かを思案し始める。
なのははシャルルにそつと近付いて、なにやら耳打ちを شدした。

「ああゝ！何や何や、二人して内緒話なんかしよって！一緒に暮

らしてるからって鼻屑はあかん！」

現在なのはシャルルとヴィヴィオの三人で暮らしている。

ヴィヴィオがまだ小さいと言う事でこの二人が親代わりとして、共に生活する事になっていた。

「内緒と言っか……」

「ま、まさか、私らの事はもっいらんのか！？なのはちゃんだけおればそれで良いと！？」

「そんな……シャル、酷いよ……」

「そ、そんな訳！——つちよ！？痛い痛い！コラなんでみんなして俺を囲んでるんだよ！？」

はやてが冗談めかしているが目がマジで、フェイトは涙腺が崩壊する寸前。

流石に慌てたシャルルだが言い訳するよりも先に、ヴォルケンリッター＋エリオ、キャロがデバイスを何時の間にか起動させ囲んでいた。

「お前、まさか主を捨てるつもりではなかるうな……」

「事と次第によっちゃあ……」

「許しませんよ……？」

「……………」

シャルルを囲んでいる守護騎士たちが順に話しかけてくる。
一番怖いのは無言で人型になり、拳を構えているザフィーラだった
りする。

「僕らも同じ理由ですけど」

「フェイトさんが泣いてるのは流石に見過ごせないな、と……」

エリオは首筋にストラダをキャラはフリードにブレスの準備をさせている。

「あああ！もう！解ったよ、全部話すよ！だからデバイスを全部仕舞え！フリードも口に溜めてる火の粉は飲み込みなさい！」

「クキュッ！？ング……ケハアッ！」

「フリード！？」

多少ハプニングはあったが、その後皆落ち着いて席に戻っていった。

「ああ、これはもつと形になってから言う積りだったんだが……
今家を建ててるんだ」

頭の上に？マークが浮かんでいるのではと言うほどののは以外が首を傾げる。

「皆で暮らすには此処や他の家だとしても狭いからな。新しい家は、ここに居る人間が暮らせるように大きな物を建てている」

「ええつと……それじゃあ？」

「新しい家が出来たら……」

そこでシャルルは言葉を切り、三人を見つめて言葉を紡いだ。

「結婚しよう」

「そ、それってプロポーズ？」

「そうだ」

「……………ほふう」

「「フェイトさん!?!」」

「良かったですね、主……………主?何故泣いておられるのですか!」?

「え?ほ、本当や……………何や安心したら涙がでてきた……………婚約して二年、結婚の話し全然せえへんから興味なんか無いと思って心配やつたから……………」

フェイトは腰が抜けたのかその場で尻餅をついて、はやてハいろんな感情が込み上げて涙を流していた。

「グスツ、……………それでその家って何時ぐらいに完成するん?」

「そうだな、建築に使用する素材から何から何まで、全てを指定して建築するから、恐ろしく時間が掛かりそうだ。……………三年と少しくらい?」

「長ッ!」と皆一様に驚きの表情を浮かべる。

通常の家は一年程度なのだが、その倍程度の時間を要して作るのだから、驚くのも無理は無い。

「やっぱり長いよ、そんなに豪華にしないで良いからもっと早くならないのかな？」

「しかしな？豪華といっても厭味にならない程度だし、俺達の代の後も使える様に耐久年数も……」

性格なのか、やるからには何処までも突き詰めて事を成す為、素晴らしい出来になるのだが反面、譲歩をしない完璧主義だった。

「そうか、あと三年待てば良いんだね。嬉しいな……ね、ねえシャル？今晚は私の家に……」

明確な時期設定がされたことで三人は顔を赤くして、表情を綻ばせる。

そしてフェイトは嬉しさの余り露骨な誘いをしたのだが。

「ダメや！今晚は私の家に来るんやから」

「ええ！？そんなの聞いてないよ！？ダメだよシャル君の家は此処なんだから！」

そこで三人が口論するかと思いきや、一塊になりヒソヒソと相談を始めた。

「泊まれば……」

「三人一緒……」

「明日は休みだし……」

会話の端々から感じる不穏な気配。
死刑判決を待つ囚人の様な心持でシャルルは会話が終わるのを冷や汗を書きながら待っていた。

「『シャル（君）今日は一緒に寝ようね？』」

上目遣いで此方を見てくる三人、流石に三人一緒と言うのは持ちそうに無い、いろいろな意味で……
そのため助けを求める意味を込めて家族に視線を向ける。

「それじゃあ、ヴィヴィオ？今日はお姉さんたちと一緒に寝ましようね？」

「はぁい！」

「僕らも帰ろうか、フェイトさんは今日は泊まりみたいだから」

「そうだね」

既に帰り支度を終えていた、しかもヴィヴィオがシャルマルに手を引かれお泊りセットを持っていた。
子供が居るからと言う良い訳が消えてしまった。

「え、ツと……」

「シャル君、嫌なの？」

「ま、まさか！」

「それじゃあ、ええよね？」

「一緒に……？」

「そつだよシャル……えっと……や、優しくしてね……？」

悪い気はしないのだが、流石に三人一緒は。

「あ、ああああ、あああああゝゝゝ！」

身体が持ちそうに無い……

Episode - Extra 結婚式とプロポーズ（後書き）

如何だったでしょうか？結婚式は詳しく知らないので適当です。

実はまだ番外を色々書こうかと思ったのですが、ぽつと出で字数が稼げない話ばかりだったのと、このままでは際限が無いと思い、番外編は二つのみと言う流れになりました。

因みに結婚はまださせません、ここでさせてしまつとヴィヴィッド編への入り方を見失ってしまいそうだからです。

それでは此れでお別れになります！

近いうちにまたvivid編にてお逢いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7866l/>

魔法少女リリカルなのはStrikers 帝王の灯火

2010年11月22日20時29分発行